

文など御書候はんには。相かまへて俗語は入まじき事と御定め候へし。扱雅俗の分ちは。俗語の方少々學ひ候へは。やゝ易知事に候。俗語の學も。學問有之上には。一すぢ學ひたるかよく候。心得たがひ無之のため。且は中華の微細の風俗までも知申候へは。學の助け勿論に候。されども學問無之内はさのみ用立不申候。今程學問無之者の。かたはし俗語はかり心得て筆談など少々書散し候へは。此方にて文字の取廻しに疎き者は。はや驚き候ゆへ。其身もいつしか俗語を文章と心得居候事有之。見る人も皆欺かれ候。其心得可有事に候。必竟中華の人も學問人才無之ては。文章は成不申候。又習受さるうちは。一向書も讀め不申候事明白に候。日本にて伊勢源氏物語などを見て。たやすく解する事なく。まして假名文章を其如くに書候へと責候はんには。人ことに書へき事とも覺えず候。かれも又只このことくに候。

一潤色したる雅言の書の内にて。古今品位のわかれたる事。第一の心得にて候。古今にて分ち候時は。先六經。次に戰國。次前漢。次に後漢三國。次兩晉。次宋隋唐。此内後漢より唐までは。八代の間文章次第に誹に近く。對偶はかりの様に成來り候故。古文の體おとろへ候とて。韓柳は別に古文と稱し一流を書出し候。されども當時は二家の徒のみにて。世上は猶時行の文にて。宋の王元之などの時までも。大畧同じ格に候。歐蘇より韓氏を尊尚し。これより古文の名目も盛になり。其格にあはさるは時文と名付て不用。後世まで大抵韓柳八大家ともてはやす事に候。明三百年の間は。詩

文も様々嗜好有之。一樣には申かたく候へとも。大抵皆八大家にて候。たゞ別流の大家には。正徳中に李献吉何景明などは。世舉て韓柳氏をもてはやし。いつしか本を失ひ候により。かの韓柳氏は古へより出候へとも。いづれも上手にて別に一格出來候ゆへ。必竟韓氏に至りて古文はやふれぬと稱し別に又一格いにしへにかへりて書出し候。其後嘉靖隆慶の時に至りて。李于鱗・王元美・汪道昆出て。古文辭と稱し。益古き格を書候。王李などの趣意は。達理脩辭の兩事は。六經以來相兼るといへとも。韓柳を學ぶ者。宋朝より漸理を多く説事に成り。脩辭の方は不足。唯理さへ明白なれば好と申様に成行候故。其弊をため直して。古文に辭の字を加へて。古文の辭を脩するを第一と書候。其後には又袁中郎・鍾伯敬などを始として。王李か古文辭を破り候流儀多く出候。大方俳諧口のはつみたる様に書候一流にて。此風明の末まで行はれて。今清朝にはいかゞ候や。陋見にはよろじき文章も見え不申候。右古今諸流の差別有之事御心得候て。其上には何の流風成とも。御好み次第に御學ひあるへく候。たゞ虎頭蛇尾と申様に。あと先不都合にて。油に水の入たることく成事有之物に候間。其御心得專要に候。左氏司馬又六經などの文の様に書たる中へ。後世めきたるわかき語の入たるは。甚た惡敷事勿論に候。六朝の體ならば。其姿の一樣に。潘安仁二陸より下。齊梁の美麗なる様に書事に候。又後世の格に御書候はん時は。古書の詞を加入候に。時によりて其まゝには用ひかたき事も有之候。前後其文の構へによりて。取合あじきは。たとひ古書の奇なる語にても。却て無用の冗

語と成候。

一詩書の詞を取用ひ候にも。遺ひ様にてわかく巧麗に成候事も有之。又必しも出處無之詞にても。つゞけからにて。古書のこと葉の様に奇古に聞え候用ひかたも有之。古書の語勢はかりを取て。文字は取かへて用ひ候事も有之候。韓柳王李などの用ひ様を。古書に御考へ合せ。ひたと御熟覽あるべく候。すへて文字も語勢も據有る様に用ひ候へは。をのつから文章も實大に見え。意味もすぐ聞え候事勿論に候。

一文章諸體見分の事。先議論叙事と賦辭歌頌の類。皆替り有之候。一書一篇の内にも所々其品分れたる事に候。賦辭歌頌の類騷類も同事に候。其外弔祭の文贊銘なども一類にて。是は詩と文との間のものにて。古人も草木に竹有とごとくと申置候。扱史傳紀事の體は。春秋左氏傳司馬班固より。歴代の史録まで。もとより優劣巧拙ははるかに替り候へとも。大様其體史筆の法定り有之候。傳記行狀墓誌碑文などの類。多く叙事に屬して一類に候。禮記易論語孟子莊子歴代經義論文の類は。多く議論に屬して。是又一類に候。序論說解などは議論に屬し。記志は叙事に屬候。或は碑文にて始終議論を書。又序などに始末ともに叙事にて云終り候も有之候。又議論の中に叙事を交へ。叙事の間に議論を交へ候など。皆常の事に候。右の御心得にて。古書御覽候節。先何格の書と眼を御定め。扱自己の文を作り候節。其本題に隨て。それ／＼の古人作例をも御考。御書わけあるべく候。又右

之外に注家の詞。後世一種隨筆の類。尺牘の體など。次第に後世出來候物にて。古今通例の文章とは少替り有之候。是又不吟味に候得は。一樣と覺え。序論など書候時。古人注語隨筆杯の様に成。何の見物も無之事。やゝもすれは有事に候。尺牘は文選など其外韓柳文などに有之候書と申とは違ひ申候。注家の内にも。鄭玄か禮注。杜氏か左傳注。郭象莊子注。劉孝標世說注など。これ又一種の奇文にて候。唐以後の注は。たゞ其事を解釋するを專としたる物故。文飾は無之候。又直解口義の類は皆俗語に候故。勿論の事に候。四書朱注なども。一通り釋義を專一に説たる物に候故。俗語は無之候得とも。注家の文にて候。已に大學の序と注と大に替りたる事に候。又朱子の注中に。程子の語録などの詞を引被申たる處は。其語はかりにて。自古の注は一字も俗語は無之候。諸體雅俗不分者は。朱注に有之文字と思ひて。文章などに用ひ候事往々有之候。朱注の語はかりも。文章の語には格別に候を。語録などの語まで用入候事。此方の學者時々誤り候事に候。一韓柳八大家の事。大抵右之分にて御心得可有之候。如仰八大家と申候も。明の茅鹿門などより立候事にて。其實は六家も韓柳より出候故。下等に相見え候。然れども歐文のおどなき。蘇文の働きたるなども。皆歴代に數人の文にて候へは。心得に時々御覽あるへし。されは自己文章篇法取廻のためにも成候。但一つ心え有之事に候。歐蘇の韓柳氏古文を唱候以來。後世及第の節。經義の程文を立候時。皆其格に書候事に成行。初學よりたゞ其格はかりを習候事にて。古書をも不見。學も

不博。其文はかりにて間を合せ候事。中華におゐて。後世通病に成。必竟人才のすくれたる者はまれに候故。はなはた弱き文章一種出来。及第舉業の文。皆其通にて。誰にても官人に成候程の者は。書候事に成申候。謝氏の文章軌範などを始として。古文何々と名付て。今以ひたすら渡候書物。皆以及第の文の稽古のために。或は書賈のこしらへ候物もあり。其格に合候文計りを編たる事。十に八九は有之候。是にて時行のほど推しるべく候。次第に其跡に付て學候故。漸々に下り候事と相見え候。かゝれば明朝などにて。名匠ともは。時文今文など、名付て。官人に成候後は。及第向の文などは甚愧る事にて。其文格の師をは時師と名付て。無文なる者に申候。八大家流御學ひ候は。韓柳を肝要に御覽候て。六家位にも出来可申候。又韓柳の如くとならば。漢以上の古書に熟し。韓柳をも楷梯と見候ひて。古に立上り歴代を見下し候て書候事に候。

一明朝才子古文辭と立候者の第一に學候處は。十三經は勿論にて。其外に十三家と申候を立。是を注を除きて本文はかりを。比年に一周し。ひたと反覆し見候て。文氣を助け。漢以後の書を不讀と立たる物に候。十三家は。

左氏 左傳國語 國策 老 莊 列 呂氏春秋 淮南子 屈原 宋玉 荀子 司馬遷 班固 文選

右之通に候。文選は漢以後にて候へとも。天下の富有の名文とも多く候故。かならず熟覽すべき事に候。いか様にも十三經と右之古書ともを朝夕熟覽候は。文章のためはいふまでもなし。學力も

甚た丈夫に成申事に候故。學者の不涉して不叶物に候。韓柳を學候も。此外は無之候。

一文章は始學入時。何れにても。韓か柳か一集一人の作を我師と定め。何文を書候とも。其文の通に似習。外に見候書は助けと定め。段々書もて行候内。少文章の格合も手に入候節。又々古人の内何れをも法に取て書候へは。夫より自由にも成行候。成就の上には。とかく我持分の格出来る物故。則一家をも立られ候。殊に王李などの古文辭と申は。法度も深く。見えにくき物に候故。先韓柳などの内。法の見安きより入候て。其上にて古書の格をも溯りよく會得し。于鱗など古書を後世に用ひ候所に氣を付候へは。古文にも入られ候。文章の格未熟の内より。古書のこころかゝんとすれば。前後無章の物に成候。必竟韓柳を學ひ候て。たとへ甚奇古成古文にならず候ても。大抵文章の一家は成熟する事に候。

一惣して學文のためには。和訓をはなれて書を見習候かよく候。とりわき文章などは。和習のぬけさる間は顛倒も不見候。唐本無點の物はかりを日夜に枕藉し。ひたと句讀段落を付分見候得は。一通中華語勢文字の長短助字等も見え分れ候故。自ら和習もはなれ行候。すへて助語を一兩字取はなし。是は日本の何と申詞にあたるなど、詮義仕事。甚不案内なる事にて。一つも用なき事に候。助字は材木のくさひの様成物にて。取はなし候へは。常の木の切れにて候。其所へ用入候上にて。重くも軽くも義理も勢も出候。中華の人文文章を學ひ候にも。古書文章の助字は。常に用ひざる事故。不學

候ては知不申候。皆古書の用ひたる前後につきて。考出し知事に候。すへて點有書を見候時も。假初にも句讀を分ち見候事專一に候。則中華の讀法にて候。惣而文章には。字法句法章法篇法に御心付御見分候へ。句讀段落をひたすら仕習候て相考候へは。漸々に夜の明候やうに見え候ものに候。前々助語の心得に書捨候物。弟子衆の方に有之候間。取出し可懸御目候。一詩を學候書物之事御尋に候。去年中書賈に申付。李于鱗唐詩選刊行致させ候て。愚案を例言に書加へ候。板に行はれ有之候間。御覽候へし。大畧心えの事書記置候。其内に論し候。高廷禮か唐詩品彙は御所持にも候は。時々御覽有へく候。三唐の少しも名高なる詩は盡申候。殊に品彙に目錄を出し候所ごとく御考候へ。三唐の詩人の巧拙盡く論し置候。又宋の末の嚴滄浪詩話。是を中興の詩論のよき書と定め候。又胡元瑞詩藪は。和刊にも有之候。御覽候へし。詩を御案候時。たゞ新敷面白き事を云んと趣向御案候事可有之候。甚た惡敷事に候。只古人の風體並に詞のよきを手本として。ひたすら其姿に似習んと案し候事宜敷候。其故は古來風雅の情と申物一種有之候。初盛唐はすくれ。晚唐宋などは惡敷候と申も。律絶は近體にして。唐に出來候物なから。初盛の詩人は。古來風雅の意を失はず候故。すくれたると定め候事に候。晚唐は小刀細工に成り。宋朝は理窟勝に成候て惡敷候も。ひとへに趣向の珍敷事を云出んとたくみ候程に。彌面白きは彌賤く惡敷物に成候。三百篇を始て。漢魏六朝の古詩樂府など。皆一例に風雅の情と申ものにて候。風雅の情とは。我身

に罪もなきか。君親などに思捨られたるを。何ほど苦にいたし候ても益なく候はんに。孟子の所謂恕なると申様に。君親のいたらざるは是非なし。我身さへ誤りなくはそれまでよと思ひこり。さらしくと明らめ苦にもせざるものあらんに。後世理窟の上にては。愚痴にもなきよき合點よ可申事なれども。詩人の情は左にはあらず。益なき事は我もしりて思ひかへしくすれども。ひたご心にかかり。悲しみ憤りも出候餘り。其情を詠歌して。せめて君親の萬一も思ひかへし。人もあはれと感ずる様に。諷諫にも用ひ候事。是則風雅の情にて候。又たとへは友などに別るゝ時。平生の好みを思ひ出。別後の恨うさをなげき。共に涙を流してあはれを述るなど云様の事。宋以後理學計の目よりは。手ぬるき兒女子の様に見え候事なれども。そのすなはち風人の情にて候。古三百篇も。詩の教は溫柔敦厚をもととする事にて。必竟君子の志を述る物にて。ものごとに温和に。人をも淺く思ひすてす。云出ること葉も婉曲にして。何となく人の心を感じしむるを專一と仕事故。自ら風雲花月に興をよせ。詞の上にはあらはれざる事とも多く有之候。詩經を六經の内に入。古聖人の教も詩書と並へ稱候て。人に御教候も。此渾厚の情を失ざるを君子の徳となし候事と相見え候。然されは夷狄の徑情直行。小人の態に成候故に候。詩のみにもあらず。古の聖人の道皆如此に候。能々御心付御覽候へし。扱詞をゑらみ候も。同じく悲しみ喜びを述候に。詞によりて格別輕重雅俗もかはり候故。詞のゑらみ第一にて。三百篇以來皆隨分に詞を撰ひたる物に候。吟咏のとなへからに

て。何となく打上りて聞え。それとはなくて人の感を起す様に作り候事は。詞と風體を第一によく仕立不申候ては成かたく候。此御心得にて。古詩にても唐詩にても御吟味候へ。皆其通りに候。拵趣意と申は。さのみ事かはりたる有様も無之候。大抵古より唐まで同じ様の事にて。少々宛人々の志見え候計に候。それ故にかへりて後世の詩より一入かたき物に候。晩唐の細工に成候は。元來詩をもてあそひ一通のやうに成候故。詩の位も下り候。宋詩の理窟は彌風雅に遠く成行候。すへて理を快く云とり候事。後世の學流にて。古聖賢の詞にはまれに候。鳳鳥不至河不出圖など、申聖言。何事もなき様に候得とも。無限感心も起る事に候。殊更詩は諷詠する物にて。元來理を云盡すへきための具にもあらず。すへて理の上へあらはれ出たるはいやしき物にて。よく云とり候までにては。たとへ面白き事にても。手をはたと打たる計にて。何も感は残らず候。すへて詩文は君子の詞にて候へは。必しも匹夫匹婦によく通するたための物にては無之候故。只何となく風景情事の間にもたせ置候へは。無限意味も含み。誠に君子の詞にて。おなじ君子は聞とり候事に候。然れともこの凡人の情。始にはおほろにて。しかと我物に成かね候故。先古人の姿に似習事よろしく候。此品々の事は。愚案に存付候はかりにてもなく。大抵古人詩話のよろしき書には。此心にて論し置候。此味不知候内は。古人の詩話も不通候。

一詞と風體を見習候は。唐詩選などのいたく吟味して撰たる詩はかりを法に取候事よろしく候。すへて詩家の詞と申て。一種別の物に候。世上不案内の詩人は。詩の詞も文のこと葉も分ちなく覺候程に。をのつからあしく聞え候。經書の字も。律絶などには大方は用かたき事多候。佛經論の詞。六朝より唐世迄名匠とも多く用ひなれ候故。能こと葉多く候。禪録などの語は。文飾も無之故に。詩に不入候。すへて隨分響のよき文字を取申事にて候故。詩家の文字は格別の物に候。我は儒者の詩成とて。何の差別もなく。經書の字を用ひ候事など。世儒におほく有之候。とかく古人の詩に用ひたるをよく、御見分候へし。考閱の書。藝文類聚初學記など。唐に出來候書能候。文選はもとより詩家の肝要に見候物に候。唐人材を六朝に取と申も。文選の事に候。唐にて甚た行れ候書故。過半は文選より出候事とも多候。又故事は世説蒙求などに出候故事。皆詩に入候てよき事多く候。事文類聚など。中古世上もてはやし候得とも。後世の故事多く出候故。詩に用ひ候て。何とやらん詩からも古雅ならず候て惡布候。古人も其事は申置候。又世上に用ひ候圓機活法。是又大俗なる書に候。元來詩學大成韻學大成を一つにいたし。書賈の欺き書物にて候。詩學大成も元來大俗書にて候。益なきのみならず。甚後學を誤る事多く候。其らは追々御工夫にてしれ可申候。卓氏藻林と申書は和本にも有之候。や、よろしき物にて。殊に作者もたしかに候。すへて詩に用ひ候は。盛唐までの典故文字に過す候とて。唐までの文字を取出し申候。御用ひ可然候。五車韻瑞などにて韻字を取用ひ候事。是至て不通の事に候。韻字を取用ひ候は。殊に吟味すへき事なるに。韻瑞韻學などに

てそのまゝ用ひ候事。あるべき事とも覺えず候。大方は世上一同行はれ。古人の句にもしか／＼あれは。妨げなしとおもひどり。不詮義に用ひ候事。謂れなき事に候。古人名高き者にも。悪句はいかほとも多く有之候。よきをえらひ候事專一に候。されは初心の内は。そのえらひ分れざる物に候故。とりわきて悪敷不吟味の書は。害をなす事多候。能々御心得候へし。

一僻韻險句とて。遠き熟せざる字を。韻にも句にも用ひ候事。盛唐になき事に候。故事も僻事とて遠き面白からざる故事は不用がよく候。悪敷心え候へは。何とそめつら敷人のいはざる故事を撰出し。ひたすら僻事を用候事。不通の至に候。宋人一代是にあやまられ候。かへす／＼あるまじき事に候。唐詩又明朝にても。才子共の用ひ方。御心を可被付候。たとへは九日の詩なれば。幾度も登高萊蕪淵明か故事。龍山の會の故事に不過。功者に候へは。是を時にとりて色々自由に用ひ候事に候。

一詩の諸體分ち候事。御心え專一に候。五言古詩。七言歌行。五言律。七言律。七言絶。五言絶。五言排律。皆々體格別の物に候。古人の詩にて御見分御心得候へし。或は絶句に用ひ候ては。甚た響かざる字にても。律詩に入候ては相應なる有之。律詩に入候て弱く聞え候文字にて。絶句にては流暢成も有之。律絶共に用ひかたき文字も。排律などに入候て。典麗に聞え候も有之候。其餘古詩歌行に入候字。近體に難入文字多く候。是を分ち候心得は。始の間たとへは七絶を作候内は。ひた

すら絶句ばかりを習熟し。大様此句からの物と申規矩胸中に出来る物に候。扱又五律に移り。又其通りに古人名匠の五律計を熟候て。それより次第に七言律古詩にも移り候へは。自然に其格分れ申候。其助けには詩數などの吟味評論有書をひたと御詮義可有候。其内五言古詩は文選の體を法に取申事宜く候。すへて詩を作り候時。題にはり。あるひは漫興に意を命する時も。此事は七律に相應。此趣は絶句にかなふへしとある事を。能々心え候て。體を定め候事に候。相應せざる體を作り候へは。いかに詞を撰ひ候ても詮なき事に候。

一すへて詩をすばく細くつくる事と巧過たるとは悪敷候。三體詩などに入候詩。多く晚唐の枯瘦したる詩にて。法をざるにあしく候。寒乞の相とて。古人も笑ひ候事に候。雄渾悲壯など申も。おほかたすこし大かまへに作るうへにて申事に候。ことさら七律は雄大なるやうにつくる事勿論に候。七絶は流暢を專とし。こと葉も一直下になる様にすへき事宜敷候。

一明朝の詩も。一樣ならず。唐詩をよく學得たる詩共は。いかにも朝夕御らん候へし。唐を後世に引うつしとまりまはして見せたる詩ども。ことさら心得たすけにも成申候。唐詩はかりにても數すくな候故。才氣を益し候ためによるこく候。

右は十に二三思ひ出候まゝに書付候間。大畧にて候。必竟深奥の事は。筆にも口にも不盡候故。古人の教も自得を待候事に候。此教條を一隅として。反覆御自得候へし。以上。

南郭先生燈下書終

南郭先生燈下書

享保十九甲寅秋九月

皇都書鋪

丸屋市兵衛刊行

二條通柳馬場西入町

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

拙齋遺文鈔

復柴博士書

此度横野子與兄啣。阿波君候之尊命。弊廬へ御來訪被下。兼而正事被爲及聞召候由ニ而。爲御聘物金子五百疋眞綿三把拜領被仰付候。曾而不存寄御事。甚恐入奉存。謹而頂戴仕候。隨而御儒職ニ被召出。俸祿二百五十石可被下置之旨。委細御演說承之。重々忝仕合ニ奉存候。乍然先生兼々御熟知被下候通リ。正鷲材薄力謏劣無狀之者。大藩學政之任ニ與リ候程之材力。毛頭無御座候。且年來多病之上。客歲六月ヨリ臍月迄。瘡痢臥蓐。至今春漸々平癒仕候得共。老憶疎懶殊ニ甚敷。窮巷中之講說サへ久々相止居申候仕合ニ御座候得ハ。筮仕之義者。一日モ勤マリ候筋骨無御座趣。早速横野兄へ披肝。縷々御斷申上候。此段乍憚御憐察被下。宜敷御取成。御斷被仰上可被下候。但草莽之一惰民御優待被成下御事。誠ニ賤宗之面目。寒郷之榮。重々難有感佩仕候。高尚其事ナド申様ナル傲睨不遜之心底ハ。決而無御座候得共。多病老衰不堪拜趨候故。不得已強而御斷申上候マ、此段モ乍憚御合置被下。宜敷御斷被仰上可被下。偏ニ奉願上候。

先生御内々御深懇被仰下候趣。并ニ賴文學ヨリモ縷々勸諭被申聞。逐一謹承。深領厚意候得共。右

之仕合。無據違來命候段。甚以恐入奉存候。萬惟御垂察被下。失禮之罪幾重ニモ御容赦可被成下奉希候。

孟春上元之日(寛政二年)

正頓首再拜

復賴文學書

一此度阿藩徵聘之事。縷々勸諭被下。柴博士ヨリモ内々ニ而被仰下。謹承仕候。乍然カネテ御熟知被下候通。庸劣無似。且多病老衰。加以去年病後之羸憊候得ハ。イカ様之御優待ニ而モ。仕官ハ決而一日モ勤マリ不申候。且又先師魯堂同様之格祿可被下之趣。甚以恐入奉存候。自揆自省候處。先師之學。正才學之高卑。寔ニ岑樓寸木之譬不啻候。旁以不能應辟就之徵之趣。委細横野兄へ披瀝申斷候。此事ハ柴博士へ具ニ申上候マ、御聞被成可被下候。禮卿へ露封書被遣。拜覽後早々神邊へ旨僧撰書共ニ轉達イタシ候。阿侯賢明恭儉。尊道好學之御様子。貴書中及博士書中ニモ被仰下。且此度御聘幣兩種拜領被仰付。御使者口演之御趣意等。誠ニ古昔卑禮厚幣。細貴下士之遺風。御慕被成候御事。恭喜之至。奉欽慕候得共。右之仕合故。不得已辭退仕候。始自隗之思召ニ御座候得バ。自分已後定而千里之駿。追々駢集候而。學政翕然。維新之化行乎其國可申ト遙想仕候。服部先生モ慈憑被下候由。禮卿へ之御書中ニ被仰下候。偕々不存寄事ニ而。大藩之徵聘。諸賢之推獎ヲ蒙リ候

御事。寔ニ賤宗之面目。寒郷之光華。甚以大慶仕候。鄙諺所謂遠いが花香開ての千兩見ての一兩と申事存出し。不堪媿赧候。マタよく出るよりわるく引こめトヤランモ申ナラハシ候得バ。強而御斷申上候。御使者へ申答へ候ひき。心緒萬惟御憐察可被下候。

孟春十六日(寛政二年)

阿波國臣横野允文 字子與俗稱多門 街君命來自東都。徵余儒職。因辭不就。賦此奉謝。分得韻支

村落春寒嬾臥時。忽驚星使過茅茨。大藩徵聘真卑禮。諸老舉推逾感知。雨霽泥龜偏曳尾。風恬斥鷃

益安枝。君侯如聞狂奴態。為報驚駭不足羈。

復命憑君善為辭。菲才詎敢望先師。讜言鯁議志雖在。矩步繩趨病不支。有若寧升尼父坐。候芭未識

子雲奇。莫言鴻鵠弋難得。禽尙遺蹤聊可追。

魯堂先生嚮仕阿藩。藩旨欲以吾為狗彘。故云。

有阿州之聘也。柴博士栗山賴文學千秋皆寄書札勸獎。千秋又有露封書寄菅禮卿。使予轉致。予

已以老病固辭使者。始閱露封書。詳述筮仕事云云。因戲賦一詩。併附其書。致之禮卿。其

詩云。

辟世蒿來未飽閑。幡然思欲別青山。堪慚猿鶴舊儔侶。漫逐鸚鵡新隊班。

蓋調謔也。禮卿果以為信然。齋書亦從更之。余廻答以其實。又疊前韻以明本志。

量材量力自請閑。蚊背奚容負泰山。誰謂高風不屑就。難將老病逐清班。

阿藩使者辞去。乃有此作。

感懷

南邦侯伯遠旌招。其奈病羸難折腰。腰脚酸疼心惟懶。終身只合伴漁樵。
元識熊魚難並兼。勞心何似養心恬。朱門避聘好題目。贏得自今詩料添。
何用一官更假人。清閑富貴逐年新。滿園幾樹梅花色。占得巢居閣上春。
隱槩嘗逃名利關。江山花月好怡顏。堊門忽有侯門聘。忙了先生幾日閑。
遁名仍被虛名累。餞使辭徵事未閑。唯有梅花枝上月。吟樽相對此開顏。
吟窓晒彼燭三條。折桂秋寒繼晷燒。孰若春園高臥穩。花間明月照元宵。

(栗山ニ贈ル書)

自石原生承候へハ。日々御公務御繁多被成御座候由。御劬勞之程遙想仕候。乍然明良合德之時。千載奇遇。寔關奎運之會候御事。乍憚奉敬賀候。

副啓

端陽後一日。頼千秋枉過。一夕得款晤候。歐公五古御親寫惠賜被下。忝拜見仕。御寓意之趣。感謝不淺奉存候。早々袞裝珍襲。永充家珍申候。

國鑑秦記後論之御旨趣。竊に自千秋傳承仕。正大至當之御論と乍憚奉存候。温樹避嫌御尤に奉存候得共。畢竟天下公言之事に御座候得は。何とぞ追々拜覽仕度不堪瞻渴候。入孝出悌之章御和解。且又感佩仕候。昨日備前學校親友より寫傳候而。前月廿五日林祭酒へ被仰渡候御書付。奉拜見候。學政振興之御様子。寔に天下同慶之御事。草澤之吾儕輩迄。乍憚恐悅之至に奉存候。而今而後。異學邪説は疎然屏息。皆歸白日之魑魅可申。愉快亦不少奉存候。加賀人所著君道大學要解一本。亦從千秋傳觀仕候。發蒙精義同様之恠妄。可憎可歎義に御座候。先年書懷鄙詩結末に。東方安藉秦皇手。焚盡後儒非聖書と申候。對這等編而も。亦復唱此句候。加様之類は何とぞ印板御禁絶被成度事に御座候。然るに本佐録。熊澤或問等有益之書は。却而近來絶板とやらん。賣買御停止とやらん傳承候。這樣之事。田舎漢了簡には。一向難解得奉存候。甘露白雉之嘉瑞等。追々傳承仕候。誠に泰和文明之符。海内人民一同奉恐悅候事に御座候。客歲叔藏膝子歸京後。大日本史校正被致。追々刊布にも可相成や之由。先比自京友申こし候。是亦一大盛舉と乍憚奉瞻望候。白石先生藩翰譜。近日涉獵仕候。書法嚴整。事實簡明。近世無比之好書と奉存候。寒泉先生御續編。定而追々御出來可被成奉。遙想候。菅晋帥冬の日影電覽被下候由。被仰下候。即其旨菅生方へ申遣し吹聽仕候。之子も病懶は正同様之者に候得共。才識は不啻十倍候。詞章最巧緻にて。千秋兄弟熟知親友に御座候。兼々絳帳下渴望居申候而。毎々御尊申上候。今春參調仕候藤井料助は。即菅生門人に御座候。其節も正へ御傳

語被下。忝奉存候。牧宇右衛門も參上仕。惣兵衛和介輩より微物差上候。御挨拶被仰下。毎々煩瀆却而恐入奉存候。宇右衛門到今歸國不仕候。他國之義は存知不申。本州邊近來別而訟獄繁冗。可任事に御座候。先書安吻瀆聽候通。郡國一同追々興學之化行はれ候は。讓畔之美俗に移り可申と奉存候。先以此度修學政之。台命。誠に明良和衷。同心同德之御事。抑亦兩先生御翊贊不少と。乍憚奉存候。毎々狂瀆申上候。失禮之段。幾重にも御海容可被下候。不宣。正頓首再拜。

六月二十六日

栗山老先生絳帳下

答木下槌五郎書

(加賀金澤儒官。柴野博士之門人。爲順卷五世之孫。)

九月十五日發之貴翰。今日午時落手。拜見仕候。如高論久濶相過候。向寒之時。彌御清適被成御勤修。珍重之至奉存候。誠に客歲留京中は得寛晤。殊更毎々御温待被下。忝奉存候。歸郷後疎懶。度々書問も不申上候。失誼之段。御海容可被下候。

一貴邦御府學近來御營建。學政御振起被成。貴兄にも御本藩へ御出勤。學事御多務之由。奉敬賀候。恭請先生在天之靈。定而御滿悅可被成。御追孝之第一と奉存候。夫に付鄙名も御薦達被下候由。他日御禮聘被下候は。參上可仕哉否。老拙所存御内々御尋被下。先以被思召寄候厚意。忝奉拜候。

但樸櫟之庸材。不任大厦之用。素分之事。其上近來老病交至。去夏歸郷後。腰痛不耐起坐。氣魄眼

力衰憊日甚候故。講讀等も廢業仕。應接人事は謝絕同事して。斗室中擁爐困臥而已居申候得ば。たと

ひ蒲輪之御籠迎を蒙り候共。固辞仕候より外之所存無御座候。學術之邪正を論定し。閩洛之正脈を振

起し候事は。寔如貴論學者之本意勿論之事に御座候得共。其出處去就は。先量己之才徳候而。其力

可能堪則就之。不能堪則辞之可申事。吾儕草莽中之當然と奉存候。決而高尚養重之流に而は無御

座候得共。老憊多病不得止事如此申上候ま。鄙衷御憐察被下。宜御取成。幾重も御斷被仰上置

可被下候。被寄思召候厚意に違候段。恐入候得共。右之仕合。無據申上候。

一栗山先生御用ニ付。此度御上京被成候由。老拙參謁可仕旨蒙高諭候得共。老病不能衝寒趨謁。爲

御斷孝恂差上申候。即明朝發程仕候に付。夜間奉答如斯御座候。燈下眼鏡朦朧。作字潦草。不能

縷述。萬期後信可申上候。恐惶謹言。

壬子歲孟冬廿五日夜

再啓。霜風日厲之時。伏惟爲道御自重專要に奉存候。於京都令兄様彌御安寧被成御座。奉珍愛候。此度も御手翰被下。入御念候御事奉謝候。賤兒へ御加筆被下。忝申聞候得は。遙拜俱謝。自老拙宜申上候様申託候。菅太仲詩章之事被仰下候。後便進上可仕候。折節多紛。草々閣筆候。萬不悉。

典學館記 (作州久世鄉學記)

嘗聞化民之道。以教學爲先。夫學不正。則教不純。教不純。則民不興於善。民不興於善。則雖欲化行俗美。不可得也。古昔聖王之所以化成天下。而流至治之澤。亦豈有他哉。然其教學之方。念々常在於學。不始勤而終怠。不始作而終輟。而後脩己治人之道。開物成務之功。皆可以庶幾矣。說命曰。念終始典于學。其此之謂也。身有牧民之責者。可不盡心竭力焉乎。恭惟公朝文明中興。修學政。斥異說。耆儒彙進。俊髦成林。日就月將。郡縣嚮風。建學贊化。尙未之聞也。獨美作州久世縣令早川君。勤儉好學。寬惠爲政。莅任之初。首禁里民產子不舉者。及游手博徒。數行縣邑。親諭倫理。勸農桑。又令都講眞野某譯解呂氏鄉約。頒授部下。數歲後。生齒益蕃。田野愈闢。而獄訟澁希矣。闔境欣戴。鄰封仰羨云。歲乙卯秋九月。創構鄉學于治之正東。於是吏民不督而來。經營不日而成矣。周牆延袤若干步。造屋大小若干楹。講誦有堂。游息有舍。門廡庖湔。靡不具備。其費凡若干金。率皆管內富豪者爭獻佐役。而一毫無所煩編氓焉。廼扁之曰典學館。蓋取諸商書之義爾。頃使祠官小寺生。今都講菊池某來。屬正爲文記之。先是嘗一枉駕敝廡。時賜存問。今又申以是命。則義不可辭也。茲不顧固陋。謹書舊所聞如此。方今縣尹邑宰。以善政聞於海內者。不乏其人。而能興學敷教。翊贊道化。作新民俗。實自令君此舉始。其功不亦偉乎。自今以往。教師學生。皆能躋朝貢。濟君志。而終始典學。無敢怠荒。則庶乎熙皞

之化。被於蒼赤。時雍之俗。見於隕區。非止若今之比也。嗚呼。令君所以建學名館之意。豈惟以警諸今之師生哉。抑將有望乎後之君子也。寬政九年丁巳秋九月 備中後學西山正拜撰

論相術

相之爲術。其來舊矣。果可信邪。果不可信邪。嘗觀丘明子長所錄。如叔服之相孟孫。許負之相條侯。其言奇中。不啻燭照數計。然則其術之果可信也。雖然人之妖壽禍福。固受之天。非受之相也。則君子脩身以俟命。順受其正而已。奚復藉形相之似。而徵其休咎哉。且夫勾踐烏頸而忍項籍重瞳而暴。非復聖人之相。孔子之狀類陽虎。子房之貌似婦女。豈置術士之喙。是以季成之技。遇壺子而窮。唐舉之術。視蔡澤而謬也。善乎荀卿有言曰。相形不如論心術。術正而心順之。則形相雖惡而心術善。無害爲君子也。形相雖善而心術惡。無害爲小人也。君子之謂吉。小人之謂凶。故長短小大。善惡形相。非吉凶也。由是觀之。相者小人之所惑。君子之所闕。而其術之果不可信也。迨今聞五平事。益可恠焉。五平者。京師商人也。將行。從一術士相。術士曰。爾有死相。因指其期。其舅強勸之行。五平乃行販東備。迨期不死。轉販西備。亦遇善相者。愕曰。子相當先死。今乃至此。得非有陰德及物以脫其厄乎。五平曰。日過播灘。維舟室津。夜見寡婦爲貧窘投水者。捐資而拯之。相者嘆曰。捐財救死。陰德之大。足以免其厄矣。時人相傳以爲作善之報

捷於影響。噫亦誤矣。夫妖壽禍福命也。雖聖賢乎。猶不能免。如孔之厄。夷之餓。顏冉之夭且疾。皆不得_レ不安而奉_レ之。而况賈豎之一善。廼謂_レ遽回_レ氣數之命。而脫_レ形相之厄耶。抑吾不信也。術士往々神奇其術。媒衒其說。以愚_レ誑人。是乃小人之所以益惑。君子之所以益闕也。或曰。如子之言。則史傳所載。亦皆非歟。曰。彼所謂疑以傳疑者。寧可盡信耶。要之六經四子俱所不載。孔孟程朱亦不傳。君子固不輕信也。然則相之術可盡廢乎。曰否。夫子曰。視其所_レ以。觀其所_レ由。察其所_レ安。人焉廋哉。孟子亦曰。存乎人者。莫良於眸子。曾中正則眸子瞭焉。曾中不正則眸子眊焉。聽其言也。觀其眸子。人焉廋哉。此蓋聖賢相人之術。萬世不可易也。且楚客之相人也。非能相_レ人。能觀_レ人之交也。九方臯之相馬也。得其精而忘其羸。在其內而忘其外。是之謂善相。嗚噫。何必夫妖壽禍福之云乎哉。魯堂評。可繼苟非相。

復鄉友書

五月十九日。西山正白。再辱書問。後先踵至。拆封讀之。辭論懇懇。宛如面晤。茲審諸友筆研無恙。勤業匪懈。忻慰曷加。承諭孟子會業。已及公孫丑篇。且俟_レ麥秋之畢。將復講_レ之。末永子拮据農事。而能踰_レ嶮遠會。不敢愆_レ期。想其心非獨守_レ諾之固。耽學之篤。蓋有厚望於諸君之學也。諸君亦宜切琢刻勵。玉成斯業。勿敢玩_レ愒時日。半道自畫。孤其厚意焉。此正不佞所_レ千里而默禱也。

且夫養氣一章。是七篇中第一義。要須深玩精察以致把柄入_レ手工夫。決勿_レ匆_レ偷讀過。妄生膚淺之見可也。性理字義再講更好。亦宜先講道德性情仁義忠信數條。理會其說。至夫天命大極。及鬼神等條。幽蹟高奧。非不絕佳。但恐初學望洋。或有_レ蠶等之弊耳。諸君其致_レ思焉。不佞寓居。距魯堂先生。僅拾餘武。旦夕升_レ其堂。周還諸子間。日聞所未聽。見所未見。茅塞之陋。畧覺豁焉。若夫尋墨數行。鎮日呻_レ帖一室。猶未暇也。良齋慎齋王事靡盬。猶能講誦不倦。才德日昇。其餘諸子。亦皆夙夜螢雪。未嘗荒怠。大非不佞輩所_レ企及也。而謹慎謙抑。無有一毫滿假之心。輕薄之態者。雖以諸子資稟之美。抑亦先生諄誨之所致也。側視洛下諸儒。大異乎是。其為_レ教授。非浮靡即枯單。高者釣_レ名。卑者罔_レ利。要皆自大高標。媒衒成風。其徒吠_レ聲慕_レ羶。什佰為羣。效尤流臭。滔々皆是。比之先生之門。不啻兒戲。於是益知吾魯堂氏之學。純一中正。為真閩洛正脉。而不敢少疑也。近與良齋諸賢。同承中庸輪講之命。會集且有日矣。顧不佞識淺才拙。唯不堪_レ其任是恐耳。見惠糟魚三器。千里之貺。深領盛意。外具摺扇拾五柄。聊擬_レ縞紵之好。扇面字。是先生所書。勿以物賤而輕視焉。其他瑣事。皆附別幅。幸輪照。時下梅潤漸盡。熇暑俄至。萬惟珍查加餐。不一。

示兒慎

井臼非爾耻。唯耻德不_レ成。負擔非爾愁。唯愁經未_レ明。陳氏曾炊爨。二難稱_レ弟兄。季路昔負_レ米。百世傳_レ師名。糖麩猶充_レ腹。繡纈足_レ掩_レ形。膏粱與_レ錦綺。徒是浮雲榮。何如樂_レ斯道。終身心地清。爾

能聽取廼翁辭。莫將浮雲誤此生。

與佐長史良齋

前日之集。略論知行之先後。因及朱陸之同異。執事以為同。不佞以為異。此是學問一大關鍵。不可不辨析。即欲就魯堂先生質其是非。適得陳清瀾學部通辨讀之。其辨陸學詖邪之惑。排後儒回護之說。繭絲牛毛。數計燭照。直截痛快。莫以尙焉。不佞嘗讀陸王語錄。竊謂其學之不若閩洛。只在專力上達。而偏廢下學工夫耳。今觀此書。始知陸王之學。陽儒陰佛。道其所道。與吾聖人之道。天淵懸絕也。豈止同異之辨。短長之爭乎。傳曰。毫釐之差。謬以千里。蓋此之謂與。嚮使執事及不佞。蚤讀此書。略解此義。則決無前日喋々之辯矣。噬臍不及。茲獻其前後編二本備覽。伏惟執事虛心平氣。精觀熟察。或有符高明之見者。冀留意焉。前編中有鷺湖唱酬詩。因步其韻以述愚衷。如蒙不棄。幸賜高和。癸巳夏四月念二日 西山正白

與佐長史

前日有貓來。乳二子于寓舍棟上。而余旦夕適他。初未暇知之。昨來臥蓐終日。乃始視之。因謂嚮無鼠喫之患。賴此物之力爾。余之遇貓。亦猶塞翁馬歟。來去得喪。一任自然。何必驅逐之為。適來歸自貴亭。彼乃據我牀蓐。覆我飯盂。且怒我為鬪哮之聲。跋扈狼藉。殆不可堪矣。夫晝伏夜動

者。猶有畏人之心。彼則公然凌暴如此。其罪浮于永氏之鼠。即欲驅而逐之。失歸由我。猶有惻怛之情。將欲畜而養之。監守無人。恐專竊據之權。愚心迷謬。不知所裁。茲具其狀。敢請明府之處分。伏垂尊諭。

安永癸巳夏五三日

贈家兒慎出仕序

寬政甲寅季秋朔。藩命擢兒慎于草莽。以充醫員。賜五口俸。蓋特恩也。鄰里鄉黨榮之。其父西山正戒諭之曰。嗚呼。汝謂學優而仕耶。年雖壯強。學猶童蒙。豈可望立身行道揚名顯親之業哉。將謂家貧而仕耶。所賜廩稍。厘可饒汝之衣食。豈能足祿代其耕。以供仰事俯育之資哉。吾祖先以來。絕念仕途。棲遲衡泌。今迨汝身。遽蒙寵擢。濫宰侯門。進不能免尸素之誚。退不能繼父祖之志。離桑梓。廢定省。出宦於百里之外。謂之幸耶。將不幸耶。雖然。奕世食其土。被其膏澤。百餘年于茲。君侯召而命之。大夫奉而行之。死生予奪。唯其所命。不當踰垣閉門而避焉。則亦往役之類也。已雖然。業已仕矣。盍深思所以事君之道乎。經曰。資於事父以事君。而敬同。忠順不失。以事其上。蓋以忠孝本為一心。敬順原無二道也。所謂敬忠者。非謂意懼趨踰承奉容悅也。陳善閉邪謂之敬。盡己無隱謂之忠。汝其勉旃。或曰。此是儒臣之事。今以子伎倆員。唯謹刀圭職而已。奚任此責乎。是大不然。夫百工執藝事以諫。古之道也。何況周旋士列。

更番上直。朝夕君前者。而忽所以事上之道。則非但負君恩。抑亦辱汝親矣。何以能一日立於其朝而食其俸乎哉。若夫四診三折。審症探因。辨補瀉。和劑量。以備藥物之末。固是實業之業。三世所傳。不待更贅也。傳曰。上醫醫國。其次醫人。范文正公曰。不為良相。當為良醫。嗚呼。汝雖不肖。亦能事斯語乎否。行矣慎之。

贈友人還本州序癸巳夏四月十日

癸巳之春。余鄉友小野子崇。中原子幹。同遊京師。子崇學詩。子幹學書。各擇其師。頗有所聞焉。頃將西歸也。諸友贈以詩律。如金如璧。鏗鏘盈筐。余時在洛東客舍。臨別餞二子曰。今夫有源之水。流遠而逾達。有根之華。枝繁而益茂。且其潤物盈科。滑之不濁者。非淵源之深則不能。吐葩結實。採之無罄者。非根柢之固則不能。若夫行潦之水。插帽之花。其潤也萎也。固可立而待已。學之有本末。亦猶類是歟。蓋學以經傳為根。以德行為實。至若賦詩摸字。華葉耳。流波耳。若弃其本源而事其枝流。假令詩壓李杜。書排鍾王。亦猶畫地為水。剪綵造華。奚望其能潤物結實。傳遠不朽哉。遂歸于無用耳。顧亦二子。皆能孝乎乃親。悌乎乃兄。克復惕厲。從事于斯。而後以其餘力。賦詩寫帖。適其所好。則庶幾花實相輝。源流相潤。而漸成君子藝林之材矣。不亦美乎。若夫不然。無源之水。無根之華。其得失果何如哉。未審二子以余此言充弦章乎。將

覆醬瓿乎。余將卜諸他日。因以為贈言。書云。玩物喪志。行矣勉旃。

道猶大路

道猶大路。以喻聖人之道大中至正。人生日用。自幼至死。不可不率由焉耳。如夫二氏之道。則不然。彼以綱常為粗迹。六籍為糠粃。別構虛無苦空之說。以誑惑斯民耳。老氏所謂道可道非常道者。譬猶當門大路不行。却開野徑草莽中也。佛家所謂出世間法者。譬猶行竿走繩。自謂坦平踰於康莊也。嗟夫信其言索其道者。橫奔失路。迷而不復。能不傷足枳棘。墜死坑塹者鮮矣。假令其能崎嶇冒涉。行繩如履平地。徒勞其心力。眩人耳目耳。孰若識熟大路。晨昏來往。左揖右讓。自有餘地耶。其他管晏申韓。以至百家之說。要皆捷徑耳。生路耳。豈千萬世人々所由之道乎哉。仲尼曰。誰能出不由戶。何莫由斯道也。蓋傷此也。

(無題)

近有一學究。譏余云。教授失方。非所以長養人材也。蓋以余之先經傳而後子史。崇性理而卑文詞耳。或以其言告余。余曰。庸何傷乎。夫教學之方。有本有末。有輕有重。講仁義。明孝弟。是本而重者也。勤記聞。事詞章。是末而輕者也。自本及末。是謂君子之儒。徇末忘本。是

謂小人之儒。所謂教授長才者。欲使學者爲君子邪。將小人邪。果欲爲君子。則經義不可不先也。理學不可不崇也。語曰。本立而道生。豈不然乎。且聞學究專授其徒。以左莊及世說。此吾所謂徇末忘本者。惡在其能長養人材哉。或曰。彼意蓋欲藉他文辭。鼓舞人才。以爲他日授經之地耳。噫亦不思也已。昔有一愚夫爲僧者。未講僧儀。先習馳馬。人問其故。則云。設有檀越來迎以馬。寧可不知馭術乎。習之數年。又學散樂。曰法筵有倦。寧不奏樂以娛衆乎。二技未熟。其年已老。竟不知僧儀。事見于卜兼好開草。今學究之授徒。何以異於彼愚夫之爲乎。且夫方今子弟。惰慢者多。謹敕者寡。崇尚浮靡。蔑視實踐。滔々天下皆是。爲教授者。宜先講經義。唱理學。以使學者格其非心。擴其良智焉。尙恐一齊衆楚。不勝其咻矣。而況攻異端之學。說浮華之書。譬之抱薪而救火。適足以益壞心術。猾風俗耳。彼乃以爲教授得方。長養人才。顧不亦恠乎。雖然。箕畢異好。茶齋殊味。安知非彼之果是而我之果非乎。各從其所好已。彼縱罵我曰。頭巾氣習。不曉教學之方。亦吾之所不辭也。

檜崎正員墓誌銘

古之所謂鄉先生歿而可祭於社者。檜崎翁真其人也哉。翁以元祿丙子六月九日沒。距今茲乙卯。適一百年矣。曾孫仲兵衛員永。欲樹一碑翁之遺址。以傳不朽。使其友青木某以先輩淺井重遠所狀來。

請余識之。其狀曰。翁諱正員。稱忠右衛門。備後州三原城人。其先出於近江源氏。遠祖三河守豐景始爲葦田郡久佐村塙主。子孫相襲。屬毛利氏麾下。至慶長中。祖吉兵衛豐正去之濃州。父源次郎正知孤貧無依。來居三原西市。娶與野氏生翁。翁自幼孝友勤儉。專力治生。竟致殷富。比強慨然自省。發憤讀書。刻勵多年。頗有所得。遂如洛師事山崎闇齋先生。得聞存養主敬之方。生死始終之理。喟然嘆曰。吾得明師矣。於是信道益篤。進學愈深。先生謂翁曰。子子老友也。及西歸。贈之以序。正親町儀同藤公以同門誼。亦見優待。城主淺野君聞其學行。數延見之。講論道藝。恩遇賜賚並渥。翁因勸其家士。及鄉邑子弟。往謁闇齋凡若干人。子善兵衛正重亦從之學。不墜家聲。由是闔境嚮學者頗衆。實翁之力也。爲人質直謹恪。能履約信。胸襟坦然。志行不礙。及老和順。專以利人濟物爲心。其於親故最厚。晚年卜隱藝之須波浦。撫景讀書以終焉。浦在三原東南十里許。居民業捕魚。而風濤險惡。每輒苦之。翁廼爲捐財雇工。疊石築塘。延袤數十丈。爲一埠頭。以資釣漁。且便泊繫。爾來永無覆溺之患。魚船客舟。到今利賴焉。稱頌不衰云。鳴序。翁之遺澤此土如是。則員永斯舉。固其所也。余既偉乃祖之功。又嘉曾孫之志。茲不辭固陋。略叙其梗槩。且系以銘。銘曰。

維翁之業。家道克肥。斯鄉之化。學海焉依。漁戶飽德。泊舟稱功。遺澤千載。尸祝無窮。

寬政七年旃蒙單闕夏四月

備中 西山正拜撰

拙齋遺文鈔 終

俗簡焚餘上卷目錄

塾規三條	一	塾心得添書	三
京師人渡邊願齋の問に答	四	壬午正月近江人中村文之進に答	五
與友人戒酒書	六	答福知山侯書	八
答望月主水	一一	答加藤右近問	一二
答三谷潜藏端書	一五	答大鹽平八郎	一六
答川路氏二通	一八	丁亥偶得二條	二八
兜之儀に付掛合書面	二八	梶介元服爲致候手續	三六

俗簡焚餘下卷目錄

御心得向存意	三九	御輔導存意書	四三
某侯代撰	四七	丁亥建言	四九

重職心得簡條	五〇	答三宅辰之助	五四
女中掟	五五	己丑正月岩村異學之禁	五七
濟厥略記	五八	菩提所取扱方	六四
答長村内藏助二通	六八	答磯野定兵衛	七一
答成嶋邦之助君	七二	答松島深藏	七三
答鎌原伯耆	七四	答櫻井良藏	七五

俗簡焚餘上巻目錄

一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	五二	五三	五四	五五	五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	六四	六五	六六	六七	六八	六九	七〇	七一	七二	七三	七四	七五	七六	七七	七八	七九	八〇	八一	八二	八三	八四	八五	八六	八七	八八	八九	九〇	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九	一〇〇
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

俗簡焚餘卷上

塾規三條

一立志

諸友學問心掛られ候趣意は。第一倫理を辨へ。君子に成へきたためにて候。こゝに志なき輩は。假令萬卷の書を讀破候ても。學問心掛候とは申かたく候。曲藝小技に至るまで。志なくして成就する事あたはず候。況て倫理大學問。うかと出來候義決して無之候。此志さへ立候へは。書籍讀み候事も。此志の内にこれあり候。誠に入學第一の義にて。かりそめに思はれ間敷候事。

一勵行

學者日用の間。逢ふ所觸る所。朝晝暮夜。行を離れ候事これなく候。兎につき角につき。能誠實に心を盡し。輕薄浮躁の態なき様に心掛らるへき事に候。朋友會合の際は。言語の上尤緊要にて候。朋友は互に益を求め仁を輔るためなり。然るを無益の雑話に時刻を費やさば。益なくして損あるへし。雑話の上より自然と不遜にもなり。争端を起す事にも及候。加様の義一切これなき様に心掛ら

るへく候。且少者は長者を敬し。長者は少者を愛すへし。假令少者たりとも。業の勝れるものは。業の先輩なれば。不敬なきやうに相談あるへし。先輩たる者も。其長を挾み。後進を輕侮すれば。やはり長者の徳なきゆへに。後輩にかはる事これある間敷候。大抵朋友の義は兄弟に等し。其親愛の心より切瑳あるへく候事。

一游藝

文字の事は。經説たりとも藝に屬すへし。學問中の十事にて候。嚴に課程を立て。其間に優游涵泳すへき事尤に候。もし實行なくして。讀書作文のみに流れ候ては。何程經説に委く。諸子百家に涉り。詩文を巧に致し候ても。技藝にかはる事これなく候。書籍を離れ候ては。其餘常人に等しかるへし。却て世人より譏を招く事數多これあり候。然れば實行ありての讀書にて候。凡そ先輩に疑を質すは。生たる書を讀むに同じ。書を讀む事は。死たる先輩より訓を受るなり。されは經義を講明するに當りては。先輩老人に對しまの當り質疑する心に成り。己を虚し其語を身に引當て沈潜すべし。輕卒躁妄なるべからず。能くかくのこことくなれば。讀書も亦即實行の一にて候。以上三條之約。諸友とともに確守いたすへく候。背馳これなきやうに心かけられ尤に候事。

寛政十一己未年九月

坦

塾中心得添書

- 一塾中一統不行儀の起居これなきやう心得肝要の事。
- 一修業中飲酒禁斷之事。
- 一外出之節。出さき申聞け置かれ。歸塾之節。早速面謁致さるへき事。
- 一門限四つ時に過へからず。萬一據なき子細これある節は。其旨斷らるへし。同塾へも申聞置かるへき事。
- 一但寄宿中に候得は。據なき事たりとも。度々は無用たるへき事。
- 一塾中口論ケ間敷義。これなき様心得らるへき事。
- 一但學問切瑳につき候事は別段たるへし。
- 一朝夕定省之外。年始八朔歳暮五節句は。禮服にて祝義申述らるへき事。
- 一但夜四ツ時廻り候と。直に手間とらす夕空に出らるへき事。
- 一書堂塾中の掃除。來客の取次。茶煙盆出し候事。相互に心得らるへき事。
- 一但掃除並水鉢取替等は。番を立置るへし。兎角能く申合せ。不都合なき様に致し。病氣又は外出之節等は。相互に助合るへき事。
- 一食事の節。銘々手盛に致さるへし。其外日用の事は。都而自身にて致さるへき事。

一下男女に物事申付られ。或は町遣等頼まれ候節は。其旨家内へ申聞られの上にて。申付らるへく候事。

一油炭等自用品。銘々別段に調置。或は申合され。寄合にても苦しからず候事。

右之條。瑣事にも涉り候得とも。これまで仕來りの定めゆへ。崩れ申さず候様に心得らるへく候。

寛政十一乙未年九月

坦

京師人渡邊頤齋の問に答ふ

武王狭く伯夷廣きの論。是にあらす。天下たゞ一是あるのみ。武王之舉は。時中の道と云ふへし。然れども其心と其義とを問ふへし。これ即時中なり。經權合一の道なり。其跡に泥むへからず。既に時中を得れば。萬世五倫の道もこれに外ならず。若しその跡に拘らは。燕王の禪讓。王莽之居攝。道といふへけんや。伯夷の事は。論孟に見ゆる所のみを取るへし。史記妄誕。馬を扣ゆるの説。一切疑ふへし。

赤穂四十七士の是非。先輩の論種々異同あり。愚意にては。其輩忠誠の心に於て感じ入たる事。餘義も無きに似たり。然れ共當時武士の習を帯ひ。右様の舉に出たり。仕方にて未だ盡さる所あり。

たゞ其君あるを知りて。君の君あるを知らず。己れ其君に忠するを知りて。其君をして君に忠あらさらしむるは如何そや。漢土にて言へは。戰國豫讓輩の子々を以て義とするの儔なり。道より言へは。非義之義大人弗爲と言ふへし。復讎と言ふものにあらず。これ蓋し一介之武士にて。道を知らざる故なり。たゞ其志に至ては。決して常庸の及ぶ所にあらず。

壬午

一 齋

壬午正月近江人中村文之進の問に答ふ

仁字の意味。今日の事につけ簡易に分り候様にと御尋に付。大略左に記し候。先づ人と申すは。至極靈なる物也。學問を爲ると爲さるとに拘らず。物を大事にすると云ふ事を能吞込たるものにて候。第一この人倫の上にて云へは。親は大事なるもの。子は大事なるもの。誰も彼も自然と心得たり。又主人大事。家來大事と存する。兄弟相互に最負して大事狩り。夫は妻に目を懸け。妻は夫を慕ひて。俱に大事に存する事。其厚薄あれ共。凡そ人たるもの一統にその心生へ抜きにあり。これ禽獸になく。人へのみ天然と其辨別する所備りたる事と存せられ候。扱其天然と辨別あるは。心の光明の照る所と存候。大事と心得たるは。凡そ人心の丸るの姿にて。餘義もなく候様參るもの。即心の徳にて候。

其大事と存たるは。即愛の理より筋目の立たる所と存られ候。左候へは專言偏言の説。精微に覺へ候得共。その實は專偏合一に歸し申へく候。先つ文書の分析する所を心得て。其後又合一の意を文字を離れて會得あるへき事かと存しられ候。

一 齋

與某友人戒酒書

一簡得貴意候。氷霜滂至。愈御佳寧之事と抔賀いたし候。拙老仍舊瓦完消光。御省念可有之候。扱は貴君長崎より歸られ。京師に僑居已來一年餘。一向音問無之。如何哉と拙念に堪す候。もし病魔にては無之哉。時々懷に往來いたし候ひき。然處此間大坂間氏より文通にて。貴君へ假借物有之よし。長崎前之事故。貴君京師に寓居と存し。尋させ候處。當五月江戸へ參られ。直に仙臺へ歸國のよし。京師にて承り候之趣に候。其事間氏より申越し。拙老始て承知いたし驚入申候。江戸へ參られ候へは。是非宅へ御越可有之筈。其義無候は。必譯之可有之事。或は病魔なるへき歟。身軀之病。良醫を請て療すへし。京師元より其人に乏しからず。心之病魔は。學問に無之ては治法あるまじきの處。貴君必定此症なるへし。貴君學問の爲に主君より上京之命ありて。却て此病

を引受られ候は。龜相至極にて候。畢竟京師に良師友も無之。花柳之區は。所々數多にて。旁以此病を受られたるなるへし。人生最戒むへきは酒にて候。貴君兼てより飲癖あり。苦口忠言一にして足らず候處。又候病根發動と見へたり。此病より飲友に誘はれ。花柳となり。遂に財乏しければ。種々之謀計興り。大坂良友よりも見限りを受るも。皆飲癖より事を生し候に極りたり。人生駒隙なり。青年は再ひ得かたきもの。志あるもの酒色に惱され。惜き歲月を曠度する事。返す／＼も殘念なる事にあらずや。貴君の不沙汰は。病を諱て醫を忌むなり。能々自反猛省あるへし。扱病因の酒にあるを知るといへども。此酒を止むると云ふ事甚難く候。凡そ酒は口計にて其味を嗜むに非ず。惣身にて好むものなり。心君の下知に従はず制し難きものなれば。是まで數十人に酒の異見したれども。遂に一人も長く用るものなし。甚難き事と見へ候。然れども吾黨にて克己之工夫出來ぬと云ふては。學問を止る外無之候。克己の工夫。克難き所より克もて去るへしとあり。貴君之克難き所。飲酒にあれば。こゝより工夫致さるへきなり。年來貴君に於ては。見る所あり世話も致す事に候へは。一片婆心掣切ならざるを得ず候。

丙戌季冬

答福智山侯問

問

王氏云。良知自知原是容易的。且是不能致那良知。便是知之匪艱。行之惟艱。按するに王氏此説。知行に於て判然兩箇に似たり。知之匪艱。便ちもごより人々有的之良知。行之惟艱は。すなはち人々致す能はざる知なり。知は行之始。行は知之成と云ふとも。知先行後之説を免れざるに似たり。親に事るの孝。君に事るの忠。人誰か知らざらん。然るに行はされば知と云ふへからず。路岐之險夷。必ず身親ら履歷してしかふして後知る。是は元より眞知實に合一なるへし。路ある事を知つて行かざる者に比すれば。懸隔ならん。然るに路を併せて知らざる者あり。路を知るものに比すれば。是もまた隔あり。有欲食之心。然後知食。欲食之心即是意。即行之始矣。食味之美惡。必待入口而後知と。食味の美惡必待入口而後知は。もごより眞知實に合一なるへし。然るに食せんと欲するの心のなき者も。食あれば即ち食を知り。服せんと欲するの心のなき者も。衣あれば即ち衣を知る。此知は是何物ぞ。眞知にあらざれども。知にあらざるといふへからず。毫釐倏忽之間。知先行後なるに似たり。其他四書中にも知仁をわけて説く處許多。中に就て知之者不如好之者。好之者不如樂之者。子思子の三知三行の説。知行分つて判然たり。願くは合一の説詳に示せ。

答

知に淺深あり。行にも淺深あり。聞見之知は淺き知にて。知の本體と云ふへからざれども。聞見たけの行その上にあり。譬へは今此疑問を擧られ。江都迄寄られたるは。聞見の事に屬すれども。この問はむとする心より出て紙筆を煩はすは。直にその内の行と云ふへし。知淺ければ。それにつき直に淺き行あり。知深ければ。又直にそれにつき深き行あり。文字を離れて見れば。知行本體合一ならざる事なし。食せんと欲するの心のなき者も。食あれば即ち食を知り。服せんと欲するの心のなき者も。衣あれば即ち衣を知る。もごより其通りの事もあり。然れども其知ると見ると。吾か口に感ずると身に感ずると。一同なる氣味あるは。即合一之體と云ふへし。道あれば道を知るも。吾か目に見へて知ると行きたくなるも。矢張一同なり。又其地に行ねは見へもせされは。矢張淺き行の處。即淺き知あり。一體合一の起りは。陽知陰能之本は太極の一に歸する理より本體を説くにて。形迹に拘るへからず。一物にて指し所知行の二つあり。離れぬもの也。精察明覺之所を云へは知と云ひ。親切篤實之所を云へは行と呼び做す。中庸三知三行も。文に拘らす其意を會得すへし。畢竟文字は言詮にて假りて言ふものなれば。我か心に引當て。又事理人情に引當て。其意味を得へき也。如何にも文字は二つなれども。心へかへして見れば。一物に相違なき事也。知之本體。孟子に知て去らざると云ひ。又中庸に固執之ものと云ひ。又易の元亨利貞は仁禮義知にて。貞固足以幹事と。知之事を云ふ。みな

行の事を知と云ふ事あり。知之者不如好之者之所も。古人の解あしきに依て。知を先きとのみ心得たる也。知には直に行あると合點したる上にて見れば。知之とは食て其味を知る也。好之とは味へて其物を好む也。樂之とは嗜てこれに飽く也。古人知之に食ふ事を言はぬは誤なり。又匪知之艱を王子は良知之事とし。行之惟艱を致知之事と見られたり。知行之先後とは別也。然れどもこれは愚案あり。說命之本文は。何も理窟に涉る事に非ざるを。古人誤て知行二字あるゆへ。知行を云ふ所と思ふ也。この前後語勢を見るに。傳説と高宗とをかけ合せて見るへし。王曰。旨哉說。乃言惟服。乃不良于言。予罔聞于行と言ふて。説は言ひ手。高宗はそれを行ひ手也。そて説その語に答へて。われ心に會得したるまゝを言ふは。何も艱きに非ず。王の直にそれを行んと仰あるこそ艱きなりと云ふ意なり。非知之艱は傳説自ら指すなり。行之惟艱は高宗を指す也。王忱不艱。允協于先王成德も。其意をうけて云ふ。惟説不言有厥咎も。又前を承る意なり。能々說命中篇の本文を讀て會得すへし。又王子云。知は行之始は。始まりと讀むへし。始めと讀むへからず。吾心に精察明覺する。即行のはしまり也。行は知の成るは。行の成ると思へども。即知の成るにて。別物に非すとの意也。經書知行何れにても皆其意をもつて會すへし。

文政十年丁亥八月

坦

答望月主水

客冬貴簡被投。致拜見候。然は其後打絶御疎音之處。向後又々御質疑往復被成度之旨。小林重助子を以改而被仰越。近頃被入御念候御事に存候。就ては傳習錄之疑義。御書付にて御尋も被成度よし同人申通候。何に致せ御立志御修業之儀。一段の御事と存候に付。不取敢委細致承知候段。同人へ申答候處。其後御疑條御書取被遣。致入手候。右御答認可申答に候得共。兎角人事逐年増益致し。四方之書答堆積。何方へも遅延相成。背本意候事共に御座候。扱此節微恙引籠。得少暇候に付。御答可認と存候處。尙又相考申候には。畢竟實學の御志故。傳習錄御覽之事。御篤志之義感入候得共。右之御實學に候得は。御答も虚華之詞にては不相當候に付。先つ愚存之條左に記し申候。貴君往年手前へ御從學之節。格別深き愚意も不申陳候へは。一體弊塾之風。又愚見の所も。碌々御承知は有之間敷に付。先其所を書取申候。世間兎角誤傳致し。拙子は陽明學なりと申すよし。元より陽明非常之人物に候得は。時々激賞致し候事有之候。然しなから拙子何も陽明學と申すものには無之候。傳習錄昔年より熟讀候得共。其説一々取用候にも無之に付。是迄寄宿諸生へも。ついに傳習錄質問など課し候事は不致候。拙子之學は。宋學と申すものにて。其本原周程之意に外ならず候。依而其實學に志有るもの。課業之次第。先つ近思錄より起步致し候。其後文公語錄を始め。元儒許魯齋。明儒薛文清などの語錄をも爲讀。詰る所周程の本旨を得せしむるに過す候。又人によりては傳習

録を爲讀候事も無きに非ず候得共。此録は一種之書にて。得て人々讀損じ。周程之意にも叶はず。狂禪に陥り候輩。數多有之候に付。先つは人に勸め不申候。もし讀候ものへは。録中之説一々打破候様にと申聞候。打破候程之力量あるものは。却て陽明の意に叶ふ間敷にも非ず。夫よりして周程之本意に忤る所も可有之哉に存候。拙子は何もかも辨へたる上にて。一所全棄かたき所有之候得共。是は其説之事にては無之候。又御承知なくとも相濟候事と存候。貴君など先々其次席を被得。近思録より御會得無之ては。傳習録計にては大に人を誤候事に可相成候。依て實踐之學被成候御望に候へは。傳習は先つ御見合せ被成。前文之通り近思より次第を得て御熟讀被成候へは。宋學の旨に叶可申候。客冬一諾致し。又ケ様に申述候事。御不審に可有之候得共。大人言不必信。唯義所在に候得は。逆もの事に本式に御修業あれかごと存候儘。此事得貴意申候。尙篤と御再案可被加候。依之客冬被指越候御疑問二通致返完候。此後近思之御疑問御越し可被成候事。

癸巳正月

答加藤右近問

第一諸事に付。一得一失と申儀御座候所。於道理は。重きを取り輕きを捨候儀かと奉存候處。

其時に坐しては疑心生じ。輕重之分難相定候。畢竟致知之功無之故と奉存候。然は其工夫平生之任と奉存候所。何分其場へ手掛り不申。残念至極奉存候。致知之工夫。聖賢之書には。細微之極迄申盡可有御座候得共。御存被下候無學愚蒙之小子。何分にも届不申候。何そ手近き處にて日用之工夫。御教示被下候儀は有御座間敷哉。

一得一失如何にも多くある事に候得共。大抵は今日便利をはかる類にて候。元より其失を覺悟にて其得を取り候事。失よりも得の多き故にて候。若し其失何そ後へのこり。遂に大弊を生る萌ある時は。一時の得にはかへられず候間。止むにしかす候。物事とかく便利の所へ餘り目を付す。義理之大筋に本つき。依て數十年を通計して其利病を考へ。取捨あるべき事に候。活事は文談にも盡し兼候事。論孟杯幾遍も見候内には。成程と感候所は折々御座候得共。只書之上にて相濟。平生の事と別段の様に相成。残念に奉存候。是も深切之不足と奉存候得共。如何様にいたし候へは。今日之爲に相成可申哉。

經書之文字は。注之文字にて分り候へとも。意味合は注文計にては分明ならず候。古人之意味は。我之意味にて註したきものに候。たとへは今日之實事を處する時は。經書を今日之事の註となし。經を讀候時は。又今日之事を經の註となして捌きたく候。其通り互に相註し候へは。學問日用を離れ申間敷哉に候。しかしケ様心掛候計にて。拙も中々及兼申候。たゞ心掛候處を語るまでに候。

博文約禮と御座候。此博文は。尤廣く書見等も可有御座候得共。根元無學之小子。只今より中々心氣も及不申候。只論孟近思錄等にては不足之儀に可有御座や。歴史類も廣く熟讀不仕ては不相成もの哉。右博文約禮之儀。爲御聞可被下候。

博文之文は。後世儒者博識之事にてはある間敷候。凡そ道理の顯れてあやあるもの。皆文にて候。詩書六藝も亦其内にこもり候。誠に博きもの。又其理はつゞまやかなるものに候。陽明博約說大意よろしく候。

讀書百遍義理自ら通とかや。左候得は。語孟の類幾遍も讀居候得は。愈益は無相違義に御座候哉。是も只讀候計にては。爲己にするの學にも相成間敷。乍不及其語を誦し。其理を我身え引當相味候儀は。素よりの事かと奉存候。

讀書百遍義自通と申すは。畢竟書籍文義之事にて候。實學之所は。程子の念書と申す事ありて。經語を念々忘れず。口に誦し。我心と身に引當。其意味を考へ候事に候。

餘り高上の様には奉存候得共。當地杯には何分師として疑問等いたし候者も無御座候間。聖賢の書を師とするの外無之様奉存候。小子の生質にては。いつれの書を見申候て宜敷御座候哉。御尋申上候。書餘疑敷儀は數も不限義に候得共。何分筆には難盡候間。先つ右五ヶ條の所。此度相願度。吳々も御教戒奉願上候。不備

如何にも古人を師として宜敷候。御讀なされ候書は。矢張四書五經及び宋明賢儒之語錄類にて候。其内緊要なるは語孟と存候。朱陸薛王之語錄尤よろしく候。經學之餘暇。倭漢古今之歴史も御讀なされ。治亂興亡之迹御心得しかるへく候。

天保六年乙未四月中旬

答三谷潛藏端書 乙未

再云。來書中に林祭酒事又々要路に被加候哉に付。拙義様子宜可相成など。他向尊有之よし被仰越候。右者如何様外に而は左様の評判も可有之事に候得共。決して其様之氣遣は無き事に候。御承知之通。祭酒に於て私昵のものを推舉被致候事は不被致。萬端嫌疑を被避候事に候。拙亦官途などの望從來無之。令甲之學流とも少し喰違。其間に私説も有之候事は。世の知る所にて候。もし出身之願も有之候へは。其學問に疾くより取かへ可申候得共。仲々左様も不致。尤私説主張は元より不致。畢竟自分限之事にて。數十年獨立罷在候。百度こまりものにて候事。今年六十四。餘齡無幾候所。於今官舉など可有之様。絶而無之事に候。拙は一代限りの心得。兼々御承知之通に候間。此所は貴君などト御侮有之度ものと存候。併當今世間老輩乏敷故歟。諸家にては拙子持前之所にて。

やれ〜と取はやし被吳候に付ては。老人奔走所謂難有迷惑。可咲事に候。今朝少間復書認候に付。漫及此話候也。

六月十九日

答大鹽平八郎

陋簡拜啓。未接紫眉候處。秋暑時節御佳裕被成御興居。奉抔賀候。抑先頃は問生え御轉托高著洗心洞割記二冊被惠。副以眞文手教。辱致拜受候。眞文拜復可致之所。人事紛惱。且老境精力薄相成候間。俗通書不取敢御報申述候。御恕察被下度候。先以兼々御芳名傳承罷在。いつそ拜顔致し度存居候處。此度不圖御手續に預り。御履歷且御志操之概。詳悉被仰示。拜範同様に存じ。欣聳不少奉存候。先達而問生出府之砌も。御割記中抄書小冊。問生被示。今又新刻全御惠被下。反覆致し拜覽候處。毎條御實得之事共。使人感發興起。不勝欣躍。拙老など可及所に非すと奉存候。就中大虚之説御自得。致敬服候。拙も兼々靈光之體即大虚と心得候處。自己にて大虚と覺へ。其實意必固我之私を免れず。認賊爲子候様に相成。難認事と存候。貴君精々此所御着力被成候へは。即御得力爰に可有之と存候。尙も實際に御工夫被着かしく祈入候事に御座候。扱又拙も姚學を好み候様被仰

越候處。何も實得之事無之。赧羞に堪す候。姚江之書元より讀候得共。只自己之箴砭に致し候のみにて。都而之教授は並之宋説計に候。殊に林氏家學も有之候へは。其碍にも相成り。人之疑惑を生じ候事故。餘り別説も唱不申候。且又江都にては常に群侯百碎之間に周旋致し候事に候へは。何學なと申す事詮も無之。只自己にて乍不及迪哲之實功を骨折り。夫よりして君心之非を格し。遂に治務之間にも預り候へは。漸々人之家國に寸補可有之哉に存候。兎角人は實を責すして名を責候ものかと被存候。名にて教之害を成す事少からす候へは。務て主張之念を法りて。公平之心を求め度候。左候へは却て教化の廣く及候事有之哉と被存候。返す〜も其實無之ては。何學にても埒明不申た、自己之實を積候外無之とのみ心掛候得共。扱々十か一も存意通に參らす。浩嘆に堪す候。愚意之概聊申試候。尙御聖教被下度候。將亦割記中前人未發之條不二而足候得共。堯舜之上善無盡。殊に御年齢強仕之御事。此後幾層御長進可有之歟。不可測と御頼敷存候事故。申迄も無之。益深造之所翹望に堪す候。御著述林祭酒え示し可申之旨。致承知候。未だ案上に指置申候。何れ見せ可申候。左様御承知被下度候。且又眞文拜答不致候に付。雜文三篇。塾生認置之儘呈覽可正申候。不滿貴意候所は。指擲を厭不申候。尙追而御文通可申聲。先拜復鳴酬迄如是御座候。時下玉燭不調。爲道御自保可被加候。

來書

不令之時候に御座候得共。倍御壯健奉賀候。然は頃日豚兒を以奉願候義は。別義にも無之。論語の仲由冉求是大臣といふへしやと。季子然の問ひ奉りし章のことに御座候。疑念起り候譯は。聖人の彼二子を評せられし御辭をおしひろめ候而考へ候へは。君と父とを弑する大逆無道の外は。君の惡を諫諍等いたし候事はさて置。道ならぬことにても從へしこのことにはあらざる歟と奉存候。去ながら政事には冉有季路とみへ。又は由は堂にのほれりいまた室にいらすとも仰せられ候へは。いかにもみちならぬことに隨ふへしとも不奉存。其上政は正なりとも及承候得は。曲りたる理無之譯に候得共。季子然問奉りしに御答ありし様子にては。道におゐて不穩と心附候ことも因循し。王且か天書の事諫まいらせさりしほどのことは。もとより有うちのこと、相見申候。いか、御座候哉。此ごころ解違候得は。甚敷心得違も出來可申歟と掛念仕候。頃日官途の心得は。起請文前書之内。御爲第一に奉存候。御後園義仕間敷と有之候ヶ條にこもり居候間。何卒守り申度と日々心掛候得共。扱々右之文字に相背き候事多御座候。されはご申存分に仕候得は。狂人之如くに相成。御役を辭し候より外は無之候に付。和をも不失。己をも正敷と。色々心掛候得共。一向に出來不申。當惑之折柄與風前書之章を存出じ。季路冉有之君に事り候は。如何様なるものに候哉と疑念仕候間。御教示を以心得に仕度。奉伺度義に御座候。

私儀至て弱年の頃より刑名の事に而已携候故歟。生質疑ひ深候歟。又は愚にして人に度々被欺候故歟。或は萬に一推察の當り候事も有之候故歟。俗に申廻り氣と申もの多くこまり申候。頃日與風廻り氣は損なるものと心付。事々物々相ためし候所。扱々損なるものには相違無之。夫より偽をむかへす信せざるを慮らすと申聖語を學ひ候は。日々の御奉公其外にも大に心穩に可有之と奉存候得共。彼先覺と申義出來不申候故。至而愚物に相成。夫にては今日も參り兼候と申位に御座候。されはとて先覺の場を學ひ可申といたし候へは。専ら偽をむかへ信せざるを慮り不申候ては難成様に相成候間。先覺の場は暫さし置。偽をむかへす信せざるを慮らすと申二ヶ條を稽古いたし。今日の答出來候様之工夫心掛候得共。一向に心附不申候。いつ方より參り候は。右二ヶ條守られ可申候哉。若第一に爭心を捨つとめ候て。虚言を不申候様に仕候ては。いか、可有之哉。夫も一生涯の稽古歟と奉存候。よろしき思召之程御教示可被下候。右申上度。頓首

五月十八日認

川路三左衛門

佐藤先生足下

御疑問兩條。御尤之御儀奉存候。依而愚按之大畧左に記し申候。尙篤と御考之上御取捨可被成候。

季子然問仲由冉求之章。孔子御答ふり。餘り御引下被成候様に相聞候得共。一體このみならず。孔子御問答。其人其時によりて抑揚少からず候得は。ごんと御詞に拘り候ては。解すへからざる事數多に候。季子然此問。この度二子を其家にかゝへたるをほこり。孔子よりも必定御賞美あるへき程のこゝろにて問ひ試候。しかし實に用ひ候へはよく候へとも。たゞ名聞計のこと故。孔子の御答ふり。季子然の意表に出て。ことさらに二子を御引下被成候ものと存候。其實は二子を御抑へなされ候に非ずして。季子然を御抑へ被成たると合點し可然候。又弑父與君不從は。二子の上にて元より知れたる事に候。然るを箇様被仰候は。當時季氏の勢。齊陳恒同様の振舞あるも難計候へは。季氏之心事を御指しなされたる御答にて。畢竟二子を題にとり。實は季氏兄弟を抑へたる御教と被存候。論語中子路冉求之實を論ずる所は。千乘之國。可使治其賦。千室之邑百乘之家。可使爲之宰。などの所に可有之と存候。扱當時季氏の器量餘程の者にして。中々常人に非すと見へ候。善惡の違われ共。子路杯にごこか氣象合候所も有之様に存候。申さば子路などは事を好む氣象にて候。夫故孔子浮海の嘆あれは。直に御供に參る事と喜ひ申候。此類にて季氏顯事ある時。子路諫諍之沙汰も無之候は。萬一之時直に大將になり度氣味はなきやと被存候。冉求は錢穀之取扱長する所に候へは。知行所を廣むる事。餘りあしくも思ひ申間敷候。兎角其好みの所は氣之付ぬもの。即人情にて候。子路は孔子へさへ氣に入ぬ事は取かゝる氣象にて。諫諍第一之人物に候へ共。其好之事は思ひの外心付無之と存候。

此所杯は少しく具臣の所に可有之哉。御答ふり全く當らざる事にては無之候。扱又當時季氏國權を專に致し居候事故。季氏をさへ化し候へは。魯國治り可申候。孔子にも此人を化し度と御目の付たる人物と相見へ候。畢竟御弟子衆の季氏へ仕候を御止めなされす候も。深意こゝにありと被存候。且又孔子之御教方。其人其時の模様にて違ひ候事ゆへ。後世書籍上にては。御藥言の効能分りかたき事は。子路問。聞斯行諸。曰有父兄在。冉求問。聞斯行諸。曰聞斯行之。とあるを。同門の公西華傍に居ながら惑申候。若子路へ聞こゝに行へとありて。冉求へ父兄在ありとあれは。これは大騒動なるへく候。何分夫子の御教方。其事を教へすして其心を教へ。問をかけたる人に對しての教にて候。子貢などは顔子以下明容此人に候所。賜や如何と問候へは。汝は器也と御答被成候。何も器不器之譯に無之。子貢自ら君子氣取なる所を御抑被成たるものと見へ候。箇様の類數々御座候。季氏然之問答。即此類にて候。此章によりて臣道の常を論ずる所へ目當つき候てはあしくと被存候。

一體臣道之心得は。誰も知たる忠字の外無之候。忠は心を盡すの謂に候へは。元より心つかぬ事は止事を得ず候へとも。いさゝかも心付たる丈は。心底にのこりのなき様。十は十なからを盡すへき事に候。夫とても一概に申されず。其時の勢を計り。其事の輕重を計り發言するも。固より忠にて候。發言せず時を待も忠にて候。群議を排するも忠にて候。因循するも忠にて候。こゝは事品によれば。一定しかたく被存候得共。何分心を盡すの外有之間敷候。扱又闇昧之心底持つましきは。

固よりの事に候へども。或は心を盡すと云ふを心得違して。時勢を計らす輕重をも計らす。わつかの事を憤激し。職役を辭する杯と立騒ぎ。甚しく狂人之振舞杯するは。小丈夫の見解。又小兒のたゞ啼して親を打擲いたすやうなるもの。一向取に足らざる事に候。仲尼は甚じきをせざるもの也。孟子も評せられ候。陳恒其君を弑する時。孔子沐浴して朝せられ。請ふこれを討せんと哀公え仰上られ候。哀公三家ともに聞かざるに及びては。吾太夫之後に従ひ。敢て告げすんは非すとのみ仰られて御仕舞なされ候杯。如何にも感心かきりなき所にて候。此類の事。管晏より視れば。仲尼は孺もなき人ぞ。今一つ踏込て取扱方もあるへきに。それなりに仕舞は不がいなしと誇るへし。又老莊より云へは。仲尼はおろかも。哀公三家の聞入れなきは。元より知れたること。夫を心付す沐浴して朝し云々するは。時勢を知らぬなり。夫故我等はとく無何有の郷にのかれ居ると議すへし。然るを我孔子に於ては。何も角も御承知にて。只其心を盡され。人力丈け職分丈の所に止り。其上は天に歸せられし也。此あんばい即中庸之至徳。扱も感心此上なき事と被存候。若射之有志とあれば。及はすなから的一つ上手も下手も星を目當にする外有之間敷と被存候事。

不逆詐不億不信。抑亦先覺之御疑問。此事心學之第一にて候。拙自得之工夫とても無之。功驗を得ず候間。何とも申述べたたく候。然れども用ひ手次第にて。我に功なくとも。人之益に成間敷にも非ず。先試に妄言を述べ可申候。此工夫は居敬克己之外有之間敷候。己とは私意之事に候。私意顯然

と見へたる私欲の類は論なく候へども。我も心付ぬ私意有之ものに候。私意と申も。畢竟體軀に持たる生氣。心の知覺え混じ。むれ立烟の様なるものかと存候。此烟氣蒸立て。兎角聰明をくらまし候間。ひたすら心を敬にすへ居き。己私に克つへく候。動靜に拘はらず。たゞ義を集め。氣を背部に止め。意念之發動螢光石火之如きを慎みて。不正を正し正に歸すへし。即居敬克己之工夫にて候。たへす此工夫を着け候得は。自然とかの烟たゝす。胸中虚明にして。心の鏡曇り申間敷。即程門之常惺々法など。箇様にも可有之哉に候。扱胸中の虚明なるより。心の靈光輝發して。物影分明にうつり。人之誠偽邪正自ら拵ふへからず。是は詐これは不信と。逆へす億らされども。自然と感應あるへし。是を先覺と申すへく候。總て小人の詐偽は。如何様巧み飾り候ても。どこか端々の所不都合ありて。いつれ怪敷みへ候もの。先覺の人に非されども。大抵見へ申すへく。先覺の人に於ては。元より照破分明なる事に被存候。尤此事など實事にての御自得可有之候へは。拙輩の言を待す候得とも。兎に角に工夫は先へかゝる氣宜からず。自分を鍊磨するにありと深く考へ候事故。この論に及び申候。是迄之處。事上の御鍊磨は十分足り候間。是後之所。先覺之場御自得被成候へは。一層之妙境に透入可有之哉と被存候。たごへは武藝試合のとき。刀槍をかまへ。相手に立向ひていまた打も突もせぬ時。虚中之體と云ふやうなる者に候。我心虚明なれば。相手のすき間自然とあらはれ申候事。此味筆舌之盡す所にあらず。大畧のみ申述べ候。

貴君御性質御少壯よりの仕癖等。逐一御傾倒なされ。愚意申述候様御下問に預り候に付。不敬を不顧申述候得共。御採用は必とすへからず候。貴君之御所長。物事手早にして埒明き申候處と。ぶしつけなから被_レ存候。然所長所もこゝにあり。又短處もこゝにあるへくと被_レ存候。とかく工夫は克己之心掛宜敷様に被_レ存候。是迄手早く被_レ成候を。今より御克し被_レ成。隨分手ぬるく御心掛可_レ然候。又言語容止ともに今少し落付候様御心掛可_レ然候。臨機之所。今少し遅緩に被_レ成可_レ然哉。此御工夫御手に入候は。眞之臨機之時節は。却而是迄よりも應變御出來可_レ被_レ成。眞之急遽之時節も。却而是迄よりも迅速御出來可_レ被_レ成哉と存候。甚廣言申述。疎忽至極。恐悚無限存候得共。折角御尋之事故。所謂可_レ以言而不言失人と申すものに付。腹藏なく申述候事。

天保八年丁酉五月廿一日

坦 錄

再答

一昨日は愚意に不及義とも奉_レ伺候處。早速段々御丁寧に御書取被_レ成下。審に御教導被_レ成下。寔以難_レ有仕合。殊に深思召にて。其始末抔其外小子平日之様子迄。具被_レ仰下。殊には御奉公之大綱も相立。無_レ此上難_レ有奉_レ存候。私之倉忽は實に私もこまり。これにては不_レ濟事に平日奉_レ存候。纔半時歟

一時は與_レ風守り勝候義有_レ之候得共。直に敗軍仕。平日相嘆居候義に御座候處。御細書に而肝膽に銘し候様に付。御返事拜見之節より。心に及び候丈相守可_レ申と奉_レ存候義に御座候。若生涯之内に御教示之一毛も出來候は。大慶之義と奉_レ存候間。自棄不_レ仕修行可_レ仕と奉_レ存候。扨居敬克己之意味を御染筆奉_レ願。行住坐臥共に拜見。日々三復仕候は。縦令其事に臨出來は不_レ仕とも。醉狂人之平常之事を不忘位之事は。品に寄出來可_レ申歟と奉_レ存候間。此上之御教導に何卒御染筆可_レ被_レ成下候。此段奉_レ願度如此御座候。右は昨日之御受旁申上候。以上

五月廿二日

聖 謨

佐藤先生 足下

來書

起居萬福奉_レ賀候。然者昨日は。西城御炎上。恐入候義に御座候。扨右に付奉_レ伺候は。公儀におゐては。今日御機嫌相伺候迄之儀に候得とも。いかにも恐入候義に而。寛永。御城築有_レ之候處。此節御自火に而御炎上と申上候儀に付而は。御家來たる私共におゐては。恐入相慎不_レ申候而は難_レ成義歟と奉_レ存候。右等之儀。禮記等に心得に相成候儀は無_レ御座候哉。また譬は娘共に何となく鳴物之稽古等

をも四五日爲見合。家内一同密々七日計も別而相慎居候位之事に可有之哉。若禮記等之本文に。心得に相成候儀も候は。御教示可被下候。右に付小子之被仰示候義も候は。心得之程何卒御教被成下候様仕度奉存候。此段御内々承知仕度如此御座候。以上

三月十一日

川路三左衛門

佐藤先生足下

返書

尊示被投奉拜見候。然は昨曉 西城御炎上。誠に於草莽も一統恐入候御儀奉存候。右に付此節之御心得方。禮經などに可有之哉之御尋。逐一承知仕。御尤至極之御心付と敬服奉存候。禮記曾子問。大廟火之節。祭祀を廢し。諸侯相見旅見を廢し候事見へ候得共。君居火炎之節ケ様と申す禮は。古書中倭漢共に見當り不申候。然所拙一分之案にては。經書に無之迎も。あなかも御頓着被成間敷方歟と奉存候。何分貴臺下之御心中。此度之御炎上深く被恐入候と申御心付き。即人心之經書と申すものに御座候。是は典故に拘らず。御相談に及はす。御一己之御了簡にて。御家内御慎被成候而可然と奉存候。愚案にては。此度之災人火に可有之候得共。其實は天火にして。氣數一變之時節と被考

候。左候へは。迅雷風烈必變之類にて御座候。迅雷風烈之時。蟲けら迄も啼を止申候へは。人は元より常を變すへき筈と存候。扱人に語すへき事には無之候得共。慎の御尋に預り候に付。自分之事を洩し申候。御聞流しに被成下度候。夫は既に昨曉金鼓交發之時。窓より致一見候處。御城中と見留申候へは。恐入たる火炎と驚入。直に家内を戒め。銘々火服を着し。たゞ相慎罷在。火之元用心を肝要と致し。もし風變り。御城外延焼候ても。手前にては神主之分。必用の書物。刀劍之類計り持出し。其外家財は取片付など致間敷。尤諸生とも火消見物に參る間敷と申付置候。是は拙輩草莽のもの蟲螻同様に候得共。苟 太平之德澤に沐浴し。殊に年久敷。御廓内に住候ものに候得は。大城御炎上之上は。蟲螻は焼け内之ものと心得候までの事に候。況や貴臺下などに於ては。別して深く被恐入候筈。御尤至極之御儀と奉存。即人心之靈と申すものに候間。必しも書籍に御拘被成間敷事に奉存候。依而大抵假。御住居何方と歎咤と御定り被成候迄は。其御家内様方にも。御親類中無據御用又は御佛參之外。御外出を御遠慮。其外御祝儀事は御延し可然歟。尤令郎君文武御稽古は。少しも御遠慮に及はす。たゞ遊藝に付き候類は。御男女共暫く御休み可然哉と奉存候。日數多少遅速の所は。何か一廉之所にて御取極不被成候ては。日數極り中間敷候。鳴物四五日御遠慮と申す日數も。少し目當無之様に被存候。もし一廉無之時は。半月と歎又は一ヶ月と歎可然哉に被存候。折角御尋之事故。無伏藏申上候。畢竟妄言に近く。又御内談之事に候間。前文之通り任筆申上候。尙篤と御取調

被成候様にと奉存候。以上

戊戌三月十一日

川路三左衛門様

佐藤捨藏

丁亥偶得二條

山下有風盡とあるを。風起り山へ吹きあつれば。山の草木を吹き破る。即盡敗なりと。古人の説にあり。余案するに。この風もと山上より吹おろして。其勢きひこきゆへ。山下までの草木をつよく敗る事なるへし。山下の風は。陸地と違ふて至て緊じきもの也。吹きおろす勢あれば也。家傳この類の句。山下出泉蒙も。山中の水いま山下へ流れ出す事なり。再致すへし。待小人不惡而嚴の小人。必しも爲惡の小人のみならず。凡そ下にあるもの。何のわきまへも無きもの共。皆然るへし。

文政九年丙戌臈月。松崎謙堂よりの文通。

遠州横須賀藩依田半七方に佐藤家之兜等傳來有之候。掛川山角武右衛門と申すもの其縁家にて。渠より申越し一齋へ讓度との事如何と申來候。右依田氏は知還院様御娘子被嫁候家にて。佐藤家遺

物も可有之事に付。右之兜等讓受度之趣申對候所。今春謙堂方迄其品送來候。右依田氏より山角

氏への書狀並別紙寫し如左。

一筆啓上仕候。餘寒強御座候得共。被成御揃愈御安泰被成御入。奉賀候。隨而私方無異罷在候間。

乍憚御安意可被下候。

一佐藤家之兜並書物類。爲持差上候間。御幸便之節可然奉願候。小子家に預り置候處。享保十四年

より今年迄に御座候。凡百年にも可相成哉に奉存候。又々佐藤家に譲り候様に相成候處。大慶に

奉存候。尙得拜顔委細御咄可申上候。頓首

兜 壹ッ

御書類

香合 壹ッ

右之通御請取可被下候。以上

(文政十年丁亥)

正月十六日

依田半七

山角武太夫様

拜見仕候。江戸表松崎氏よりの御狀爲御見被下。逐一承知仕候。捨藏喜悅之趣。大慶不過之奉存

候。右御狀之内に。佐藤家紋所之付候品有之候は、譲り可申趣。紋所之付候品は無御座候。此段御文通之節。宜被仰遣可被下候。

佐藤家兜 壹

松豊前守様御書 壹通

松彈正様御書 壹通 松平彈正君にて松永彈正に非す

松相摸守様御書 壹通 光仲公なり

松肥前守様御書 壹通 松浦鎮信君にて松平に非す

不老門前日月遲有之候は、嘶に承傳候。祖父 備前少將様御筆之趣私え申聞候。

新太郎公に相違無之もの

外に香合 壹ツ

右之品佐藤家之品々に御座候。此度御讓申候間。松崎氏え可然御掛合可被下候。以上

正月十日

半 七

武 太 夫 様

追て松崎氏よりの御狀返却仕候。以上

依田氏え謝帖寫

一筆致啓上候。向暑之節御座候處。彌御安寧被成御興居。珍重奉存候。然者先般其御家に御傳有之候兜一匁。古文書六枚。香合一。御讓被下。辱次第奉存候。右は古同姓知還院九郎右衛門所持之品に候處。九郎右衛門妻淨翁院事。晚年貴家へ以御縁致寓居候節持參候由。享保十四年より今年迄御持傳被置。從來佐藤家之品に候得は。此度拙家へ御讓可被下之趣。掛川御家中御縁家山角武右衛門殿を以。同御家中拙子友人松崎慳堂迄被仰越。段々御懇情之御事共。感銘之至大慶不過之候。如何にも中古先祖池田家に勤仕罷在候節之品に相違無之と相見へ申候。能く年久敷御持傳被下。畢竟御代々御厚情之所より永傳いたし候事と深く感謝之至。此度御讓に相成候上は。子孫えも此旨申貽り永傳爲致候様可仕と。大幸至極辱致拜受候。且又古文書も古主人家池田淺野兩家之名前に候へは。其家に勤仕罷在候證據にも相成。欣幸仕候。香合是亦淨翁院遺物と存候。同様珍藏可致候。扱又右御厚情之御禮。幾重にも致方可有之所。當時之身分心底に不任候へは。寸志之御禮申述度之驗迄に。乍輕少銀二枚。御肴代金貳百疋致進覽し候。御咲納被下候は。大幸之至奉存候。吳々も菲薄之儀。誠に寸志迄にて致報顔候。何分御容赦被下度候。已後は追々御文通可申上候得共。先右之御禮申述度迄。如是御座候。餘は期後信之時候。恐惶謹言

佐藤捨藏

四月十二日

坦

依田半七様

尚以御家内様えも御致意宜敷相頼候。弊族同様宜申上候。將又此度之儀。山角氏御取扱被下。扱々辱奉存候。未だ御知人にも無之。別段書狀指出し不申。貴家より何分宜敷御謝意奉頼候。以上

慊堂之文通寫

尚以爾後御疎濶打過。扱々貴兄と違。誠に多忙不得寸暇。參上も不仕候。此度之兜。扱々珍敷古物。弊家に於ては珍襲可致之品にて。大幸至極に御座候。吳々も山角氏え宜御致謝被下度候事。拜啓迎梅時節。御健勝拵々賀々。客冬已來御周旋被下候佐藤家舊物之兜。並古文書六葉。香合。過日掛川より轉致。早速令郎君御持參被下。慥に入手いたし候。如何にも中古池田家へ致勤仕候先祖之舊物に相違無之。文書亦左證に相成。大慶至極仕候。山角氏御取次被下。遠方之處彼是之御世話。厚辱奉存候。拙事未得拜顔候事故。御文通も不致候間。貴君より何分宜敷御謝し被下度候。山角氏えも何ぞ謝物致し度候處。遠方之事旁不任其意。乍菲薄御肴料金百疋致進覽之度候。貴君より宜敷御謝し被下。此封御郵寄被下度候。將又横須賀依田氏え之御謝帖。是亦貴君へ御頼申候間。御

傳達奉托候。拙事横須賀侯へ舊來參り。直に文通も相成候得共。此度之事者。掛川筋より起り候間。終始を結び候方と存し。轉達御頼申候。依田氏え如何様にも謝度候得共。御承知之通りに候得は。甚菲薄之事に候。銀二枚肴代二百疋相贈申候。則封中に入置申候。瓜報之所慚愧不少。何分御斷被下度候。扱又先方よりは首春の事に付。餘り挨拶延引いたし候。何卒早く相達し候様いたし度候。此處尚又御周旋宜御頼申候。右等匆々布字。頓首

長夏十二日

尚以先頃依田氏え先つ致入手候所迄は。横須賀老臣寺岡左内へ頼み遣し申候。謝物等之事は。掛川の方へ托し度候。扱又此魯酒一壺。是は貴君への謝也。酒既薄矣。謝亦至薄。余則不醉而顔赧。一々察之。

追白。山角氏御狀返上。御入手被下度。餘兩通は直に御貫置申候事。

芳墨拜讀仕候。如貴命向暑之節御座候得共。貴家被成御揃。愈御安泰被成御起居。奉敬喜候。將又先般傳來之兜一匁。古文書六葉。御讓申上候處。早速其御地え相届。御歡被成下候條。御細書之趣。被入御念候御事に奉存候。右は知還院様御室淨翁當家え御持參之後。永く持傳候處。從來佐藤家之御重寶に候得は。私家に持傳へ候よりは。貴家え御讓申上候方可然哉の趣。掛川藩中縁者山角武太夫と嘶合候處。其砌松崎慊堂子掛川表え被參居。兼々武太夫御懇情之御仁に御座候間。右之御

嘶合申述候處。兼々尊公様御友人に御座候間。御歸府之上御相談御座候處。御懇望之趣。松崎御氏より申參候。何様私宅に差置候而者。傳來之古物と申而已にて。實は他家之御道具御預り申置候處。此度御讓申上候條。時節到來に而。於私如何計大慶不斜奉存候。古文書は格別慥成證據も無之。如何と奉存候處。是も古御主人家池田淺野御兩家御勤務被成候御證據にも相成候御考。御怡悅被成候趣。右に付今般銀貳枚並御肴代貳百疋被贈下。大幸之至。忝次第奉存候。畢竟舊來之御由緒にて。御讓申上候而已と相心得。中々以預御謝物候心底には無御座候處。段々御懇情之御細書。其上被爲入御念候御取扱にて。甚奉痛入候。外之御家筋にも御座候は。再三御辭退も可仕筈に候得共。舊來之御由緒を以被下置候品返却仕候も。甚失敬之至奉存候間。仰に隨ひ直拜受仕候。右に付自今は御文通も被成下候趣。別而大幸之至奉存候。此上は折々御左右相窺度奉存候。未得尊顏候得共。御惣客様えも前條之趣宜被仰上可被下候。右御禮御細書尊報旁如斯御座候。萬々重便可申上候。

恐惶謹言

依田半七

方庸為

六月二日

佐藤拾藏様

尊報

猶々本書御贈書共に落手。御懇情之趣。殊に家族之者え御傳書之趣。忝仕合に奉存候。掛川武太夫にも御傳言之趣申遣候處。同人方へも今度御肴料被下候趣。重々於私大慶之至。併被入御念候御取扱。吳々奉痛入候。武太夫妻は私妹にて重縁之儀故。自今御心安被思召可被下候。同人よりも近々御禮狀差上度趣御座候間。兼々左様御承知可被下候。以上

別副。去秋松崎慥堂子當地へ被越候節。横須賀藩中依田家に舊來持傳候兜。子細相尋候處。尊家に可有之器物之處。御由緒御座候間。依田家へ相傳り。大切に所持之咄承り候間。何卒其御家へ御讓渡申度。幸に慥堂子に物語仕候處。歸府之上尊前様にも申上候處。御望之趣被申越候間。半七方え其趣及通達候處。他家え讓候とは譯違ひ。御由緒正しき尊家え御讓申候條。年來持傳之古器。今度無難に再御家え戻候條甚大慶之趣。吳々申越候間。松崎氏まで趣意相認御兜相贈候處。早速相届。甚御喜色之趣申越。於小子大悅不斜奉存候。右件御世話仕候間。今度被思召。私方へ御肴料被下置候趣。松崎氏より相贈申候。右件彼是御心配被成下候ては。却而痛心候間。慥堂子えも前廣に御斷申置候處。被爲入御念候御事にて。重々奉恐懼候。併外ならぬ御事にて。御辭退かましくても思召に叶ひ申間敷察入候間。早速拜受仕候。依田氏えも段々被爲入御念候。御細簡に而。御目錄被贈下候趣。風聽申越候。於私本望之至に奉存候。從是も田舎相應之野物御答禮仕度心掛候得共。

未得幸便。心外之延引仕候。何卒折を以猶又御容體伺度。専余奉感候。重便に彼是厚御禮申上度心底に候得共。拙筆不任心候間。前後御批覽可被下候。未得尊顏候得共。御内君様方えも厚御禮被仰通可被下候。萬序奉期重便候。頓首百拜

六月七日

山角武大夫

佐藤捨藏様

梶介元服爲致候手續

老爺服紗麻上下にて書齋に着座。梶介是迄持來之服紗麻上下着用。川田八之助事梶介を召連書齋え罷出。今日吉辰に付梶介元服爲致候趣申述。爺挨拶有之。夫より座敷客席え致着座候と。家兼中川良八麻上下にて熨斗三方床之間え出し。引續き薄縁手洗湯桶剃刀毛受を具持出。其席え居置。右熨斗三方持出候を合圖に。山田中藏上下にて座敷に罷出扣居。用意整候節。梶介座に即き。中藏進み角入致し可遣候。終て梶介復座。中藏へ挨拶致し。中藏退座。良八右之剃髪を毛受之儘床之間に差置。其餘は引可申候。終て八之助梶介を召連書齋へ出。元服無滞相濟候趣爺へ申述。其節挨拶有之。梶介え熨斗目麻上下遣はす。拜受致し次之間へ引取。直に着更候て。再度禮に可罷出。其時良八熨斗三

方を爺之前へ持出す。爺切熨斗を梶介へ遣し可申候。引續き八之助罷出。今日之祝儀申述候節。已後大人之心得篤と申合被吳候様頼可申候。終て梶介奥へ參り。母初兄弟共へ禮を申述。神主を拜し相濟。再度座敷へ罷出候節。八之助座敷上座に居付。良八見臺へ禮記冠義を載せ持出。八之助前に居置。梶介兼而用意之本を懷中より取出し。末座に居り講釋可致聽聞候。其節は爺着座無之。右講釋相濟。八之助より扇子祝遣し可申候。夫より梶介祭酒公御用所へ罷出。今日元服仕候趣申上。塾中諸生衆えも可致普爲聽候。右相濟候て。祝料理出し可申候事。伊勢小笠原元服之禮式に。柳板櫛篋等之品より種々作法有之よし。又當林祭酒御定め三加之御式も有之候得共。弊家など畧禮にて相當可致に付。前文之通りに取扱候事

天保七年丙申十一月廿八日

愛日樓主記

天壽寺... 御座候。然處此度御家督被爲受候而者。御勤向萬端大分御容子被爲替。御懈怠無之。乍憚奉感心難有御事に奉存候。兎角物事始めは有之ものに。終の續き候事致し難き者に御座候。何卒向後此節之御振合に。諸事御心掛被爲在候は。恐悦不可過之候。夫に付御心得方申上置度事共認上申候。御熟覽被下置候は。本意之至奉存候。一兼々も申上候通り。人道は孝行より始り申候。今に至り候ては。先候御在世之時。御孝養十分に御盡し不被成候事は。定而御後悔も可被成御座と奉察上候。然處孝と申すは。必しも御生前のみては無之。御終身之事に候。此事御辨有之様仕度。今におゐて能々先候之御心を以て御心と被成候時は。即今之御孝道に叶ひ申候。先候御聽被遊候て。御安心之筋に候得は。自然と御神靈に感通可仕之理有之候。御神主祭之譯

俗簡焚餘卷下

御心得向存意

御部屋住之内。御孝道之事。愚意申上候次第有之候處。其頃之御容子は。始終之所御案し申上候事も御座候。然處此度御家督被爲受候而者。御勤向萬端大分御容子被爲替。御懈怠無之。乍憚奉感心難有御事に奉存候。兎角物事始めは有之ものに。終の續き候事致し難き者に御座候。何卒向後此節之御振合に。諸事御心掛被爲在候は。恐悦不可過之候。夫に付御心得方申上置度事共認上申候。御熟覽被下置候は。本意之至奉存候。一兼々も申上候通り。人道は孝行より始り申候。今に至り候ては。先候御在世之時。御孝養十分に御盡し不被成候事は。定而御後悔も可被成御座と奉察上候。然處孝と申すは。必しも御生前のみては無之。御終身之事に候。此事御辨有之様仕度。今におゐて能々先候之御心を以て御心と被成候時は。即今之御孝道に叶ひ申候。先候御聽被遊候て。御安心之筋に候得は。自然と御神靈に感通可仕之理有之候。御神主祭之譯

も。感通之理有之より起りたる事に御座候。扱先候之御心と申すは。當侯に御家督被成御讓。上は御勤向に御身を被入。下は御家中御領内御取治。能々人々難有かり。御代を全ふ御續被成候様にこのみ被思召候より外有之間敷。然らば御勤向に御油斷無之處。御孝心之第一に御座候。此節之通り御勤向御懈怠無之。逐々御精勤被成候へは。先候之御餘光にて。御奏者番杯被蒙仰候事は。必定之儀と奉察候。惣而御席は是非御役義輕重によらず御勤可被成事。御本意に御座候。此所御心掛專要に御座候。御初代様より御代々御役御勤に候て。御一代抜け候ては。御殘念之御事に御座候。御奏者番より上は。其時の御運次第に候得共。先々此場所は屹度御勤まり可被成候。左て御年薦にも被爲成候へは。必四品には被任候御事に候。是こそ大抵之御孝行にては無之候。先以此御心掛。今におゐての御孝道と奉存候。御家中御領内御治方之儀は。追々可申上候。

一此後之御心掛。御部屋住とは違。兎角人之難有かり候様にと御心掛可被成候。難有かり候と申すは。御恩恵を被施候計にては無之。人々の勤め能き様に被成下候處。第一と奉存候。扱其勤め能き様にとは。表奥とも瑣細之事は大ふ目に被成候て。こせつきたる御世話無之候得は。自ら下は勤め能く相成申事に候。扱又下より申上候事。夫にて害無き事は。其上之思召有之候とも。先つ下の申分を御取用有之時は。銘々難有かり心力を盡し候ものにて。惣體へかけ御爲に宜敷御評判へも響き可申候。

一兎角人の過失は。口より出申候事多く候。御寡言に被成。御功者振之無様に御慎御座候へは。御過失有之間敷候。上下共得て胸中にある事直に口はしると申す事。禍之本にて御座候。即先候之御風儀御氣象之處に。爰を御慎被遊候事嚴重に被爲在候。先候を御慕。其御風儀に被成候は。御身之御爲め且御孝道に叶可申候。

一御寡言之御慎は。御同席様方他家御家來杯へは勿論之事。被召仕候御家臣とても。御身分にかゝり候事。御政事に就き候事杯。御年寄共御側御用人之外へは。決而御沙汰被成間敷候。御側向御醫師女中等へ風と御洩し御座候ては。甚不宜候。殊に婦人は口早きもの。其上渡りものに候間。直様他所へ洩れ候て。御風聞にも拘り申候。

一御續合有之候御親族と申ものは。別段の御情合あるものに候。今御父兄様は不被爲在。御叔父様御一人に候。仍而は。先候御遺命之通。御叔父様を御親父様と被思召。何事によらず御親敷御相談被成へく候。此時はいくら御多言にても。御隔意無御座候。御叔父様御了簡にさへ御從被成候へは。即候之御了簡に相成り。御仕合之儀に御座候。御續も無之他家にて。御叔父様え御政務打割御内談之家。大小數多に御座候。然る處候には外ならぬ御續合にて候へは。御仕合と申すものに候。随分御尊敬を加へられ御慕被成候様仕度候。

一重役之者は。並之御家臣とは事替り候間。御尊敬あるへき事に候。家柄之重役は御同姓にも同しく。

御こはく思召され。御遠慮も有之程に可被成事にて。重役たるものも其心得にて。御伽ケ間敷事は致間敷事に御座候。扱其御尊敬と申すも。外向御形容計にては。畢竟虚禮と申すものにて。詮無之候。御家政御打任せ。御爲第一に取計候もの故。萬事御力になり。御心丈夫に被思召候處より。自然と御尊敬被成候譯に御座候。

一重役を御こはく被思召など、申候事を。趣意御取違御座候てはあしく候。畢竟物事御打明し。御親敷御相談も有之。就ては遠慮なく了簡申上。御爲に不宜候事は合點不仕。存寄候事は眞直に申争も仕候もの故に。御こはく御座候にて候。是は御親敷き所よりの譯に御座候て。御隔意之譯に無御座候。

一御年寄共之次は。御側御用人にて御座候。大抵之事は御打明し御相談御座候ても宜敷候。其外は御先代御親邊のものにて。當時御側に罷出不申候ものは。御呼出し御談の事などは無之方宜敷御座候。

一兎角人は貴賤によらず自分をよしと思はざるものは無之候。輕きものは兎も角も。貴人に於ては別而自らよしとする事。戒しむべき事に御座候。人言を御聽被成候時。思召に應せざる事。又御異見申上候ものは。皆御爲を存したる能き御家來と可被思召候。上へ對しては扱も了簡の申にくきものに候處。夫を申上候は。能々の忠誠と可被思召候。又御意次第に成り候者は。諂ひものにて。

御爲を計らすた、身爲を計り候不忠ものと可被思召候。ケ様之御心掛に候時は。自然と君を欺き奉り候もの無き様に相成り。惣體御臣下之御風儀も正敷可相成事に御座候。

一此外御心得方は種々有之候得共。乍憚御出來被成兼候事を申出候ては。御益無之候。御用ひさへ被成候へは。御出來被成候程之所。又御性質に應し候事を申上。造作も無き事共に御座候。併是さへ其通りに被成候へは。御身之御爲のみにあらず。御家中御領内迄之仕合にて。即御孝行之大なるものに御座候。右數條存付候儘に認上申候。御取用被下候は。本意之仕合可奉存候。以上
戌十月朔日

御輔導存意書

爲築前支封秋月侯 (安氏本此八字ナシ)

一御學問之儀は御終身之事に付。始終御廢學なき處肝要と存候。唯今之内は御素讀第一にて。成るへき丈御素讀果取相濟候様。御心掛可被成候。大抵御年十五六之頃迄に。文義かなり御すめ被成候様にさへ候得は。先は始終御廢絶に至らざるものに御座候。夫迄之内左程に不參候とも。御年頃に至り。得て御懈怠を生し御廢絶に至り易く候。仍而早く御讀書に御苦勞なき場に至られ候へは。自と御續き被成候様に可相成候。此節少々講義も申上候得共。専ら文義一通り御分り被成候

處を主と致し。且當時御心得方一二に及び申候のみに御座候。兎角學問を六ヶ敷ものと思召され候ては不_レ宜候。淺近之所より歩々御進み。其間に御馴れ被_レ成候内には。御面白み出來候所より。自然と御上達に可_レ被_レ至候事。

一日に何程と課数を立られ候事。肝要に御座候。大抵一日を四つ割に致し。其三を以て御稽古之時刻と定め。其一は御随意に可_レ被_レ成候。若又外御用も有_レ之候節は。御課程の方へ可_レ被_レ向候。夜分之處是亦御随意にて宜敷候。御年十五にも至られ候へは。夫より一層御骨折被_レ成。夜分も四時頃迄は御勉勵可_レ被_レ成候。先此節は御年相應之處にて宜と存候事。

一武家之上にては。武藝貴賤となく必心掛候事に候得共。此節より諸藝不_レ殘被_レ成候にも及申間敷候。是は御年齢之程合有_レ之候もの故。當時之處は。御身體運動之爲め御氣前の發し。御丈夫付かれ候位の處にて可_レ宜候。尤御年十五よりしては。諸藝逐々一通り御修鍊可_レ被_レ成候事。

一讀書は氣分屈し易く伸さる所あるもの故。其人により柔弱にして振はさる弊を生じ候事有_レ之候。仍ては武藝にて身をこなし運動を付候へは。讀書之爲にも其益有_レ之候事に御座候。亂舞杯傍御習被_レ成候得は。聲を發し自然と氣分流動致し。寸益も可_レ有_レ之哉。且後々御交際之間にも。一と通りの所は御辨へ被_レ置候方可_レ宜哉。但御好み過ぎ被_レ成候ては不_レ宜候事。

一物好きと申事。誰にも有_レ之候得共。御部屋住の内は。何事に寄らす父君之命せられ次第。傳役之

申上次第に被_レ成候方。肝要に御座候。物好き癖付き候得は。終には奢侈を引出し候弊御座候。儉約と申事は。唯今之内は仰上られぬ方可_レ宜候。御幼年より儉約之事御存知に候へは。自然と利に趨られ。仁愛之御心薄く成り候ものに御座候。鄙劣なる事。吝嗇なる事之弊を生じ申候は。多く世風の儉約より起り申候。御成人に至られ候節は。逐々儉素の御心掛も可_レ有_レ之事に御座候。たゞ財と申すは貴きもの。是にて人を救ひ賞を與へ。龜末にすへき物に非すと申程の所迄を御心得にて宜敷候。前々御物好きを御留め申候所に深意御座候事。

一人を御いたはり被_レ成候御心掛。肝要と存候。高貴之御年少方。とかく人を調弄する氣味あるものに候。人を翫へは徳を喪ふと有_レ之。始終御失徳之基と相成候。萬一誤たれ調侮之事御座候は。其後夫を御取返し之爲め。其者へ何ぞ恵を與へられ候様にも可_レ被_レ成候事。

一下々よりよろしく存あけ有かたかり候と申事を。よき事に被_レ思召候御氣くせを付候が。則御進徳の端に御座候。御主人は無理なされ候ても濟候ものと申やうに。風と御くせ付候と。始終の御失徳これより生じ候事。

一嗣君御住居は。御表方とも違申候故。姑く御稽古所と思召され。御側廻り年若之者御伽子共まで。當番中讀書手習。其外武藝稽古等も勝手次第に被_レ仰付。嗣君も其間へ御打込。共々に被_レ成候事なと可_レ宜候事。

一 御養生向も肝要に候へども。御成長に従ひ。寒暑風雨に御觸れ被成候事も。又御修行之一と存候。始終海陸遠路御往來之事に候へば。其時之御ならしにも。折々御難義被成候事宜敷候。とかく貴人は御養生と申より。御弱くなられ候弊を生じ申候。又人込之中へも。時折は御這入御試被成可宜候。後に火事場御出馬等の事有之。御幼年より人こみ御なれ被成候も宜候。御氣丈なる所有之候御取扱も御勘辨可有之候事。

一 野邊御騎行又御歩行など。月々一兩度御運動之爲に御出可宜候。郊外にて農家へ御休息なされ。其あたりに有合候農具織具など。或は用ひ方等御聽被成。夫に付民事之艱難をも御合點被成候様に可相成候事。

一 讀書は目に見候て益を得申候へ共。學問は目計りにては無之。聰明と並ひ。耳に聞候事も其益少からず。兎角人之話を御聞被成候事と。人へ御尋被成候事。肝要に御座候。尤うかと御聞被成候而は詮無之候。始終人言を御用ひ。諫を御聽被成候は。御稽古と相成候事。

一 時折本邦國初軍談物記録類。御讀ませ御聞被成。或は御自身御讀被成候事。御學問之一ツに御座候。其御家。御先祖様方之御功業等は申上るに及はず。委敷御記憶被置候事。第一に御座候。是は又御慰に申すに無之。御心を留られ。御追慕なされ。其時は御崇敬之意を起され。御行儀正敷御聞可被成候。諸家之事跡に至り候ても。昔話となされず。御自身も其人々におごるまこと御勵みな

され候御念頭出候様いたし度事。

一 威儀之事。古人之教御座候得共。今は此道絶申候。夫故貴人方に應對進退あまり輕々しく不似合の方も多く御座候。内外こもく養ふ所大切之事に御座候。御身柄御相應之御會釋御取廻しになられ候様。御傅役之衆被心付度ものに候事。

一 人主之戒むへきは我儘。貴ふへきは思ひやりにて候。御幼稚より能御吞込被成候様。御輔導被致度事。

一 物をいそぎ候事と。人を疑ひ候事。貴人之病に往々有之候。御幼年よりこの御癖付なき様。御輔導申たき事。

一 大所に目を付けすして小事を咎め。重きを捨て輕きに従ひ。先にすへきをぬかし。後にすへきを急ぐ。これ大失にて候。此類御幼弱之御辨へあるへきに非ず。御傅役能々此意味を吞込まれ。御輔導申あけられ候へは。自然と其風に御移り被成。後々之御爲に相成可申候事。已上

某侯代撰

爲清末侯號需堂 (安氏本此七字ナシ)

我等事不肖之性質に候得共。先般致家督候上は。家中領内取締向之事行届候様致度。文武忠孝を勵し

禮義を正す事は。御法令第一之事。銘々心得居可申筈に候得共。誰しも油斷勝に成り嘆しく候。一體手前累年之不勝手。借米等も過分に成來候へは。家中者共自然と衣食不足に相成。文武諸藝等も自然と出來兼可也に。今日之勤向一通りに相成候事は。餘義も無き事に候。乍去此御法令に違背可致之様無之事。何分此度も無油斷相勵申候様可致候。此度家中手當割直し申付。可成丈は撫育遣し候心得に候間。銘々にも可成丈儉素に心掛け。文武之嗜無油斷。我等存込之所に叶候様心得可申事尤に候。一體爲取候品不足に付而。諸藝修行も出來兼候事は無餘義候得共。右不足之所にて。其内には矢張奢侈分限不相當之事。又は飲酒に耽候輩も有之候と聞へ候。金銀之鎊等は。大小小道具等に用可申は不苦候所。遊具烟具等。或は兒女髮飭等に相用候事は。不心得千萬にて候。已後物事儉素に心掛。右様之心得違無之様可致候。上下に限らず物事出精いたし候と。儉素にいたし候より。家を保可申候所。得て飲酒よりは身を崩し家を敗申候ものに候。飲酒より奢侈も生じ。怠惰も生じ。百敗之本に候に付。此度改而申付。禮義之外飲酒に長す間敷候。屹度申付候間。已後飲酒之失有之候ものは。嚴重に咎め可申付候。又貧窮なりにも文武藝能出精いたし候ものは。相應之褒美も爲取度候。此意趣遺失無之様可致候。奉公いたし候もの。上下に限らず一和いたし申談し。私意我意を張間敷候。瑣細之事を咎め。人之陰事を發し候様之風俗不宜候。兎角上一和一和いたし候得は。人數寡にても引立可申に付。此處我等之

爲に左様いたし可申候。尤壅蔽して上へ不申出候事は。後暗き事にて不宜候。何事によらず申出候事は可有之。取捨者此方に有之候。深切なる厚き風俗に一統可心掛候。親類縁者之親みを取失はず。相互に心添持合世話可致。老人を敬ひ。師道を貴ひ。悌順に可致。幼年之者へも。父兄能々此趣を教込可申候。上官へ無禮無之様可致候。我等申付候役人に候へは。上役え不敬之振舞いたし候は。假其理見事にても。我等への不敬にて候。能々心得可申候。御代被仰出之内。銘々心得居可申筈には候得共。年古き事は。其内遺失も可致に付。此度爲書拔。尙又爲見候間。篤と熟覽いたし。得其意可申候。領分百姓共卑賤のもの。何之辨も無之筈に候得共。國本にて候間。勞りを掛け大切に取扱。無慈悲之事無之様いたし可遣候。職人商人逆も用達のは。權位高にいたし。迷惑無之様可致候。

丁亥建言

大赦の令は國政に於て無之事に候。小人の幸にして。君子の不幸なり。凡刑罰之輕重は。天罰天討にして。人君の私する所に非ず。罪人年月を経て赦すへき者あれば。其罪に従て赦す。吉凶に就て赦

すと云ふ事はあるまじき也。然れ其後世に至り。倭漢とも大赦の事起り。漢土にては休復賜酺大赦等吉事ある時に舉行ひ。本邦近世にては大葬追福等の時に大赦の令あり。一體赦令は小人の幸にして君子の不幸也と。諸葛武侯の赦を好まざる事。宜なる事に候。併今に於ては吉凶の事あるにほに。小罪を赦して政法に能き事もあれば。全く廢すへきに非ず候。侯家舊來赦令の無きは良法と云へとも。今は官家にては既にこの事有之。且又このしほに赦すへきものもあれば。輕罪にて情矜むへきものは。赦して害なかるへし。盜賊已上又情惡むへきものは赦すへからず。仍て此度新令を設け。御一代に一度代替り新政の時に。赦令を行ふを以て定法と爲すへく候。追福あるに依て赦するは。冥助を求る意に當り。又吉事の喜に乗じて赦すへき譯も無之候。依ては人君初政一新の時に爲すへし。新政は年々春のある様なるものなれば。此時こそ赦あるへし。且又初政は一家吉凶相替るの時。倭漢兩様を兼る意味とも自然と含めり。仍て今是を以て永制と爲すのみ。

重職心得箇條

岩村藩 (安氏本此三字ナシ)

一重職と申すは。家國の大事を取計へき職にして。此重之字を取失ひ輕々しきはあしく候。大事に油斷ありては。其職を得すと申すへく候。先つ舉動言語より厚重にいたし。威嚴を養ふへし。重職は

君に代るへき大臣なれば。大臣重ふして百事舉るへく。物を鎮定する所ありて人心をこつむへし。斯の如くにして重職の名に叶ふへし。又小事に區々たれば。大事に手拔あるもの。瑣末を省く時は。自然と大事拔目あるへからず。斯の如くして大臣の名に叶ふへし。凡そ政事名を正すより始まる。今先つ重職大臣の名を正すを本始となすのみ。

一大臣の心得は。先つ諸有司の了簡を盡さしめて。是を公平に裁決する所。其職なるへし。もし有司の了簡より一層能き了簡有りとも。さして害なき事は。有司の議を用るにしかす。有司を引立て。氣乗り能き様に驅使する事。要務にて候。又些少の過失に目つきて。人を容れ用る事ならねは。取るへき人は一人も無之様になるへし。功を以て過を補はしむる事可也。又賢才と云ふ程のものは無くても。其藩だけの相應のものは有るへし。人々に擇り嫌なく。愛憎の私心を去て用ゆへし。自分流儀のもの計を取るは。水へ水をさす類にて。鹽梅を調和するに非ず。平生嫌ひなる人を能く用ると云ふ事こそ手際なり。此工夫あるへし。

一家々に祖先の法あり。取失ふへからず。又仕來仕癖の習あり。是は時に從て變易あるへし。兎角目の付々方間違ふて。家法を古式と心得て除け置き。仕來仕癖を家法家格など、心得て守株せり。時世に連れて動すへきを動かさざれば。大勢立ぬものなり。一先格古例に二つあり。家法の例格あり。仕癖の例格あり。先つ今此事を處するに。ケ様々々あるへ

こと自案を付。時宜を考へて。然後例格を検し。今日に引合すへし。仕癖の例格にても。其通りにて能き事は其通りにし。時宜に叶はざる事は拘泥すへからず。自案と云ふもの無しに。先つ例格より入るは。當今役人之通病なり。

一應機と云ふ事あり肝要也。物事何によらす後の機は前に見ゆるもの也。其機の動き方を察して。是に従ふべし。物に拘りたる時は。後に及でとんと行き支へて難澁あるものなり。

一公平を失ふては。善き事も行はれず。凡そ物事の内に入ては。大體の中すみ見へず。姑く引除て活眼にて惣體之體面を視て中を取るへし。

一衆人の厭服する所を心掛へし。無理押付之事あるべからず。苛察を威嚴と認め。又好む所に私するは。皆小量之病なり。

一重職たるもの。勤向繁多と云ふ口上は恥べき事なり。假令世話敷とも。世話敷と云はぬか能きなり。隨分手のすき。心に有餘あるに非れは。大事に心付かぬもの也。重職小事を自らし。諸役に任使する事能はざる故に。諸役自然ともたれる所ありて。重職事多になる勢あり。

一刑賞與奪の權は。人主のものにして。大臣是を預るべきなり。倒に有司に授くへからず。斯の如き大事に至ては。嚴敷透間あるへからず。緩急先後の序を誤るへからず。徐緩にても失し。火急にても一政事は大小輕重の辨を失ふへからず。緩急先後の序を誤るへからず。徐緩にても失し。火急にても

過つ也。着眼を高くし惣體を見廻し。兩三年四五年乃至十年の内何々と。意中に成算を立て。手順を逐て施行すへし。

一胸中を豁大寬廣にすへし。塵少之事を大造に心得て。狹迫なる振舞あるへからず。假令才ありても其用を果さず。人を容るゝ氣象と物を畜る器量こそ。誠に大臣之體と云ふへし。

一大臣たるもの。胸中に定見ありて。見込たる事を貫き通すへき元より也。然れども又虚懷公平にして人言を采り。沛然と一時に轉化すへき事もあり。此虚懷轉化なきは。我意之弊を免れがたし。能々思索あるへし。

一政事に抑揚之勢を取る事あり。有司上下に鈞合を持事あり。能々辨ふへし。此所手に入て。信を以て貫き義を以て裁する時は。成し難き事はなかるべし。

一政事と云へは。拵へ事繕ひ事をする様にのみなるなり。何事も自然の顯れたる儘にて參るを實政と云ふべし。役人の仕組事皆虚政也。老臣など此風を始むへからず。大抵常事は成へき丈は簡易にすへし。手数を省く事肝要なり。

一風儀は上より起るもの也。人を猜疑し陰事を發き。たとへば誰に表向ケ様に申せ共。内心はケ様なりなご。掘出す習は甚あし。上に此風あれば。下必其習となりて。人心に癖を持つ。上下とも表裡兩般之心ありて治めにくし。何分此六かしみを去り。其事の顯れたるまゝに公平の計ひにし。

其風へ挽回したきもの也。

一物事を隠す風儀甚あし。機事は密なるべけれども。打出して能き事迄も。韜^{たう}み隠す時は。却て衆一人に探る心を持たせる様になるものなり。一人君の初政は。年に春のある如きものなり。先づ人心を一新して。發揚歡欣の所を持たしむへし。刑賞に至ても明白なるへし。財帑窮迫の處より。徒に剝落嚴^{げん}之令のみにては。始終行立ぬ事なるへし。此手心にて取扱あり度ものなり。

答三宅辰之助

西條藩三宅辰之助世々城代職之家たり。近年主命を受て家塾に寄宿せり。一日城代職之心得を問

れければ。大旨を書取て示す事如左。城代之職は一城之守護なれば。守の一字着眼緊要たるへし。兵法守と攻との二つに過ぎれども。城代は攻るの職に非ず。守るを以て職と心得へし。守れば堅し。堅ければ全かるへし。是こそ着眼之所なり。さて守と云ふ事容易ならず。一たひ人心を失ふときは。金城湯地たりと云ふども。守る事能はず。然らば如何して士民の心を得るとなれば。第一其身を守るを以て。城を守るの基となすへし。能

其身を守るは。又其心を守るにあり。心之徳。仁と義との外なし。仁義之二字。至大至遠なれども。姑く手近き所にて云へば。なさけと義理との事と知るへし。兎角なさけ深くあれば。士民も慕ふ處ありて。我になつくもの也。義理を失はねば。人々感ずる所ありて。我に對しても義を立るものなり。是感應の理。即人心を得るの道なり。此仁義に本つけて。忠信篤敬を以て其身を守り。透間之乗すへきなき様に己をかため。是を以て衆に先たち倡率するときは。自然と其風化を成すへし。果して斯の如くなれば。先づ一身之守を以て城之心となし。又士民之心を以て城之實となし。然して後一城を守護するに足るへし。一城之守護堅固なれば。即一方封疆之守護となりて。主君付托の意に背かず。是を城代之職と心得然るへき歟。

天保九戊戌年三月

坦記

女中掟

應清末侯索 (安氏本此五字ナシ)

公儀の御制度にしたかひて。定置所の家法をわきまへ。奉公にかけひなたなく精を入へき事。一男女のわかちを正しくするは。第一の慎なり。奥掛の役人へ用向を傳る節。役女たりども。疊一疊程をへたて、物いふ心得すへし。惣女中は尙更の事。敷居をへたて、物いふ程の心得なるへし。醫

師たりとも。診察の外は。心易たて無き様に心掛へし。
 一物事ごとやかにして。表方の噂ばなし。又大聲にて咲きはぎ。或はさゝやき。或は人を嫉み。人のかげ事をいひふらす等の事。深くいましむへし。
 一衣類の染色。髪飾り。其外身の廻りの調度。今様の物を用ゆへからす。惣て風儀にかゝる事なれば。部屋方もへ夫々よりよく示し置へき事。
 一言葉遣ひ賤しかるへからす。市中のはやり言葉などいふへからす。
 一火の元は第一に用心すへし。火の番を定置。晝夜怠なく部屋へまで改むへし。長局は別して念を入れ。火の番計に打任せす。面々ともく改むへき事。
 一近火ありとも。みたりに立さはかす役々を守り。立退の用意。持のきものゝ手配すへし。をのれをのれか諸道具を片付むとて。部屋へ火の元ゆるかせにすへからさる事。
 一宿下りは一年に一度たるへし。日数は其節に伺ふへし。且又廣式（安氏本廣敷）へ尋來る輩への對面は。親子兄弟伯叔父姑甥姪に限るへき事。
 一小間物商賣のものなど。出入の外みたりに入へからす。部屋方もの口向に出て諸商人買物等。みたりなる事致させましく。其主人よりも可申付候。尤錠口役人制すへく候へとも。其主人へよりも兼て申付置へき事。

右之條々堅く守るへきもの也。

己丑正月岩村異學之禁

去年中家相見天文者等。御領内へ入込。妄説申唱候處。御家中士分之内にも。相談致し候輩有之由相聞へ候。一體星曆之學は。其職業の外は心掛候に不及儀。況て身元不慥之者。右様之事に寄せ人を迷はし候儀不少事に候。去年以來。文武稽古事厚く御世話も有之候へは。御家中之面々御趣意を守り相勵み。其他に及び候暇有之間敷筈に候。就中老分之輩稽古世話被仰付置候ものゝ内にも。相談いたし候者有之哉に候。左候而は年若之者とも。心得違も出來候間。向後不束の儀無之様。一統心掛可申候。右之趣御家中面々へ不洩様可被申達候。以上

月日

連名

大御目付中

去年中怪敷家相觀天文者等御領分へ入込申候に付向後左之通

賣卜者觀相者祈禱者怪敷天文者之類。此後御領内へ参り候はゞ。猥に爲致止宿間敷候。尤伊勢熱田兩御師。其外古く参り來候神職僧侶等は。格別にて候。若又身元慥なるもの歟。又は内縁等有之止宿爲致度存候ものは。其筋へ相斷可任指圖候。

右之通り御領分中不洩様可被相觸候。以上

月日

連名

御勝手御用人中
郡奉行中

濟敷略記

民は邦の本にして。食は民の天なり。此故に先王の政。食を足して民を養ふを以て本とす。漢土の古にありては。三年耕して一年の食を餘し。十年耕して三年の食をあまし。三十年にして十年の食を儲ふ。早乾水溢の變ありといへども。民菜色の患なきは。この備あるを以てなり。春秋戰國の時。王政衰微すといへども。列國なを倉廩の豫備ありて。飢歉の時。其民を賑恤し。不足を補ひ。不給を助け。また隣國糶糴の事往々見へたり。これみな國君の豫備にして。民間に令したくはへしむる事に

非す。三代封建の世は盛衰ありといへども。みな上のものを以て下を救ふの意は同じきなり。秦以後天下一君。郡縣の世と變せしより。民政の趣も大に變じ。士民雜糅し。才智あるものは下民より起りて將相にも至り。又致仕すればもとの田畝に歸る。是を以て農民の數前古に十倍せり。朝廷の官人多しといへども。世祿のもの逆もなく。五等の諸侯無ければ。其國々の臣僚なく。耕さずして食ふもの數。おのつから多からざるなり。故に郡縣の世にては。民間に穀を儲へしむるも。其勢ひなじ易き事なり。漢以後隋唐宋元に到るまで。常平義倉社會平糶折中廣惠豫備等の倉法陸續と起れり。これ封建郡縣の異同にしたかふて然るなり。今我邦においては郡縣の古制漸く變り。其名を存するのみにして。郡后百辟封建の實をなせり。然らば儲蓄養民の政。よろしくこれを三代封建の遺意に本つくへくして。全く漢土郡縣の制に倣ひ難きなり。然るを儒者。往々義倉社會など。うへもなき良法と心得て。人主に勸むるものあれども。其法もと三代の時。上より下を養ふの法にあらざれば。民情においてすゝまざる所あるべきなり。抑我邦沃土多くして。五穀善く生すれば。今において何の不足の事もなしといへども。漢土の中古以後に比すれば。耕さずして食ふもの。たゞ十倍のみならず。天朝幕朝の百官の外。大小列國おの／＼許多の臣僚あり。又寺社の數幾十萬なるを知らず。これみな耕さずして食ふもの。其食ふ所みな農民の手にて養ふなり。然るをそのうへにも民間にて穀をたくはへしめんとするは。是を三代の意といふへけんや。然れば今の人主。よろしくみづから儉徳をつゝしむ。

華奢の用を省き。是を以て漸く豫備の倉米を置かじめ。臣僚たるものも。亦よろしく人主の意を體し。自ら其衣食を減じ。斗升の微をつみて人主を助け。平日民に養はるゝの恩を凶飢の時に報ゆべきなり。是上のものにて民をすくふの本意なり。王政の盛なるに及はずといへども。なを其遺意を存すといふへし。扱此趣意を篤と會得ありて。其本立たるうへにて其法を設くるに至りては。當今の宜きを斟酌し。かの社倉の意味をも參へ用ゆる事有べきなり。

一王制に三十年の惠を以てとあり。三十年を限りと立るは何ぞや。世の字は三十にして尾を曳と云ふて。三十年を一世とす。人世一變の期なれば也。また三十年を二ツ合せて六十年なれば。是を甲子一周。天道一變の期とす。凡そ三十年前後など小凶歎あり。六十年前後など大凶歎あるは。是天運の消長なり。また丙午丁未の前後など。古來往々變事あるもの。漢土にても丙丁龜鑑といふ書ありて。丙午丁未の災を集め置しなり。我邦にても近くは天明六七の丙午丁未。大飢饉あり。享保十七の飢荒は。丙午に後るゝ事五年なれども。其時より天明まで。凡そ五十五年なり。大略此前後に過す。近年打續き豊穰にして。飢饉の有様を知るものも少く。世間上下治安に狎れ。華美奢麗の俗をなし。外面は繁榮の姿なれども。多くは浮華の習にして。内實は虚乏なるへし。一旦凶荒の年に逢へば。家國の責あるものこれを救ふの術ありや。覺束なく覺ゆるなり。然れば此時に及んで般樂怠放すへからず。第一に浮華の習を戒め。質素の風を興し。其思たちし日よりして。速に飢荒の備を

工夫あるへし。七年の病に三年の艾とは。此類の喩となすべきなり。扱其事理は尤に聞ゆれども。是までも國用十分を過て。或は不足にも有へければ。何の餘財ありて其儲を得んや。今俄に其儲をなさんとすることも。行はれざるの實あるへし。然れば其事を成就するには。多少の周旋を用ひざるを得ず。こゝにおいて人君民のためにするの誠意専一なるを源頭となし。かならず凶飢の苦しみ無からしめんとすの遠慮より。第一に衣食を減じ用度を省き。僅たりとも年々たへす民食をつむへし。これ誠をつむなり。凡そ士たるものは。恒の心ありて義理も分明なるへければ。人君の其通りにあるを。徒に視るへき理なければ。其風に興起して。分限に應じ其贏餘を存し。これを以て其君の及はざるを助け。平日民功より養ひをうくるの恩を報んどの志あるべきなり。其通り君臣換合て積み儲ふれば。數年の間には餘程の數に到るへけれども。とても過分の事なし。其内には飢歎いたるまじきにもあらず。しかれども年貢定數の外。民間一統にたくはへしむるは。厚斂に類して。上たるものゝ本意にあらざれば。上にてつみたる米を。民間より借りたき願ひあるもののみへ貸し渡して融通すへし。常年の時には。いさゝかの添へ米をして返納せしむ。元より合點の事なれば。兩便ともいふへし。そのそへ米をつみおけば。又凶飢の備となるべきなり。既に君臣において。艱苦して積みおく事なれば。諸民も其誠意に感せざる事を得ず。わつかの添へ米あるとも。利息を取らると思ふまじき歟。この所社倉の法に類すれども。畢竟止事を得ざるより起れば。謂ゆる佚道を

以て民を使へは勞すといへども怨みすの意にちかゝらむ歟。

一 濟厥糶置の法。五年を以て基本をなし。十年を以て小成し。二十年を以て大成す。三十年に至れば一變する事もあるへし。是其大數なり。その割り方。壹萬石を二百分の一にわりて五十石となる。其君の高により。大小にしたかひ。萬石につき年に五十石を除け置へし。これ儲備の本なり。また家中の知行よりも。其わり合をもつて銘々二百分の一を出し。君を助くへし。萬石につき。君臣合じて大凡百石程と定め。これを一年の儲備となす。五年をつみて五百石あり。十萬石の高にてつめは五千石。三十萬石なれば一萬五千石。五十萬石なれば二萬五千石なり。此米をかりたくと願ふ村々へは。初年よりかじあたふへし。尤夏の頃夫食乏しき時にかし。秋成に至りて返納せしむ。其添へ米のわり。一石につき五合つゝおさめしむ。粃にても麥にても。麥ならば其數を倍す。かくの如くする事五年にして。基本をなすへし。基本既にたちたる後は。非常の備を重となし。儲米の三分一乃至半數までは貸すへし。残らずかすへからず。尤これは常年のさためにして。凶飢の時は元より其數に拘はらず。小歉なれば添へ米を取らず。大歉なれば全くあたふへし。これらの時の備なればなり。扱五年の間飢歉の年なくして六年に至れば。家中惣高よりの加入を免すへし。これより後は。人君の儲米と民のそへ米とにて積むへけれども。民の方をかならすとなすへからず。かくの如くして又五年を経て。都合十年に至れば。餘程の儲米となり。大抵の凶飢はすくふへし。これを小

成となすなり。又十年を経れば。過分の儲米嵩みて。いかなる凶飢にても。決して一人の餓莩するものあるまじきなれば。二十年を以て大成といふべきなり。二十年の後。三十年の内外にて。萬一凶荒に逢たる時は。年來の倉廩を傾けて心よく賑恤し。餘す所あるへからず。これ人君本意のあるところなればなり。其後に及びては。再び初發の法をあげ行ふへし。幸ひに凶飢もなき時は。もとの姿にて増益するのみ。もし又年數を待すして凶飢あらば。其儲へたる丈を以て救ひあたへ。其翌年より初發の法に返すべきなり。

一 此法をあげ行はんとするには。先つ親民の官吏を鈔選すへし。能く人君の仁意を會得して取扱ふ事肝要なり。前にいふ所。夏分に民へ貸し。秋成に至りて納むるの法。朱子の社倉もかくの如くにして。王安石の青苗法と異ならず。苟も慘怛忠利の心を以てこれを行はざ。仁惠の政と成るへけれども。聚斂亟疾の意を以てすれば。民を養ふゆゑんの法にて民を害するに至る。則青苗の法よくこれを一邑に行へとも。これを天下に行ふあたはさるとひとしきなり。凡そ民は一時の便を謀りて後の慮り無きものなれば。夏かしの便を喜びて。秋の返済に苦を訴へ間敷にもあらず。有司たるもの。撫字心勞催科政拙の心を存し。深く其情實を考へ。強て取立へからず。これ法外の深意なり。又五年の後。基本立たるうへ。なをもそへ米の法を存するは。其間に姦民の私あらん事をはかりてなり。官殺を貴くひさきて。私利を謀る弊を生ずれば。風俗を傷るのもごゐなり。因て此法を存すれども。

其實は窮民へかじあたふるには。添米なくてよき事なり。今姑くこれを存するは。法中の深意なり。故に借米を願ふものあらは。よくく其情實を吟味して貸すへきなり。また或は借米を願ふもの無き時は。有司たるもの。時にとりての取扱ひ方もあるへき事也。兎角其人を得るを緊要となすのみ。一濟厥の場所。代官役所構の内へ建へきなり。其出納を嚴にし。非常を戒むへし。もし村々へ建置時は。常年は害あるまじきなれども。凶飢の年に到りて。他領の民など。劫掠のものあるまじきにもあらされは。役所近邊へ嚴重に建置くへき事なり。

一濟厥粟米の外何にても。夫食にあつへきもの。多少にかきらす民に合して儲へしむへき也。雜穀は勿論。其外木の實草の實。濱手にては海草干物鹽物の類なり。濟厥の近邊。別に物置を建て。其品々を納めおかしむるも可なり。

右に記する所。濟厥建置の大略なり。國に従ひ俗に因り。一樣成るへからず。たゞ此大意に本つきて増損斟酌する事は。其君と有司とに在るのみ。

天保二年辛卯十一月

佐藤坦録

菩提所取扱方

爲岩村侯 (安氏本此四字ナシ)

一始祖考妣百世不遷之取扱にて。菩提所供養。正當月平月共執行爲致候。二代目より以下。當主より五世の祖に成候へは。正當月計り供養爲致候。供米俵數年々何程と定め。後世何代を経候ても。始祖の外高曾祖禰之四世を同様に致し。五世已上繰上げ候而。供米増減不致候。盆祭も五世以上手輕に致し候事。

一歴代中任官嫡子は。其祖父に當り候もの。當主より五世祖に成り候節。一同に取扱替へ申候。尤夫婦同様之事。

一伯叔父母兄弟姉妹嫡孫等。正當月計り菩提所供養爲致候。此外諸靈も菩提所施主に成居候分は。盆祭之節。諸靈一統にして。銀子備へ申候事。

年回法會定數

一當統考妣 永世

一任官嫡子 實父母 百年限

但し此通りに候へ共。實父母は當主代中此定にて。代替之後は。任官前之嫡子に準じ可申事。

一任官前嫡子 五十年限

一次男已下 三十三年限

一七歳未滿嫡子 十七年限

一七歳未満次男已下 七年限

一法會定數濟候後。年回到當り候節は。代拜備物計り之事。尤香奠銀。其親疎遠近に従ひ多寡あるへし。

一女子嫁付のもの。男子養子のもの。先方爲知有之候へは。附法事の有無も。次男以下。法事の定數に準し可申候。其後に及候へは。代拜備物計り同前たるへし。

一次男已下のものにても。一生厄介にて。當主の補佐等致し。其家に功勞も有之候へは。其人次第にて。任官嫡子に準し候事も可有之。尤其時の評議。當主の存意にて可定事。

精進割

一始祖 歴代當統

右正當月前夜より朝夕。平月朝計り。

前夜は六時より。朝夕は朝六時より暮六時迄。朝計は朝六時より四時迄。後是にならへ。

始祖永世同様たるへし。二代目已下當主より五世之祖已上は。精進に及はず。

始祖室 歴代室 任官嫡子 實父母

右正當朝夕。平月朝計。

歴代室。二代目より五世祖に成候得は。精進に及はず。任官嫡子。其祖父五世に成り候節は。一

同に精進に及はず。

一伯叔父母 兄 姉 嫡子 外祖父

先代實父 任官嫡子室

右正當朝夕。平月朝計。

外祖父側室之父に候へは。精進に及はず。

一弟 妹 次男以下 嫡孫 外祖母 母方伯叔父母 先代實母 先代實方兄弟姉妹

右正當朝計。平月無之。

母方祖母。母方伯叔父母。血筋無之候得は。精進に及はず。血筋有之候とも。側室方に候へは。精進に及はず。

先代實方兄弟血筋無之候へば。精進に及はず。

一七歳未満

嫡子七歳未満たりとも。年回法事十七回忌迄可有之。右年數之内。正當月精進朝計。十七回後精進に及はず。次男以下七歳未満。年回法事七回忌迄可有之。右年數之内。正當月精進朝計。七回後精進に及はず。伯叔父母兄弟姉妹たりとも。七歳未満。法事年數を越へ候へは。精進に及はず。

答長村内藏助

平戸侯老臣

一某守幾位源朝臣某と認められ候先例は。全く職原の古式にして。とやかく可申様は無之候。然れども昔皇家の官位と今の武家官位とは。名實大に違ひ候事に付。古式を守候時は。空名に成候。實とは背申候。其上文體も古今之差別有之。官署の稱謂等も。おのつから其時に叶候様に。程々を増損斟酌の方得實候に付。一偏に難致候事多候間。古式にもたれ申さぬ方を。愚拙は好み申候。乍去古式の書法を不用と申わけは無之事にて。其所は人々の存寄に有之候間。強候筋は無之候事。

一都而官銜書法。愚意にて定置候處をもつて申さは。幾位某守松浦某と御座候方と奉存候。是は態と古式を變し。別に書法を立候心得に御座候。武家は武家の姿有之もの故。敢て古にもたれず其宜をはかり。時に叶ひ候様に認申度存意故に候。姓かばねを記し候は。上古の事。中古より族を稱し候事起り通用と成り候へば。夫を用ひ候方。實を得候と存候。唐山にても。古の姓は姓にして。後は官を以て姓とし。族を以て姓といたし候類。いかほとも有之。是則家族を稱し候と替りは無き事に候。仍而碑誌の類。後代に傳り候節。官銜の書法。古式と殊なるを以て。古今公武の辨別も成候へかごと。兼て存ふくみ候事に御座候。しかれども是は一家の私議にして。人に強ゆへきの事には無之候へとも。愚意を御尋の時は。右の通りに候事。

一右二條は。御付囑計の愚案を申上候。扱別段引離れ考へ候得は。御先祖への告文は姓は記されざる方も可然哉と存候。漢蔡邕か宗廟祝辭に。嗣曾孫皇帝某敢昭告于皇祖高皇帝。宋歐陽修か皇考大師祭文に。嗣子具位修謹以清酌庶羞之奠告于皇考大師之靈。朱子祭告遠祖文。告宗廟文。焚黃文等皆名のみを記申候。其外告先聖先師文などは。姓名を具し度所さへも。名計りを記し候。是は親敷認め候意圖かとも被存候。然れども家禮祝告文の内。一二ヶ所計は姓名を具し。其餘は名計に御座候。如何にも疑敷御座候へ共。家禮は後人の手を入れ候本ばかり今は傳はり。原本は未見。其上諸家の集等名計りの方殊に多く御座候間。多に従ひ候方と存候。且先祖の書校訂類すら。男某校。幾世孫某校正等は。夥敷御座候。但清刻程氏遺書の二十二代孫の校本計は。程某と記し申候。これによれば。敢て姓を不記に一定候事にも無之。莊重に稱し候時は。姓をも加へ。親子一體に存候時は。姓を去り。親の申候體にも仕候事かと被存候。是等の取舍は。作者の存念に可有之事に候得共。愚意には姓を去り候方切當と存候事。

答長村内藏助

平戸老臣

昨日は貴簡拜誦。其節他適。御即答不仕。失敬打過申候。先以薄暑御座候。愈御佳勝被成御起居。

奉并賀候。然ハ周尺の御尋。承知仕候。是ハ倭漢紛々の論有之。一定難相成御座候。律呂新書など。周尺を六寸四分弱といたし。家禮儀節なども。其寸法にて神主を製し申候。仍て道春春齋など。本邦曲尺の六寸四分弱を周尺といたし候事に御座候。然る處。是ハ一體粗なる事にて。宋明の尺と本邦の尺は違申候。本邦曲尺は。唐の大尺と申すものに御座候。清朝の營造尺は。唐の大尺にて四釐程のび申候。徂徠度量考など。明の朱載堉の樂律全書に本づき申候へは。其說にては。曲尺の七寸二分。即周尺の寸法也と申候。然る處。周禮考工記。車の制作などにて臆度いたし候へは。大抵曲尺の七寸五分程に相成可申被存候。此說至て長く御座候。先々普通の說は六寸四分と心得。至當の說は七寸五分と存候へは。大違は無之候。畢竟分釐の所迄は。考へ難き事に御座候。大略如是御座候。扱又本邦尺の一間如何の御尋承知仕候。並の所大抵田舎間にて。一間は五尺八寸に御座候。京間は六尺五寸に御座候。天正頃則六尺五寸を用申候事と被存候。然る所當時は田舎間も五尺八寸に滿不申候。京間も六尺三寸程に相成申候。甚杜撰なる事に流れ申候。此段大略拜答仕候。此類の吟味。甚疎漏なる儀に御座候。先々隨意略記仕候。右々々布字如是御座候。以上

四月十二日

答磯野定兵衛

平戸世臣 (安氏本此四字ナシ)

此度御法會の儀に付。靜山様思召被爲在。愚案可申上の様蒙仰。奉畏候。昨日不取敢御答申上候趣。禮書に據候得は。婚嫁女子里方にて祭祀仕候儀無之。仍而已後の處。思召の通に御定可宜と奉存。其趣に申上候得共。尙又篤と勘考仕候得は。先つ此度は是迄の御舊式に被從。御法會有之方可宜と奉存候。當時。國朝の習も有之。諸家共に釋家の宗旨御用被成。既に其法號被受候上からは。諸事儒式とは違ひ有之。其中一色禮書の證據取出し。愚意可申候。併末々御法會數多に被至候處。御遠察の御取計の所は。御尤に奉存候得共。是ハ永々之御家法に相立候事故。是非御改正に候得は。新古御方御一統に無之而は不宜被奉存候。左候得は。何そ此度に限り申間敷候。篤と東西御役人中えも御論及の上にて。他日御一定被成候方可宜と奉存候。且又祭祀の主意は。如在の至誠より起り。感應の所を主と致し。釋家の追福とても此外は有之間敷候。左候得は。御親戚様御愛情の深き方え神靈も自然と被憑候御事と奉存候。其所は今一應篤と御勘考有之度奉存候。兎角御改正は。御急き不被成候方可宜と奉存候。一度被定候後は。又々改兼候もの故。先々此度は御舊式に被成置。末々御改正の節は。新古御方々御一統に被成候て可宜哉に奉存候。右愚案荒増申上候。尙又御取捨の上。御采納被成下度奉存候。以上

九月二十二日

答成島邦之助君

御手帖奉誦候。先頃潜藏えも御致聲の御墓碣題面の儀。委細思召の處。奉承知候。如來喻。齊家寶要には先生の稱不得相見候得共。愚存には矢張某先生と被成候方宜様にも被存候。其説は。齊家寶要等の書法は天下通用の事にて。儒家の式と申すにも無之候。尤先生と稱すること。儒家に限り候事には無之候得共。後世にては。西土にても先づ儒家の通稱の様にも相成居候事。本邦にても同様の義に御座候。程明道墓面も。有宋明道先生程君伯淳之墓と有之候。書き手は范文正公に候得共。其祭祀を主するもの。矢張其子孫叔侄の間に不過候は。墓碑の立て手は。其家に屬する事に御座候。生前に某先生と一統に通稱せられしを。直に其諡號に配することなれば。子孫より稱すと雖不苦様に被存候。尤も生前に某先生とも云はれぬ俗家に候は。先生は稱すべき縁無之様に被存候。林氏にても。代々〇〇先生故朝散大夫林府君墓と題することに御座候。貴家にても。御歴世儒員の事故。某先生と題せられ可然哉とも被存候。但府君の稱は。却而如何に被存候。其譯は西土にての通稱の様なれども。其實は府ありて其君になる稱に御座候處。本邦には府君と云へき實無之候。矢張某君と計りにても宜可有之否。左候は、

龍洲先生成島君墓

孝子勝雄立

右の通に被成候て。御後代の通式に被成候ても宜可有之哉。寶要には。碑左に年月日を書すること見へ候得共。碑陰小文にても御勒し被成候は。其内に記し有之候事故。碑面に卒日を題するに及申間敷候。孝子勝雄立と御認被遣候處。成島二字は刪去被成可然候。碑製圭首に被成候事。隨分宜可有之候。大小の制は。西土の官階に拘り申間敷事に御座候。本邦に當今の官式無之上は。如何様にも借に當り申間敷候。愚存不避忌諱申上候。尙又得と御考の上にて御定可被成候。此段草々奉復仕候。以上

六月三日

答松島深藏

姫路儒臣

一簡拜啓仕候。薄暑時節。愈御多社奉賀候。然は過日は得拜範欣然存候。其節御神主御改題の儀に付御尋之趣。其後禮書等致吟味候處。元より制度不同に候へは。的例と申候は不相見候。愚案には。何れ御改題は。御養方の御稱謂に無之ては不相成候に付。矢張率性院様を御祖考と被稱候は。御順に候へは。實御高祖様御祧主に可被爲成筈に候得共。御實方にては御高祖に御相違無之事故。義起の一例を創せられ。御四世の外に。五世祖考妣と被稱候て。是迄の通被成御祀候方。人情事理

に於て可然事と存候。漢土廟制。天子七諸侯五太夫三の異同さへも有之。又明義門鄭氏の祠堂に。第四世の祖非常なるを以て。義起にて祀候事。讀禮通考にも見へ申候。尤此度の例には不相當候得共。四世の外祀る例には可相成哉とも存候。尙貴君御勘考の上。御同意に候は。此段被仰立可然哉に存候。右大略申述度如是御座候。尙拜顔萬可申盡候。以上

戊戌

閏月廿八日

松島深藏様

佐藤捨藏

答鎌原伯耆

松代侯家老

貴簡拜見仕候。扱も時氣不同に御座候。此節の御多忙奉察入候。然は御尋の御別紙拜見。右は迎も華人の通には不參候事。其宜に従申候外無之候。御朱書の通にて宜様奉存候。扱邦人の兎角邦制を審に不致候もの。前某官と記したがかり候へ共。大間違に御座候。堂上にて假令へば前大納言と稱するも。矢張大納言にて候。前字は大納言に人數定り右定數外に増し候時に。前字を加ふるのみ。前官後官の前に無之候。且又武家の任官は名號のみに候へは。俗名假號の類。眞に某官に無之候へは。別て

前字當り不申候。たゞ通稱と心得て能き事にて候。左候へは前字亦意義無之と存候。致仕字は御加への方宜候。漢土の制は。一代限りのもの申迄も無之候。本邦にては致仕後に矢張其爵位を持候事定制に候へは。致仕と稱し少しも不苦候。其國々の制と申ものにて候。官稱は官稱と心得。次爵位あるもの、假號に候へは。矢張御加へ有之方と存候。

子七月二十五日

答櫻井良藏

出石侯儒臣 (安氏本此四字ナシ)

聖祠逐一致南面之儀は。古今の定法勿論にて候。西面の明文誰有而穿鑿致置可申哉。併愚意を御尋この事候は。明文無之候得とも。北面の外は東西面共に少しも不苦事と被存候。從來。聖祠營立の趣意。崇道の所に在て。徒に虚文に效候譯無之事故。製造一々必しも西土の式に拘申間敷事に候。尤彼邦後世に到ては。府州縣夥敷。聖祠に候間。其内には便に隨て東面西面も可有之候得共。その有無にて斷然明文と心得候筋とも不被致候。是等は其宜に従ひ斟酌可致事に候。一屋瓦の儀。亦隨分不苦事に御座候。

一、...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...
 六、...
 七、...
 八、...
 九、...
 十、...

俗簡焚餘後

...

...

...

題俗簡焚餘後

俗簡焚餘二卷。家翁所筆錄也。家翁初爲處士時。諸藩君太夫。來謀國事。及遠近士庶。寄書質問疑義者不尠。如巖邑藩。則小大治務悉與聞焉。於是往復劄子。日增月益。不知其幾百通矣。頃者翁檢舊篋。自焚稿本。梶在側甚惜之。乞其無碍者數十通改寫之。名曰俗簡焚餘以自藏云。

嘉永庚戌嘉平月上浣

佐藤梶拜識

ク。世ニ無私欲者モ。希ニ是アリ。所行皆至善ニテ。及人ノ大徳ナケレハ。仁者ニハアラス。往年或人匹夫ノ孝子ヲ稱シテ君子ト云。余云。是唯孝子ト稱スヘシ。人ノ上トナル徳ナケレハ。君子トハ稱スヘカラス。君子ハ唯善人ト云フト異ナリト。是等ノ辨別明白ナラサレハ。品評ヲナスヘカラス。民可使由之章。鄭申甫曰。使由不使知。王民之所以暉々也。利之而不庸。殺之而不怨。民日遷善而不知爲之者。無所歸恩。無所歸怨也。不知也。民之質矣。日用飲食。不識不知順帝之則。耕田而食。鑿井而飲。帝力何有於我哉。不知也。若使民知焉。則驩虞之政矣。非顯比三驅失禽之公矣。此說如何。

鄭申甫カ説ハ。孟子ニ泥メリ。詩云。樂只君子民之父母ト。王者ノ民。其君ヲ父母ノ如ク思ヒ。欣々然タルヲ知ルヘシ。近クハ貴國先君ノ徳ヲ記セシ仰景録。肥後細川侯ノ銀臺遺事ナトヲ見ルニ。百姓ノ感戴スルヲ。父母ノ如シ。擊壤ノ歌ニ。帝力何有於我哉ナト云フハ。老莊ノ徒ノ作ル所ナリ。堯舜ノ民。豈實ニ如此ナランヤ。孟子ノ言モ。王者ノ治ハ徳ヲ以テシ。覇者ノ知術ヲ以テ。民ヲ悦ハシムルニアラサルヲ云フナリ。王者ノ民。上ノ徳澤ヲ知ラス。徳澤ヲ知ルハ覇者ノ治ト思ハ。事情ニ味キナリ。朱子ノ意ハ。程子ト同シ。愚説ハ經史質疑又續ニ見ユ。不可使知之ハ。自然ノ勢ナリ。民ヲ愚ニシテ不使知ト云フハ。商鞅韓非ナトカ術數ニテ。聖人ノ旨ニアラス。程子ノ家喻戶曉ント欲セサルニアラスト云フモ。仁心ナレト。瑣細ナルニ似タリ。畢竟民ニ道理ヲ知ラスルヲハ能ハストノ

意ニテ。上ノ恩徳ヲ知ラサル様ニ治ムルノ意ハナシ。

耳順章。錦城曰。不動於褒貶毀譽之言。又曰。人情好名。聞譽則揚々自得。聞毀則如有所失。附諸馬耳之風。而淡然不動。自非聖人。則不能然也。此說如何。

耳順者逆耳之反。言之善者。不逆耳。衆人亦然。夫子則言之不善者。不逆於耳也。所以然者。通事理人情之至。不悖於心也。錦城云。褒貶毀譽。無動其心。附馬耳之風。夫褒與譽。固非所以逆耳也。善惡一切附馬耳之風者。老莊之徒所以爲達。而非聖人耳順之意也。所說雖辨失竅。

年四十而見惡焉。惡マル、ハ。有識ノ人ニ惡マル、カ。世俗ニ惡マル、ハ。有志モノ、不患トコロ。見惡焉。此焉ノ字。何ヲ指ヤ。

大學ニ云。十目所見ト。人ノ好惡。大抵好善惡惡モノ也。有志ノ者。世俗ニ惡マル、モ。是私アル者惡ム也。衆人ノ公評ハ。必スシモ然ラス。無道ノ世ニ賢者遭害。コレ惡人執權レハナリ。衆人ハ是ヲ悲惜ス。多寡ヲ以テ見レハ。好賢者多クシテ。惡賢者トイヘ。豈其賢ヲ知ラサランヤ。己カ爲ニ不利ナルヲ以テ。是ヲ害スルナリ。歷代ノ史ヲ見ルニ。其事明顯ナリ。此焉ノ字ハ。於此ノ義。其時所ヲサスカ。蘇氏云。此亦有爲而言ト。或ハ指ス所アラシ。

其心三月不違仁。此章。集注程子曰。不違仁。只是無纖毫私欲。少有私欲。便是不仁ト。公寬常ニ此言ニ惑アリ。無纖毫私欲ランヲ欲シテ。行住坐臥コ、ニ心ヲ用フル時ハ。一愚人ノ行

ヲ爲スニ似タリ。山崎流ノ學者ノ蔽固シタルハ。容易ニ立ツコトモ動クコトモナラヌヤウニナル也。サレモ護園ノ徒ニ治身而不治心ト云フテ。輕薄放蕩ニ流ル、ニハ勝ルカ。造次必於是。顛沛必於是ト云フハ。程子ノ無纖毫私欲ト云フト。其至リ極ル處ヲ論究セハ。大ニ異ナルヤウニ思ハル。公寬性質不美。君子トナルコト不能ユヘ。此惑アリヤ。乞教。

朱子ノ說ニ。天理人欲同行異情ト云フコトアリ。聖賢君子モ。國家ヲ保有センコトヲ計リ。萬事ニ心ヲ用ユ。豈愚ナランヤ。其用心ハ一ツニテ。小人ノ私欲ニ出ルト。情同シカラス。今人ニテモ。善ナル人ハ。智アレモ。其智ヲ用フルコト私少シ。不善ノ人ハ。善ヲ行フモ皆私ニ出ツ。佛書ニ云。正人說邪法。邪亦正。邪人說正法。正亦邪ト。山崎流ノ如キハ。執固愚ニ近シ。世人多ク私知ヲ以テ知トナシ。是ヲ捨レハ愚トナリ。家國モ保タレサルヤウニ思ヒテ。生涯此私知ヲ寶トシテ。君子ノ徒トナルヲ得ス。孔子造次顛沛必於此ハ。以行事言。其心三月不違仁ハ。以心術言。其言淺深アレト。其理ハ一ナリ。凡人ノ知ヲ用フル。公ニ出ルト。私ニ出ルト。是君子小人ノ別ル、處ナリ。

子罕章ノ御教示ノ末ニ。方今諸侯之憂。唯在財不足。是生於不知實利。而徒悅虛利。今ノ經世者。不可不講實利也ト仰ラレ候。實利何等ヲ指候ヤ。承リ置タク候。方今何レノ國モ。收斂ノ政。年々多クナリ候ヘ共。其根元ハ國用不足ヨリ出テ。古ノ如ク府庫ニ積蓄スルニアラス。勝手窮迫ノ諸侯ハ。一月ノ給料モナク。節儉モ其國ノミ。江戸ニアリテハ。時風ニ從フヨリ外ナク。

收斂ノ政增益シテ。世人末ニ走リ。農ヨリハ商。商ヨリハ茶屋。料理屋トナリ。奸吏奸商其虛ニ乘シ。家ヲ興シ身ヲ起スヲ。羨望ノ心ヨリ。風俗日ニ頽廢スルコト。列國同一流弊ナリ。サレモ國用目前ニ不足シ。侯家數十倍ノ借金アリテ。タマノ賢君出タリモ。容易ニ常ニ復セス。幾代モ賢君出ルコト難シ。コトヲ以テ列國タマノ美政ノ沙汰アリテモ。君侯卒スルカ。良相死スレハ。暫時ニ弊政ニ復ス。其國數倍ノ借金ニ處置ノ良法ナケレハナリ。中井竹山。諸侯大借ノ處置ヲ云ヘモ。藩國ノ用ヲナシカタシ。御示教ニ實利トアルハ。何等ヲ言玉フヤ。承置度。草茅ノ者。如此ノ問ハ。無用ト思召サルヘク候ヘモ。年々風俗ノ惡クナルハ。弊政基本ナリ。弊政ハ國用不足ヨリ出ルモノ第一ト存セラレ候。

老拙京師民間ニ生長シ。諸國ノ大名ノ借財ノ様子ハ。委ク知リ申サス候。然レモ是迄ニ二三ノ小大名ノ國用乏シク。如何モ爲ヘカラサルニ至リ候ニ。其君奮勵シテ。痛ク節儉ヲナシ。數年ニシテ國用足り。或ハ良相アリテ國政ヲ立テラレ。十數年ノ間ニ。上下得所。近隣皆稱其德アリ。其所爲ノ詳ナルハ聞カス候ヘモ。其要ハ君相ノ身ヨリ。痛ク節儉ヲカム。萬事費ヲ省キ。下皆コレニ感服シテ。上一下ニ節儉ヲ中心ヨリカム。此實意ヲ以テ。借金ノ濟シ方モ。夫々ニナル者ナリ。其借金モ。列國皆々甚シキニ至ルニモアラシ。窮則變。夫々ニ從ヒテ所置アルヘシ。先儒云。天下無不可爲之時ト。亂世スラ然リ。況ヤ今治世ニテ。財乏債多キ患ヲヤ。今日ノ政。金銀ノ吹替ナトノ小利ヲ興シ。外面

ニ儉約ノ形アリテ。内實ハ不費ノ費アリ。下民ニ至ル迄。皆此風アリ。都下ノ門戸ニ。儉約ノ二字ヲ張札シ。近在ヲ見レバ。村々ノ入口ニ。儉約ノ旨ヲ揭示スレト。其實ハ衣食日用ノコトハ。費ヲ省セス。皆名ノミニテ實ナシ。近ク我親類相識ノ者モ。皆此弊ヲ免レス。士庶人ニテイハ。交際ハ吝嗇ニテ。奉養ハ節儉ナラス。天下國家モ同一理ニテ。人心服セス。故ニ儉約ノ名アリテ。儉約ノ實ナシ。老拙不才ニテ。且諸侯ノ身体向キハ一切知ラサレト。凡如是ノコトハ。庶人ノ身体ヲ持直スモ。小大一理。賢君數世出玉ハスル。其處置ノ宜ヲ得ハ。此患ナカルヘシ。タトヒ嗣君先君ニ劣ルル。良法立テ。臣民是ニ服セハ。嗣君モ是ヲ承守ラルヘシ。君相ハ貴人ニテ。利ニ疎ク。小人ノ黠ナル者。聚斂ヲ爲シテ。目前ヲ救フヨリ。益借財モ多クナルナリ。士庶人ハ事小ニシテ。利害目前ニ見エ易シ。然ルニ世人不計入而爲出。計出而爲入。コレ借財ノ本原ナリ。貴人ハ不知家計。其職ニ當ル人。計利家而不計爲國。宜ナル哉如此ニ至ル。老拙ヲシテ君相ノ任ニアラシメハ。其處置自ラアルヘシ。以_レ身率人ノミ。下位ニ在テハ。空言ハ益ナシ。書ハ言ヲ盡サス。悉クハ面話スヘシ。當今一小藩。君驕奢ニシテ國用窮乏。藩士各別ニ生計ヲ營ムニ至ル。有二吏姦獍者。勝手方ヲ引受。所謂虎ノ子渡ニテ。目前ヲ救ヒ。借財年々ニ増ス。而テ己ハ於其間得私利。他人是ヲ知ルトイヘル。當時此人無クテハ。一日モ事ヲ辨スルコトヲ得ス。故ニ上下一同。此人ヲ如何トモスルコト能ハス。有一忠士。如此ニテ又經數年ハ。益借財多ク。後イカンモ爲ヘカラス。奮然トシテ立議。其處置ヲナ

サントス。然レモ彼姦吏ヲ退ケ。此士ニ委任セラル、ニアラサレハ。此議行ヒ難シ。上下彼姦吏ニ籠罩セラル、故ニ。此議行ハレスシテ。姦吏ノ爲ニ惡マル。是四五年前ノコトナリ。去秋聞。彼忠士ヲ執政トセラレ候由。然ラハ其政法見ツヘク。其實効アルヘシ。此藩ハ海内第一ノ窮困ト承リ居候。此人壯年以_レ一身擔當。胸中必有成算。今在江戶。後年有_レ面會時。應聞_レ其處置也。

通鑑綱目續編 尹氏曰。凡良法美意。行於盛帝明王之世者。後世皆廢之。至於刻剝培斂之政。出於暴君汗吏之手者。後世則踵而行之。又從而增益推廣之云々。漢土モ我邦モ。古今來盛帝明王ノ良法美意ハ不行シテ。暴君汗吏ノ手ニ出候コト行ハル、ハ。何等ノ道理ニ候ヤ。當今藩國十カ九ハ。刻剝培斂ノ政ヲ年々增益推廣スルコト。目前ニ御座候。然ラハ明王ノ良法美意ト云フモノハ。天人トモニ好マス。暴君汗吏ノ手ニ出ル刻剝培斂ノ政ハ。年々增益シテ行ハル、。天人トモニ好ミ候ヤ。盛帝明王ノ良法美意ノ行ハル、。古今來瞬息ノ間ニテ。忽チ暴君汗吏ノ手ニ出ルコトノミ行ハレ易ク。何トモ意得カタク候。

是ハ一人ノ身。一家ノコトニテモ。同一理ナリ。公義ト私欲トノ二ツアリテ。公義ノ善ナルハ。一統ニ人ノ服スル所ナレトモ。私欲ノ惡ヲ行ヒテ。人服セス。事敗レ。身家ヲ失フニ到ル。良法美意ハ萬民ノ所好ニテ。刻剝培斂ハ。萬民ノ所惡ナリ。夫故ニ漢土歷代創業ノ君ノ時ハ。改正シク。季世ノ君ノ世ニハ。政惡シ。改正シキカ故ニ興リ。政惡シキカ故ニ亡フ。天視自我民視。民ノ所惡ハ。天

ノ惡ム所。故ニ滅亡ス。是古今必然ノ理ナリ。當代ニテモ。昇平年久ク。弊政追々ニ出テ。士風衰へ。民俗薄シ。是公義ヲ知ルトイヘ。私欲是ニ勝チテ。如此ニナリ行クナリ。余カ生レシヨリ今日ニ至リ。六七十年。後輩不及先輩。風俗亦衰。如此ニテ數百年ヲ經ハ。其所止イカンソヤ。是有識人所深憂ナリ。是豈天人ノ好ム所ナランヤ。今近ク一町ノコニテ見ルニ。當時ノ年寄。及口キ、候者。三四人ノ私意ニ事決シ。面向ハ一統同意ノ如クニテ。其實ハ皆心服セサルナリ。國家ノ政モ亦然リ。上古モ今モ。風俗ノ厚薄ハ殊ナレト。治亂アルハ。皆是ヲ以テナリ。易ニ内君子外小人ハ泰ナリ。内小人外君子ハ否ナリ。是君子小人相消長。公義私欲相勝負スル所ナリ。聖人ノ良法。今皆亡フルニアラス。和漢共ニ治亂アレ。相續キ君民生々スル者ハ。聖人ノ良法ニ藉レハナリ。季世ノ秕政ハ。良法中ニ惡事出ルナリ。一人一家モ亦然リ。故ニ先儒云。無好人ノ三字ハ。君子ノ言ニアラス。今ノ世ノ在位ノ君子モ。賢者アリテ。是ヲ警悟セシメハ。刻剝掊斂ノ政。改ムルコト能ハサランヤ。今時列國ノ政ニテ。其微顯然タリ。人盡ク惡キニアラス。近クハ我身ニテ觀ルニ。聖賢君子ノ所行ヲ惡キトハ思ハサレ。兎角小人ノ行ヲ免ル、コト能ハス。是教之所以設也。

通鑑綱目。後世マテ日食ヲ懼レ慎ム。連綿タリ。何ノ義ニ候ヤ。日食ノ外。彗孛モ災變ヲ示ス兆ハナシヤ。

古人天學ヲ知ラス。故ニ日月ノ食ヲ測ルコトナク。災異トセリ。故ニ人君ノ慎トナル。漢以來。日食ハ

月下ニ在テヨリ掩フ。常數アリテ。災異ニアラサルヲ知ル。尙是ヲ以テ人君ヲ戒ムルハ。愚ニ似タリ。唐孔穎達カ詩經十月之交ノ疏ニ言フ所。甚善シ。然ルニ歐陽永叔。唐志ニ迂濶ノ說ヲナシ。朱子ノ詩傳ニ是ヲ述フ。顧炎武カ日知錄ニモ尙云。崇禎十七年ノ間ニ日八食スルヲ。亡國ノ徵ナリト。儒者ノ迂腐。達者モ如此シ。解スヘカラス。彗孛ノ類モ。皆災異ニアラス。凡天文志ニ所言占候ノ天學。今皆識者ノ笑トナル。

吾輩後世新奇ノ諸說ヲ耳食目擊シテ。今更ニ程朱ノ說ヲ其徒ノ如ク墨守スルコト能ハス。是以學問統ヲ得ルコトナシ。本邦山崎流ノ學者。所言統ヲ得ルニ似タリ。而其統ヲ得ルニ似タル執固愚ニ近シ。聖學ノ統ヲ得ンコトイカン。

今ノ學者。程朱ノ說。佛老ノ理ニ似タルヲ厭ヒ。徂徠又ハ清儒ノ漢學ニ從フアリ。程朱ノ說ヲ支離ナリト云。直徑ヲ好ミ。陸王ニ從フ者アリ。愚意ニハ。先王孔子ノ道ハ。人倫ヲ重シ。正心修身齊家治國平天下ノ實用ヲ行フノミ。論孟詩書ニ見ユル所。皆艱澁ノ說ナシ。是ヲ主トシ。後儒ノ說モ。日用實事ニ益アルヲ取り。或ハ深微ニ汨ミ。或ハ虛高ニ騁セ。或ハ考据ヲ事トシ。要スルニ儒者ノ癖習ニ歸シ。實用ナキ者ヲ捨ツヘシ。若シ平實ノ所ヲ見得ハ。自ラ諸儒ノ偏癖ニ迷惑スルコトナシ。凡一風ヲ立テ。世人ト異ナルハ。皆天下通行ノ大道ニアラス。程朱陸王。皆豪傑ノ人ナレト。此弊アリ。清儒ノ古學ヲ好ム者。其流ニアラサル者ヲ俗儒ト云。コレ偏狹ノ心ニテ。君子ノ道ニハ入りカタシ。

王安石曰。或問復讎。對曰。非治世之道也。明天子在上。自方伯諸侯。以至於有司。各脩其職。其能殺不辜者少矣。不幸而有焉。則其子弟以告于有司。有司不能聽。以告于其君。其君不能聽。以告于方伯。方伯不能聽。以告天子。則天子誅其不能聽者。而爲之施刑於其讎。亂世則天子諸侯方伯。皆不可以告。故書說紂曰。凡有辜罪。乃罔恒獲。小民方興。相爲敵讎。蓋讎之所以興。以上之不可告。辜罪之不常獲也。方是時。有父兄之讎。而輒殺之者。君子權其勢恕其情。而與之可也。故復讎之義。見於春秋傳。見於禮記。爲亂世之爲子弟者言之也。(王臨川集卷七十)

兩芳洲云。父母ノ讎ニハ。トモニ天下ヲトモニセストイヘルモ。周ノ季世。世ノ中亂國トナリ。此國ノ號令。彼國ニ及ハス。亡ヲイレ叛ヲ招クノ風儀ハヤリタル時ノナリヘシ。今ノ時ハ。誠ニ八島ノ外マテ。ナビカヌ草木モナク。メデタキ一統ノ御代ナレハ。人ノ親ヲ殺セシ者アラハ。イカニモシテ尋ネ出シ。其罪ヲタシ給フヘキニ。其子ニ任セ置カレ。生殺ノ權ヲ下ニ貸シ給フハ。如何ナル故ニヤ。

公寛按スルニ。芳洲云フトコロ。安石ノ意ナリ。芳洲。安石既ニ此解アルヲ知ラサルカ。覺東ナシ。其子ニ任セ置カレト云フ。今ハナシ。芳洲ノ時ハ。其禁令モ未タナカリシニヤ。復讎ノ議ハ。是ナリヤ否ヤ。

郡縣ナレハ此ノ如シ。今ニテモ天領ノミナラハ。然リ。然レモ諸侯ニテハ道理ハ然レモ。事實不合。下ニ詳ナリ。治世ニ統ニテモ。勢位アル者。賤者ヲ枉殺スルコトアリ。其子弟不勝怨憤シテ復讎ノコトアリ。唐ノ代ニコレ有リテ。陳子昂柳子厚韓退之ナト。復讎議アリ。柳子厚カ議。其平ヲ得タリ。安石之言。於漢土有未盡其義者。此事大ニ委曲アリ。面晤ヲ待ツ。

芳洲ノ其子ニ任セ置カルト云フハ。武人ノ朋輩ヲ殺シテ亡命スル者ヲ云。庶民ハ然ラス。是モ今ハ上ヨリ其罪人ヲ捕ヘ戮セラレ。子弟ノ復讎ハ禁セラル。然レモ近來又稀ニ是アリ。或云。今ニテモ諸國大名家中ノ人ハ。罪ヲ犯シテ出奔スルハ。必嚴ク其罪人ヲ搜索セラルト。朋輩ヲ殺スノ私罪ハ。他國或ハ公朝ノ地ニ匿レ居レハ。是ヲ捕フルコト甚六カシク。費用多キ故ニ。初暫ク人ヲ出シ搜ラレト。後ハ捨置カル。是今モ復讎ノ子弟アル所ナリト。近時大久保侯。其子ニ命シテ。父ヲ殺ス者ヲ搜索セシム。復讎ハ禁セラル、故ニ。上ヘ達シテ。主人ヨリ命セラル。是時宜ヲ得ルナリ。若洲カ説ハ。安石ニ暗合スルナルヘシ。此レ一通ノ道理ニテ。余モ童子ノ時ニ是ヲ言ヘリ。

語孟字義評ニ。如曰道之將廢也與命也。亡之命矣夫。是謂不當受禍而受禍。然人力之所不能免。要亦天之所命也。猶君命雖或失當。爲臣者未如之何也。是天命之變也。天命ノ變ト申處ヲシカト意得。且人ニモ申キカセラル、様ニ仕置度。自分ニハ何ヤラン意得居候ヘモ。佛氏ノ宿業ヲ以テ説クヤウニハ難申候。君命ノ失當。爲臣者如何トモスルコトナケレモ。君ヲ論スレ

ハ。君ノ不明也。不當受ノ禍ヲ受クルモ天命ナレト。天ヲ論スレハ。天ノ不明也トハ申カタシ。大孝子大忠臣禍ヲ受ケ。死シテ事蹟湮滅シタルモ多クアルヘシ。サマテ大孝子ト申ヘカラサルニ。孝感アルモアリ。天道是非ノ論ヲ質スヤウニ候ヘト。左ニテハナク。天命ノ變ト言フ處ヲシカト心得タク候。

凡天意ハ人意ヲ以テ度ルヘカラス。人意ヲ以テ論セハ。天常ニ治ヲ欲シテ。亂ヲ欲スヘカラス。孟子。天未欲平治天下。コレ天忍ナリト云ヘシ。聖人奉天敬天モ。今ノ俗人ノ畏天ト同シ。細ナル理屈詰ナシ。天網恢々疎而不漏。天定而勝人モ。人之所惡。遂受天罰ヲ云フナリ。爲人臣者。無罪而受譴。豈怨君乎。歸之命。命者自天而出。其失常者。猶春當暖而寒。冬當寒而暖。天道之變。非人之所能測知也。究竟無如之何。故歸之於天而已矣。雖然天意不可測。安知非我有當受咎之罪。而不自知者哉。若決我無罪。而天濫罰之。則以天爲妄也。君子豈然乎。臣之於君亦然。是君子不怨天不咎人之實情也。非如佛氏宿業慰愚俗方便說也。聖人敬天。豈以天爲無心哉。於鬼神亦然。後儒以天爲理。鬼神爲陰陽。其弊至於無天與鬼神。其害有不可言者。可不懼哉。今モシ人ニ諭サハ。我招ク所ナクシテ禍アルハ。天命ナリ。善者得禍。不善者得福反也。寒暑ノ時ヲ失フカ如シ。然レモ我凡夫ナレハ。平生ノ所行。道ニ合ハサル者アリテ。天ノ咎アルモ知ルヘカラサレハ。天ヲ怨ムヘカラス。且天意ハ測リ知ルヘカラス。禍福相依。今ノ禍。後日ノ福ノ本タリ。又

人間萬事塞翁馬ニテ。是カ福タランモ知ルヘカラス。唯天ヲ怨ミス人ヲ咎メス。是ニ安ンシ。身ヲ慎シミ。時ヲ俟ツヘシ。古人云。君相不言命ト。命ハ臣子ヨリ言フ所ニテ。君ヤ天ヲ論スル所ニアラス。皆理詰ニアラス。人生受用ノ實事ナリ。豊後廣瀨元簡。敬天命ヲ教トシテ。人ヲ諭ス。著書アリ。人嘗テ示ス。理窟詰ニ詳説スル故ニ。堯舜ノ子ノ不肖。孔子ノ不得位ハ。其身ニ於テハ失徳ナケレト。其先祖ニ不善アリテ。其不善ノ餘殃ナリト云。其人ノ聰明慈仁ニ生ル、モ。先祖積善ノ餘慶ナリト説ケリ。誠ニ佛氏宿業ノ説ノ如シ。然ラハ堯舜孔子ハ。先祖ノ積善ニヨリ聖徳アレト。又先祖ノ不善ニヨリテ。不肖ノ子アリ不得位ヤ。其先祖ノ不善ハ。證據モナキ妄説ナリ。是理窟詰ニスルヨリ。如此ニナリテ。却テ人ノ疑ヲ生スルナリ。錦城ナトモ。功過格ヲ主張シテ。前田家毛利家ノ繁昌ハ。菅丞相。大江廣元ノ功ニヨルト云ノ類。是モ理窟詰ニスレハ。算用不合ト多シ。其極ハ天道是歟非歟ト疑フニ至ル。凡事常アリ。變アリ。譬ヘハ稼穡得食ハ常ナリ。水旱飢饉ニテ。稼穡ニ力ヲ盡シテモ。食ヲ得サルハ變ナリ。變ハ度外ニ置テ。稼穡ニ力ヲ盡スハ。農夫ノ常ナリ。君子モ亦然リ。忠臣孔子ノ生テ禍ニ逢ヒ。或ハ死シテ湮滅シテ名譽ナキハ變ナリ。常理ニアラス。其變ハ度外ニ置テ。其常理ヲ務ムルナリ。其度外ノ變ヲ愚俗ニ曉スハ。佛氏ニ若クハナシ。往年一門人。民婦ノ枉屈ヲ愁訴セシヲ。宿業ニテ諭シタルトアリ。此類儒道ニテ諭サハ。中々愚婦ノ耳ヘハ入りカタシ。因テ云。西洋天主。西域回々教ノ類。皆佛法ノ説ノ如シ。故ニ愚夫愚婦ニ入易ク。盛ニ行ハル。余竊ニ謂フ。

愚夫愚婦ハ。細民ノミニアラス。貴者ニモアリ。今ノ世ニテ云ヘハ。儒教ハ君子經世ノ當務ニテ。論
愚民ハ佛ヲ假ルヘシ。モシ佛法ヲ滅サハ。世ハ治マルヘカラス。錦城カ佛法鍊砲女房ニテ今ノ世ハ治
マルト云フ。知言ト云フヘシ。漢士ニテモ。我邦ニテモ。佛法ヲ用ヒラルハ。自然ノ勢ニテ。治
ヲ資ク。儒者ノ一概ニ排佛スルハ偏見ナリ。

一齋言志錄開卷第一ニ。凡天地間。古往今來。陰陽晝夜。日月代明。四時錯行。其數皆前定。至
於人富貴貧賤。死生壽夭。利害榮辱。聚散離合。莫非一定之數。殊未之前知耳。譬猶傀儡之
戲。機關已具。而觀者不知也。世人不悟其如此。以爲己之知力足恃。而終身役々。東索西
求。遂悴勞以斃。斯亦惑之甚。愚按ニ。此文開卷第一ニ出セトモ。未盡トコロアルニ似タリ。萬
事自然天然ニ任セ。務ムルモ務メサルモ。同シ様ニ聞ヘ申候。同書第六條ニ。盡性分之本然。務
職分之當然。如此而已矣ト。此語ヲ加ヘテ。始メテ全キヤウニ被存候。高評有ラハ。示シ玉ヘ
此說ハ聖人立教之旨ニアラス。果如此ナラハ。忠臣ノ國ノ爲ニ謀ルモ。唯其職ヲ盡スノミ。孝子ノ親
ノ病ヲ護スルモ。唯其職ヲ盡スノミニテ。忠孝ノ實意ハナクナリ。唯塞責ノトナル也。自古忠臣
孝子。勞瘁而死者。亦惑之甚トナル也。一齋王陽明ノ學ヲナス。故ニ悟過候テ。人情ヲ知ラス。近
クハ父ノ子ヲ育スル。悟リ過タル者ハ。人各性アリ。教ノ能化スル所ニアラストテ。一向ニ棄育ニシ
テ。其子アシクナルアリ。中人ハ習ニ依テ。善トナリ惡トナル。必シモ變化スヘカラサルニアラス。

國之盛衰。家之興亡。其他諸事。不必有定數。人事之得失。亦關係於此。故聖人諄々教之。君子
孳々務之。

漢士ノ人ハ。學問シテ其竟ハ君ニ仕ヘ。天下ノ政ヲ執テ天下ヲ安セント欲ス。是正面ナリ。時ニ
遇不遇アリ。仕ヘテ志ヲ得サルモアリ。不仕シテ歿スルモアリ。不仕シテ歿スル人ニ。賢者モ
アラン。上ニ堯舜アラハ。出テ仕フルナラン。本邦ノ人ハ。學問シタリ。仕ヘテ國政ヲ執ル人
ハ。藩國ト雖モ希ナリ。況ヤ天下ノ政ヲヤ。タ、記室。講官。句讀師ノ員ニ具ルノミ。仕ヘスシ
テ儒業ヲナス人。詩文風流ノ徒トナルハ論ナシ。況ヤ無賴ノ行ヲナス文人詩客ハ。素ヨリ論スル
ニ足ラス。經義ヲ專トシ。實學ヲナス人トテモ。其門人ヲ教諭ノ傍。著述ヲ以テ生涯ノ業トシ。
我家トテハ。微々タル小宅ヲ治ムルノミ。德業モ功德モ。施行スヘキ場ナシ。タトヒ門人數百ア
リ。有用ノ實學ヲスル人ハ。絶テ少キモノナレハ。列國ノ政ヲ助クヘキ德澤モナシ。浮屠ノ愚
俗ヲ教化スルニ比スレハ。其功德淺少ナルハ。何ソヤ。サテ己レ一人ノ身ヲ脩ムルコトハ。家人大
勢アルカ。一族多クシテ。其處置ニ學問ノ力ニアラスンハ。當否辨シ難キハ格別。僅ニ小家ノ主
トシテ。父子妻孥ノ外。四五輩ノ奴婢ヲサムルコト。聖賢ノ書ヲ讀マストモ。具原益軒ノ家道訓
一部ニテ。事足ルヤウ也。學問ノ力ニアラサレハ。議シ難キ大事モナク。行ヒ難キ大禮モナシ。
然ラハアクマテ學ヒタリ。用フヘキ地ナキヤウナリ。我輩ノ如キ。家ニ二頃ノ薄田アリテ。生

涯出テ仕フル心ナク。今ヨリ後チ學成リタリ。別ニ儒ヲ以テ業ヲ開ク望モナキ者ハ。聖賢ノ道ヲ求メ。其義理ヲ究メ。其禮ヲ講センヨリ。畦丁灌園ノ勞ヲ分チ。奴僕舂米ノ助ヲナシ。雜費ヲ省ケルノ餘リ。己カ家ハ勿論。一族郷黨ノ急ヲ救ハ。是吾分上ノ仁ニテ。一世ノ功業。此上ヤアルト云ヘキ歟。モシ如斯シテ。聖賢ノ意ニカナヒ。吾分上ノ當然タラハ。今ヨリ後ハ。僅ノ藏書モ酷却シテ。其錢ヲ以テ又半頃ノ田ヲ買フノ資トシ。救急ノ用ニ充テントス。日夜書ヲ讀ムモ。道ヲ明ラメ。其義理ニ通シ。賢人君子ノ萬分ノ一ヲ學ヒ得テ。其意ヲ行ハント欲スレハナリ。サレモ其道ヲ明ラメ。其義ニ通シ。言行中正ヲ得ン。奴隷ト勞ヲ分ツノ暇ニ。是ヲナシタリ。一世ノ得ルトコロ。何程ノコカアラン。是又志士ノ欲スル所ニアラス。然則我輩ノ如キ。一知半解ノ學ヲナサンヨリ。志ヲ改メ。讀書ノ樂ヲ棄テント欲ス。是公寬身上。今日ノ一大疑案也。先生ソレコレヲ教ヘヨ。唯命之レ從ハン。

是ハ誠ニ身上實地ニ足ヲ立ツルノ覺悟ニテ。善問ナリ。漢土モ周ノ代。春秋ノ時ナト。列國ノ士。其國ニ仕フル者。國政ヲ執ルコト能ハス。列國ノ執政。多クハ公族ナリ。孔子ナト志ヲ得玉フ。下太夫ニ至ルマテナリ。況ヤ天下ノ政ヲ執ル。一向望モナキナリ。漢以後郡縣ノ世トナリ。帝王モ匹夫ヨリ起リ。王侯將相種ナキ勢ニナリテ。學者モ宰相ニ至ルノ願ヒアリ。然レモ是ハ數萬億ノ中ニテ。命分ノ厚キ人ニアラサレハ。賢者ト云ヘトモ得ヘカラス。故ニ漢土ノ學者ハ。國躰進士及第セサレハ。

士トナルコト能ハサル故ニ。皆學問シテ士類ニ入ルコトヲ願フナリ。必シモ天下ノ政ヲ執ラント期スルニアラス。然ルニ明ノ代ナトヲ見ルニ。朝廷ニ仕フル者。禍多クシテ福少シ。仕官シテ道ヲ行フ誠ニ難シ。衣食住ノ三ツ略足ラハ。仕ヘスシテ志ヲ養ヒ。古ノ道ヲ樂ムニ如カス。況ヤ我邦方今諸侯大夫。皆世祿世官ニテ。學問シテ才德アル人モ。國相タルコト能ハス。然レモ人ニ過キタル經世ノ才アル人ハ。仕官シテ君大夫ノ問ニ應シ。國政ヲ助クヘシ。吾輩ハ安分各其道ヲ盡シ。餘力ニ讀書悟義理ヲ樂トシテ可ナリ。拙子市井ニ生レト。幼ヨリ讀書ヲ好ム。幸ニ嫡子ニアラス。先業ヲ繼カサル故ニ。書生トナリ。學問ヲ樂トシテ。生涯ヲ了スルナリ。固ヨリ不才ニテ。且多病ナレハ。仕官ノ志ナシ。但信從ノ人ニ愚得ヲ述フルノミ也。今足下聖賢ノ道ヲ世ニ行フヘキ位ナク。後進ヲ教フルモ。益少ク見ユレバ。學問ヲヤメ。奴僕ノ勞ヲ分チ。一族郷黨ノ急ヲ救ハ。我身一分ノ仁ニシテ。聖賢ノ道ニ合セハ。是ヨリ學問ヲヤメン歟トノ御尋。コレ實學ナリ。然レモ人生皆各樂ム所アリテ。生涯ヲ了ス。實行ノミニテ。少シモ樂ナク。世ヲ送ルコトハナラサル者ナリ。學問ヲセサル者ハ。又必和歌蹴鞠碁雙六音樂ヲ好ムアリ。足下他伎ヲ好マス。讀書ヲ御好被成候事。第一ノ物好ナリ。世ノ讀書ノ人。是ニ耽リテ。先業ヲ敗ル人アリ。是學問シテ。反テ聖賢ノ道ニ乖ク也。足下ハ然ラス。足下聖賢ノ實學ヲ知得レハ。家事ニ妨ナクハ。是迄ノ如クニシテ。讀書ヲ樂玉フヘキナリ。然レモ讀書ノ人。家事ヲ管セス。家僕ニ委シ。家僕大ナル私ヲナシテ。家ヲ傾クル。余カ知ル人ニモ往々是アリ。小事ハ任

七置ケル。大事ハ全ク任セ難シ。是ハ油斷ナサレマシキ也。一族郷黨ヲ救フ。何レカノ及ス所ハナ
スヘシ。大牀ニ用心レハ。自身ノ手足勞スルニモ及フマシ。自身手足勞スル。何程ノ助ニモナラシ。
是ハ一心ノ覺悟ニテ。世事モ學問モ。兩ラ得ヘキナリ。學問熟シ。或ハ人ニ傳ヘ。或ハ書ヲ著シ。後
世ニ名ヲ遺スハ。是ハ餘事ナリ。能保先業。餘暇樂讀書。今日ノ實行實樂ナルヘシ。學問モ樂而
不淫ヲ主トス。世ノ實行ニ志ナキ人ハ。必淫スルニ至ル。讀書窮理通天下之事情ルハ。至樂ナリ。
君子ノ樂ム所ナリ。イカンソ廢スヘキ。

昨癸巳之秋ヨリ。米價次第ニ貴騰。何國モ賤民困窮。其領主或頭立候者救濟。餓死ニ到リ候者ハ。
先近隣之國々ニハ不承。深山中。常年ニテモ米乏シキ地ハ。餓死人モ有之歟。前便熊野路ナト
其趣ニ被仰下。始而承リ候。御座候。大概五畿内四方百里之内ハ。昨年之秋稼中作ニテ。米穀
拂底ニ到リ不申候ヘ共。奥羽大侵。米價貴涌シ。上下分相應ニ圍一本困候故。益米乏シク。中
國ニテ餓死ニ及ハセ候ハ。領主地頭之行届カサルニテ。奥羽ノ大凶荒ニテ。可救之策ナキトハ。
譯違ヒ。其地頭領主ノ醜辱ト存候。乍然昨秋以來。諸國之政事ヲ承候ニ。皆同一轍。少々ツ、ノ
救米ナト。名聞計ニテ。實惠ニハ無之。隣國之目當ト可成。藩政承リ不申。何國之士大夫モ。
米價之貴キヲ竊ニ喜居申候。弊郷ナトモ。隣境之一揆騒動ニ恐懼。俄ニ粥施行。毎日一千三百餘
人出候。去年十一月ヨリ。當三月ニテ止申候。扱其乞救候者。奥羽ナトハ。良民モ惡民モ。農

夫モ販客モ。一同飢餓ニ臨ミ可申。蓄積ノアラン限り。救濟致度。二候ヘ。弊邑ナトハ。一
千三百餘人。皆市中之者ニテ。其中ニ實ニ鰥寡孤獨ハ十之一ニテ。餘ハ無賴子之妻孥。奕徒。酒
徒。奸惡浮虛ノコニテ送世候者耳。故其人品作業ヲ承リ候テハ。哀愍之心生シ不申候ヘ。救者
ハ名聞。救ハル、者ハ實ニ國恩之不可報ヲ感戴スル者ナク。酒肴之助トスルモノ不少候ヘ。一
揆起リ候モ。多クハ彼無賴遊手奕徒之類ヨリ鼓動脅從。良民モ其響ニ應候事故。其起源ヲ抑候モ
無益ニハ無之候ヘ。農民トハ違ヒ。市中之小民。遊情之小人。多クハ他邦流寓來奔之者ニテ。
窮巷僻街ニ隱居。小大種々奸惡浮虛ノコヲ謀リ居候者過半。何之國益ニモナリ不申。古言ニ民之
父母ト云フハ。農ヲ專トシテ云フヤ。此等之遊惰空手之無賴者迄含居候哉。方今至治之澤溢レ。四
民之外。何トモ難名作業之者多ク。都下ハ尙可多候ヘ。是ハ別之事。弊邑僅ニ三四千聚居之市
中ニモ。平日浮虛ノコノ心懸候遊民。凶年ニ會ヒ。浮虛之所爲ハ無用ニナリ。困窮ニ及フ者多
ク。且廉恥之心ハ露無之。公然乞救。扱此節米價下リ。稍穩ニ成候ヘハ。右等之者ハ。遊惰ニ
安シ。歉歲ニ懲テ。政者行候氣色ハ無之候。如斯群小ヲ牧シ候人君。有司ニ當リ候ハ。右
等之コハ。細民之常態。不可責治トシテ。サラリト打捨。惟賑貧救餓ヲ眞一文字ニ心掛。仁惠ヲ
行。牧小民者之當然ニ候哉。此處ニ到リ。農民ヲ哀愍スルトハ。譯モ違候様ニ被存候。孟子
時代ノ民ト指ス者トハ。事情違候様ニテ。愚惑難決候。扱右ハ有司人君之任ニテ。草莽之者之急

務ニアラス候へ。公寛家業此儀ニ類シ候。年来疑惑仕リ候故。先此事ヲ舉ケ。高諭ヲ願候。公寛先祖ヨリ少分之薄田アリテ。小農百餘人ニ作ラセ置キ候。其中ニハ種々之者有之。例歳收納時ニハ事多ク。凶年ニハ事務一倍シテ。困リ申候。百餘人之中ニハ。正直廉潔之者モ。稀ニハ有之候へ。元來無恒心小民故。其意ニ從候へハ。飽足事ナク候へ。其所望ニ應シ候カ。無知之細民ヲ御スルノ當然ニ御座候哉。此所手ハナシテ。其欲望ニ應シ。恩德ニ化シ候迄。不厭候。ハ難行候。元來何之守モナキ細民故。其欲スル所ニ任セ候ハ。良民モ利ニ從候カ人情故。却而仁柔之弊出候歟トアヤマレ。十分其欲スル處ニ應從致シ難ク候へ。爰ニ目ヲ附ケ居候テハ。隣里之俗漢庸叟ガ。利之一字ニテ小農ヲ牧シ候モ同様ニナリ。隣里ノ目當トモナルヘキ所作ハ無之候。サレハトテ小農ニ疾病災厄ニ罹リタルカ。鰥寡孤獨之可哀ニモアラス。其人品ヲ操レハ。奕徒酒徒ニテ。惰農ナリ。タトヘ惰農ニテモ。三十年五十年之間ニアル荒歲ニ。饑餓ニ及フト云フニ至リテハ。救濟セスンハアルヘカラサレ。常ニ如斯様ナルヲ御スルモ。勉強シテ其貧困トイフ所ハカリニ目ヲ附。詐欺モ奸謀モ。不知顔ニテ哀愍スルヲ。細民ヲ牧スル道トスルヤ。此處置ニ到リ。斷然ト意ヲ決シ候へハ。良民モ惡民之後ニ附キ風ヲナサンカト臆シテ。決意致シ。讀書聞道之日久シクシテ。人事實際ニ至リテハ。反テ庸俗ニ劣リ。心恒ニ安カラス候へ。戎狄ハアカシムヘカラスト云場之様ニ被存。其非義目ニ付キ。寬柔以教トイフヲ守レハ。我等ニアリ

テハ。世ニ云フ結構人ノ所作ニナリ候歟ト。アヤマレ申候。此處御教蒙リ度候。

今年江戸ニモ京ニモ。餓死ナキニアラス。京ニハ米價高直ニテ。家普請少ク。日傭之者業ヲ失ヒ。西陣織物少ク。其下職之失業乞兒ト成者アリ。夫婦離散スル者アリ。江戸モ京モ。去冬ハ施行スル者。窮民ニアラサル者モ。是ヲ受ケテ遊惰ス。官ヨリ觸出テ。是ヲ戒ム。當春ヨリ夏ニ到リ。實ニ飢餓ニモ及フニ。京モ江戸モ。施行スル人ナシ。是御蔭參リ報捨ト同シク。名聞ニテ人ソバヘスルナリト。何方ニテモ嘲リ候。愚意ニハ諸侯ハ國人ヲ我民トセラル、故ニ。仙臺ナトノ飢饉ノ國モ。惠下ニ及フ。江戸京ナトハ。郡縣ノ吏ト同シク。如此ニ行届カサルヲアリ。其中ニ江戸ハ將軍之御膝下故ニ。去年モ今年モ。上ヨリ御救米出ツ。是ハ。上意ニ出ルナルヘシ。是ヲ我民ト思召サル、故也。京ハ御救米不出。此ハ吏タル人。其民ニアラサレハナリ。公儀ヨリ諸侯圍米ヲセサルヤウニ。度々號令アリ。京ニテモ米價高直ニ不拘。町屋面々普請セヨト令セラル。然レモ上下共ニ各其私ヲ計リ。世ヲ救フノ心ナキ故ニ。令出ルモ從ハス。余毎ニ言フ伊勢尾張ヨリ西ハ。大抵七八分。西國ハ豐作。米ハ不之。諸國武家カタ。米價貴クテ。皆勝手宜シ。貧民ノ米價ノ貴キニ困シムヲ。上之利ヲ分チテ救ハ、難キヲナシト。所聞余カ推量ノ如クナリ。貴説モオナシ。愚意ニハ諸侯之執事之人。若今年諸國。如奥羽凶作ナレハ。大ニ困厄也ト。是ヲ懼レテ米ヲ圍フナリ。各己一分ヲ憂フルナリ。公儀ノ命ニ從ヒ。天下一家ノ心ニナリ。常之如ク米ヲ出シ。來年若凶作ナラハ。天下ト共ニ苦ヲ同クセントセハ。米價

大ニ上ラス。各其國之小民モ究ヒサルナリ。然レモ是傍觀ニテ。當局ハ他國ヲ見合。獨米ヲ下直ニ賣出シ候事不能ヘシ。然レモ是モ今年ノミニアラス。今ノ人情。皆惡ク習ヘハナリ。農民ハ麥熟スレハ食アリ。又雜物ニテモ食シ。飢餓ニ及ハス。市民之失業。飢餓ニ至ル。此京江戶繁華ノ地ニ飢民アル所ナリ。平日ニ無賴之者ヲ容レ置候。其困窮不可不救。貴郷ナトモ。寒郷僻邑ナラハ。左様之市民多クアラシ。湊ナル故然リ。世界ノ一ハ。理非キツハリトハ行カヌモノニテ。儒者ハ佛法ヲイタク排斥スレト。陳眉公ハ。佛法者大濟養院。濟許多鰥寡孤獨トカ云ヘル如ク。佛法ニ惑フテ。施シラスル者多シ。佛法ナクハ。窮民ヲ救フ者少シ。古ヨリ遊惰之姦民ヲイタク惡ミテ。制令嚴ニテ。姦民手ヲ入ル、所ナク。亂トナリタルコト。其例多ケレハ。如此ハ世界ノ常態ナリ。莊周カ言ニ。聞レ在宥天下。不聞治天下ト。在宥トハ。是マテ有來リタル者ヲ。其儘ニ宥メ置クナリ。甚嚴密ニ無益之者ヲ去ラントスルハ。實有益ノ者少カルヘシ。サレハ治世者。其甚シキモノヲ除キテ。是ヲ容ル、ナリ。今ニテモ佛家ヲミルニ。皆不知法之僧ニテ。法律ニテ正サハ。皆罪人タルヘシ。儒者モ記誦詞章ノ徒ノミ甚シケレハ。夫サヘセヌ者。道ヲ以テ罪セハ。大抵逃ル、者ナシ。況無知不學ノ民ヲヤ。甚惡ムナルヘシ。

我土ニ住セハ。皆民ナリ。民トモ心ナレハ。初ヨリ沙汰シテ容マシキナリ。古言ニ民之父母云々之標答
今之士大夫之泄々沓々。此ニ類ス。何止此輩ノミナラン。廉恥ノ心露無之公然乞救云々之標答

此ヲ教化スルハ。常ニアリ。此時ニハ唯此ヲ憐ミ濟フヘキナリ。右等ノ事ハ。細民之常態。不可責治トシテサラリト打捨云々之標答
老拙ケ様之處置致候事無之候ヘハ。席上之理窟ハ申難ク候。此等之事。世人聞候テモ。非難ナキホトニ。其人其時宜ヲ以テ。御計ラヒアルヘシ。學者ナレハ。常人ヨリ格別ナリト云ハレントスレハ。人ニ欺カレ。又聰明ヲ著ントスレハ。必刻剝ニ至ル。一本注此等ノ處置ヲ一方ニ定メントスルコト。反テ未熟ノ了簡ト存候。古ヨリ治國ノ難キコトイフモ。民情ヲ以テ云フナリ。サレハ難治ト知りテ。心ヲ用フレハ。能ク是ヲ治ム。大小ノ異アレト。理ハ一ナリ。乍憚足下ノ質ハ。義勝仁ト見ヘ候。此刻剝ニ流レ。人心ヲ失フノ本ナリ。此處能々御熟者可被成候。人各有性質。老拙ハ常好談英雄豪傑之事。不_レ好教導幼學_ニ。夫故ニ幼學ヲ教フルノ著述。是迄一モ無之候。如此之性質ナレハ。教人治愚人_一事ハ。出來不申候。錦城ハ大才子ニテ。放蕩ナレト。豪傑ノ一ハ嫌ニテ。區々タル婦人ヲ戒ル如キノ因果ヲ説クコト好ム。此人ハ能ク人ヲ教導スヘシ。
詐欺姦謀ハ察スヘシ。然レモ困窮之者ハ。親類故舊ニテモ。助力ヲ乞ヒ候ニ。必詐僞アリ。是ハ言種ナクテハ。乞ヒ難キナレハナリ。貧ニアラスシテ貧ト僞リ。或ハ人ヲ傷フノ姦計ニモアラサレハ。詐僞姦謀ト惡シキ名目モツケ難キナリ。余カ此類ハ俗ニ所謂貧之盜ト怨スルナリ。然レモ窮厄カ目前ノ實ナラハ。是ヲ救濟シ。平日ニ惡シキコトアラハ。因テ是ヲ戒ムヘシ。恩惠アリテ規戒スルハ。必是ヲ聽ク。恩惠ナクテ其非ヲ責ムルハ。服セサルナリ。書不盡言。亦待_ニ面語_一。

寛柔以教トアレハ。寛柔ノミニテ。教ヘサルニアラス。上ニ云フ如ク。恩惠ト規正ト兼用ヒハ。柔ニ流ル、コト有ルヘカラス。

足下ノ問ハ。誠ニ實學ナリ。世人多ク書籍上ノコノミニテ。事業ニ及ハス。此事業ハ道理ニヨラス。己カ勝手ニ行ヒテ。學問ハ學問。事業ハ事業ト。心得候ヤ。是等ノ處置ヲ問フハ未熟ニ見ユト。恥テ不問アリ。甚不可ナリ。往年丹波之中村氏。自分處置之事ヲ密ニ問フ。愚意ヲ申遣セシニ。兩三年モ前ヨリ問候ハ、早ク安心可致ニト申來候。御尋實學ト存候。

竹山逸史。十九年坤軸云々。竹山論隕星彗孛。西洋人之餘唾云々。麻田之說。西人亦已言之。世之喜新者珍之。余不之信云々。西洋人ノ說ニモ。虛妄御座候哉。承置度候。

今ノ蘭學ヲ爲ス者云。漢土ノ說ハ臆說多シ。西洋ノ說ハ。實驗スル者ニテ。虛妄ナシト。是然ラス。解體新書ナトニ。人ノ作用ヲ論スルモ。生時ニ驗スルニアラス。死後ノ推量ナリ。西洋人ノ天ヲ論スルヤ。首メニ遊心ノ說アリ。遊心トハ。人身天ヘハ上ラレス。心ヲ天ヘ置キ。天上ニ上リタル心ニテ。是ヲ測ルト云フナリ。余云。是臆說ナリ。譬ヘハ唐天竺へ行カスシテ。心ヲ唐天竺ニ遊ハシテ見レハ。彼土地如此々ト云フカ如シ。實驗ニアラス。西人ノ說。臆度笑フヘキ者。往々有之。天ヨリ地ヘ物ノ落下ルハ。地心ニ吸フ者アリト云フカ如キ。是ナリ。

工夫ノ語ハ。元來何ノ義ヨリ轉シ來ルヤ。

工夫ハ後世ノ俗語ナリ。是ハ普請ニ大工幾人。人夫幾人ト。後ニ勘定スルヨリ起リ。用工夫ナト云フハ。用力コナリ。今我邦ニ思考フルヲ工夫ト云フハ。誤ナリ。此邦ニテ工夫ヲ考思トスルノ誤ハ。愚案ニ。禪家坐禪ヲ以テ工夫トス。是靜坐止念ヲ勤トスルナリ。考思スルニアラス。其貌默シテ考フルニ似タリ。因テ工夫ヲ考思ト誤ルナラン。條目工夫ナト云フハ。條目ノ勤方ナリ。先年モ戲問機嫌義。余答曰。佛經有窺機嫌語。機ハ臨機應變ノ機。嫌ハ人ノ嫌惡ナリ。窺察其時機。及嫌惡乎否也。非候其起居之意也。熊坂ノ謠ニ。機嫌ハヨキソ。早入レト云フハ。其義ヲ失ハス。貴人ヘ窺御機嫌ト云フハ。近世ノ轉語ナルヘシ。難有モ。佛經ニ出テ。希有ノ義ナリ。今感謝ノ語トナル。今ノ俗語。多ク佛經ニ出テ。誤用スルモノ多シ。

哀公問弟子孰爲好學章。好學。諸弟子ノ學ヲスルハ。好ト云フモノニハナキヤ。

好學ハ好實學ナリ。今人ニテ看ルヘシ。實學ヲ好ム人。幾人カアル。不遷怒不貳過。コレ好實學ノ效ナリ。孔子嘗言。與之語而不倦者。是回歟ト。他ノ弟子ハ。孔子ノ話ニ倦ミ退屈スルト見ユル也。コレニテモ顔子ノ眞ニ學ヲ好ムヲ見ルヘシ。

賢哉回也一簞食一瓢飲章。好學ノ外。飲食居室ノ好ナキヲ云フテ。別ニ深意ハナキカ。

樂道ノ深キ。貧賤ヲ忘ル、ヲ贊シ玉フナリ。飲食居室ノ好ナキト云フハ。不可ナリ。余生質鈍ニテ。飲食居室玩好ノ好。一切ナシ。嘗テ云。讀書ノ外。山水ノ好景。百花ノ麗。女子ノ美。此三ノ者。

曰ヲ悦ハシムルノミト。世人ヲ觀ルニ。種々ノ物好アリ。是ハ余カ人情ニアラサルナリ。賢者亦人也。飲食居室之好。亦必與人同。但其樂道之深。不以此爲憂耳。余山水百花美女ノ三好ハ。實情ナリ。是人ト同シ。他ノ好ハナシ。是人ト異ナリ。然レ花ト女トハ。他ヨリ見テハ。最不好ニ似タリ。未嘗種々花。人ヨリ花ヲ贈レハ。瓶ニ挿テ几前ニ置ク。自分ニ花ヲ求メテ玩看スルヲナシ。幼ヨリ色情アリ。故ニ少年ヨリ深ク恐レテ是ヲ遠サク。故ニ此惑ナシ。然レ我心ヲ問ヘハ。今七十二餘リテ。猶色情アリ。此色情ハ。姪慾ニアラス。悦美色ノ心ナリ。是ヲ細説スルハ。余カ花ト美女ヲ好ム。世人ノ好ムカ如クト人思ハ。大ニ事情違ヒ。人ノ怪疑アランヲ慮テナリ。無益ノヲ書出シ。大ニ筆ヲ費ス。

本月六日之貴書。昨夕到着。嚴寒之節。貴家愈御清寧被成御入。珍重奉存候。老拙無異。御省念可被下候。豊岡歸後。書狀呈候處。早速御返書被下。相届。當秋大凶年處置御六ヶ敷様子。致承知候。其後此方ヨリ御安否承度存候ヘ。舟木ヨリ被示候條令御寫シ。近日彼方ヘ返書可被成旨ニ候ヘハ。足下筆達者。無程御寫シ。此方ヘ御出シ可有。其節尙御様子モ承ルヘクト。見合セ及延引候。今般之御書面下作之方。コキスリ候テ。追々増引申來リ。日夜此事ニ御懸リ。何事モ御廢棄。今日御風氣ニテ御引籠リ。因之少々御閑隙。御狀被下候由。舟木ヘ御返書之御暇無之段。御尤ニ存候。

一當年凶作。海内一同。九州四國。先達テ豊作ノ様申來候處。是モ晚稻大ニ惡敷。大抵五分之作ニテ。豊前小倉吳服所エ扶持米四分五厘ニテ被渡候。伊豫松山高橋惣藏。七月ヨリ歸國。十一月書狀來リ。彼國モ凶作。山陰山陽ニ比スレハ。宜敷方ニテ。米一升百三十二文ト申來候。淡路林一藏ヨリハ。十月ニ百三十三文ト申來候。此頃ハ又價高クト存候。勢州モ租稅大ニ不收。老拙俸十口。先達テヨリ七ヶ年之間省略ニテ。俸祿七分ニ渡シ。年限當年ニテ滿シ候處。因テ右七分之處ヲ三分八厘ニテ渡サレ候旨。當月京留守居ヨリ申來候。拙方ヘ渡候米。來年中ニ四石七斗ノミ。先達テヨリ寄宿諸生。米價高直。世間皆飯料ヲ増シ候ヘハ。定例一匁ニテハ心不安。増候様被申候ヘ。拙方七人扶持。當年分十二石三斗九升。春ノ比寄宿人少ク。益後六七人。家内共二十人ニ成候ヘトモ。年内ハ米足リ候。高直ノ米ヲ買候ニテハ無之候ヘハ。是ニ頓着無之ト申。年内ハ右之通ニ候由。諸生中氣之毒ニ被存候。老拙但馬ヘ下リ候留守中ニ。玄關中ノ間。疊十疊。塾中ヨリ表替被致。金一兩二朱懸リ候。是ヲ寄進被致候。來春ハ餘米モ無之。夫婦婢僕四人。老拙ハ少食ナリ。朝夕粥ヲ食シ候ハ。津ヨリ被贈候四石七斗ニテ。大抵ハ足リ候。寄宿之人々ハ。買米ナレハ。米價ニ應シ。寄宿料増シ可申候。此節白米二百七匁ニテ。官ヨリモ兩度窮民ヘ米錢給リ。町家ニモ追々施行有之。冬分ハ貧民モ餓死ヲ免レ可申候。乞兒ハ先月ヨリ街路ニ餓死ス。先月下旬。一日ニ二十三人。町々ヨリ官ヘ届申。大坂エ諸國ヨリ米買ニ出シ候處。江戸米乏ク候故。江戸積之妨ニ成候故。他國エ賣候事。嚴敷禁止。京町中

へモ。各窮民ヲ救ヒ可申。自分ニ米ヲ買蓄候ハ。堅ク御禁シ。天明午年冬。京白米百三十石。翌未年四月頃。二百石ニ上リ。六月ニ二百五十石迄上リ候。今年ハ最早二百石ニ成候へハ。來年ハ如何程ニ相成候歟。計ラレス。金子出シ候テモ。米無之ニ到ラン歟ト。人々米ヲ蓄へ候心ニ相成候。老拙モ二三石モ買置可申ト勸メ候人有之候へ。官ノ禁止ナリ。愚意ニモ。夫ニテ彌世上米少ク。價益上ルへク存候間。此上天ニ任セ可申ト存候。拙家少人數。寄宿人ハ計ヒ方モ可有之ト。心ニ策ハ定メ申候。豊岡渡邊ヨリ。先月書狀來リ。米價百六十石ニ賣人無之。職人失業。麥熟迄之食無之。甚心配ト申來候。舟木ヨリハ寒中見舞之書狀未來候。定メテ心配。救荒之政如何ト案シ候。津藩モ日々窮民ニ粥ヲ施サレ候由。定メテ租稅ハ。家中へ俸祿減セラレ候割ニ。免セラレ候ト案シ候。何方モ大抵可然候。若州侯家中ハ。頼扶持ト先頃ヨリ承リ及候。如貴諭ニ二分之免ニテハ。出ルハ大ニ減シ。入ルハ少ク減シ候ト見へ候。御勝手詰リ候故ニテ。是モ不得已之事。有司苦心察シ申候。刻薄ナルモ恕スヘキナリ。

一貴家佃人へハ。許多ノ租ヲ免シ。官へハ許多ノ稅ヲ納メ。御窮窮之段。委細承リ。御心配察入候。官へハ願書御出シ。半分ハ御開届ニ成リ。先夫ニテ形付候。下作人之處置六ヶ敷。御心得如何ト御尋被下候。愚意今年ノ大凶ハ。關東御治世已來之事ト。何方ニテモ申候へハ。上ハ大公儀ヨリ諸侯。下萬民迄。皆心身ヲ苦シメ。災難ヲ免レス候。奥羽甲信ナトハ。四年前ノ時サへ餓死多ク。況ヤ今年ハ

餓死多キコト知ルヘシ。天明ノ時ニモ。京師ニ餓死之者數多アリ。況ヤ今年ヲヤ。諸國貧窮ノ者ハ。餓死ニ至ルヘシ。然ラハ餓死ニ至ラサル者ハ。各家ヲ傾ケ。財ヲ損シ。力ノ及候程ハ。窮民ヲ救フヘキ也。假令借財出來候共。是ヨリ痛ク儉約ヲナシテ。其失ヲ補フヘシ。窮民ノ餓死ニ比スレハ。家衰へ財ヲ傷ルハ。猶幸ナルヘシ。古人ノ人ノ難ヲ救フ者ハ。我財ヲ損シ。家ノ貧キヲ不顧。況ヤ此大凶ノ年ヲヤ。此覺悟ニテ。御處置可被成候。所謂爲仁不富。此ハ道理ニテ言ヒシ也。扱又事務ヲ以テ論セハ。世事ニ練磨セル者云。凡事ハ人心ノ服スル所ヲ。始ニ能ク計リ考へ。一決シテ處置スヘシ。衆人心キタナク。少ニテモ出財少クセント色々ト計レ。只心ヲ勞シ。日ヲ費シ。人ヲ頼候ガ。其上ノ損ニテ。人心服スルノ場ニ到ラサレハ。事濟不申候。龍溪先生ノ父ハ俗人ナレト。聰明ナル人ニテ。家ヲ起ス。嘗テ先生ニ云。凡事ニ臨マハ。大損アリト覺悟スヘシ。俗ニ云。深クトリテ淺ク渡ルナリ。今年ハ最此覺悟アルヘキ也。漢土ニテモ。凶年ニハ貧民多暴。大家ヲ毀テ財ヲ奪候。歷々書ニ見エ候。此方ニテモ天明ノ時。及先年播州。今年甲州。大騷動アリ。カ、ル災難ノコトヲ思ヒ。深クトリテ淺ク渡ルヘキナリ。人心ノ服スル所ハ。天地ノ心ナリ。是ニ安ンスルカ君子ノ心ナリ。其他ニ知慮ナシ。世上ヨリ見レハ。無策ニ似タレト。是理務ノ當然ナリ。當年春。一少年云。明春ハ將軍宣下アリ。將軍宣下アレハ。德政ノ令下ルト申候者有之。然ルヤト。余云。足利時代ニハ德政ト云コトアリシト聞候へ共。德川家ニ左様成例アルコト不聞ト答へ候。然レ。レ。

余心底ニ。當時諸侯困窮ナレハ。萬一此令出シテ計ラレス。然ル上又今年ノ凶荒。諸侯益困窮。此令アランモ彌計リ難シ。老拙近年少々餘金アリ。津藩ヨリ出入扶持モ。老拙生涯ナリ。家産ナケレハ。死後妻ノ衣食ノ爲ニ貯ヘ。門人一兩輩ノ世話ニテ。外人へ借附置候。若德政ノ令下ラハ。老拙一錢ノ貯ナク成可申候。然レ共老拙存生ハ。津藩ノ俸米。諸子ヨリ被贈候祝儀ニテ。飢寒之患ハ無之候。妻ハ里方之親類有之候ヘハ。老拙身後ハ。夫エ話シ候ヘハ。難義モ無之ト。竊ニ覺悟ヲ極メ候。是モ深クトリ候覺悟ニ御座候。夫故門人中ニ此節家宅普請ニ付。又ハ米ヲ貯ヘ候ニ付。金子ヲ乞候人々ニ皆借シ候。愚意ニハ。自然左様之事アラハ。他人ニ與ヘンヨリ。門人ニ與フルニシカスト存候。イツレ今年ノ大凶。來年穀登候迄ノ所。世上ノ事如何難計候。深クトリ淺ク渡リ候ハ、幸ト存候。酒モ高直。諸色皆然時節柄故。朝夕食粥。家内益儉約致候ヘ。寒氣之節ナレハ。不相替毎日三四度飲酒。爲世憂候ヘ。自分ハ少モ憂心無之。尙保時年。世上之形勢。此後如何可見申哉ト存候。一尙書。清人ノ諸注。尙披閱致居候。黒田瀨川等。四書ノ諸說集成。書寫手傳。上木可致ト被申候ヘ。愚意ニハ履軒彫題等ヲ書拔タル書入レ。別ニ上木モ無用。眼氣衰ヘ候ヘ共。老拙一分發明ノヲ追々書ツ、。黃氏日抄。顧氏日知錄ノ如ク。仕立可申ト存候。其間ニモ色々隙入有之。經史質疑ハ校合ニ懸リ不申候。中村氏モ領内凶作。心配多キ趣ニ御座候。昨年皇清經解全部。千四百冊百八十種舶來。其中ニハ是迄舶來。老拙モ讀ミ。拙家ニ藏候書モ有之候様子ニ候ヘ。未見聞書多クト

案候。津藩ヘモ此節五十帖ヲ得候ト申來レハ。全部ニテハ無之ト察シ候。春ハ追々借シ可申トノ儀ニ候。尙又諸書讀候テ。追々著述可致候。

一如貴論。今年ニテ諸國政事ノ美惡。人才之有無モ知レ申候。左候ヘハ。人々之處置ニテ。才德モ知レ候。有志者可勉勵之時ニ候。老拙モ前文之覺悟ニ候ヘハ。見聞所及救窮可申存候。

右 丙申十二月十三日答教。中後數條略之。

一老拙佐伯等ニ理學ヲ講究勸メ申候。當時ノ學者。宋學ヲ立居候ヘ共。性命道德ノ義ハ。一切不知。徒ニ詩文ノミニ盡心候。夫故ニ古學ノ說ヲ聞候テモ。理學ニ較ヘ。平易正實ナルヲ辨スルコト不能候。津藩ノ川村貞藏モ。今般初學ノ者ニ。先宋學ヲ說キ聞セ。大抵ヲ會得サセ不申候テハ。古學ノ平實ニシテ無癖ノ美ヲ知ル事能ハスト。爲是ノ故也。足下ノ如キハ。既ニ古學ヲ明ニ信スレハ。理學ヲ究ルハ餘事ナリ。爲モ可ナリ。不爲モ可ナリ。姫路ノ松本^{一本}生。先年送余序云。論活而不害義。言大而遺小ト。コレ彼其所執ノ義アリ。余カ説。是ト異ニシテ。非ナラサルニ服ス。新發田ノ佐藤ハ。性理ノ學ヲ研究ス。然レモ余カ九經談ノ評。經學文章ニ益アリト云。此兩人ノ如キヲ親近シテ教諭セハ。皆古學ニ歸スヘシ。詩文風流ノ學者。義理ニ昧シ。摩島松南ハ。少年ヨリ云。不好經學。タトヒ老年ニ及フ。錦城及老拙ノ學問ハ出來不申ト言候テ自畫ス。是モ性質ノ不同。末如之何ナリ。故

ニ日野公嘗曰。今之風流學者。姑舍之。更望有研究經學之人ト。公モ才子ニシテ好詩文トイヘ。又不廢經學。老拙ヲ崇信ス。松南一流ノ人ハ。經學ヲ不能爲ヲ知玉ヘハ也。一親類乞救ノ。踈族ニ候ヘハ。我ニ無餘財候テ。傳來リ候田島器物ヲ沽却シ。助力ニモ及聞鋪候。親シキ族ニテ。見捨難キ義ニ候ハ。田島器物ヲ沽テ救フヘキナリ。陽虎曰。爲富不仁。爲仁不富。古人救親族故舊。コレニ因テ貧シクナリタル。史ニ載セテ賢トス。伊勢ノ足代權大夫。文政己丑ノ春。老拙始テ訪彼人。二日留ル。其節。明年春夏之交。再遊ヲ請ハレシニ。其年ニ權大夫弟。他家ヲ相續ノ人破産。權大夫千金ヲ出シ。是ヲ救フ。養家ヘ義ヲ立ルナリ。因之居宅モ賣候テ。今ハ小キ家ニ住ス。家モ大ニ衰ヘ候由。親シキ人ヨリ承リ候。權大夫正直淳厚ノ人ニテ。怨悔ノ心無之。尙爲人ニ盡心樂善。一昨年ヨリ去夏迄モ。飢民ヲ救候事ニ打懸リ被居候。凡如是之事。其事各不同。タトヘハ其親族ノ貧窮放埒ヨリノナルト。患難相續。其人罪ニアラサルトノ別モアルヘシ。又於我亦各有所守。先業ヲ能ク保ツヲ主トスルアリ。仁ニシテ損己救人ヲ主トスルアリ。我身無用ノ奢ヲナシテ。親族故舊ノ難ヲ不救。保家ヲ以テ口ニ藉クモアリ。此等ノ處置ハ。平日ヨリ義理ヲ明ニ辨ヘ。其時ノ宜ニ從フヘキナリ。預メ一偏ニハ定メ難シ。先日モ川村貞藏云。孟子ニ。好名者能讓千乘之國。苟非其人。則簞食豆羹。亦見於色ト。我輩讀此章。深耻於心ト。老拙云。余モ亦常愧之ト。公義ハ明ニ論シ候テモ。私利ハ離レ難ク候。乍去足下毎々如此之事御尋候ハ。實ニ道ヲ行ハン

トノ志ナリ。甚感心致シ候。此頃。萬曆ノ末ノ儒者ノ著シ候野獲編ト云フ書ヲ讀候ニ。明末道學ヲ講スル人々モ。色々ノ姦計傾人ヲアリ。今人モ亦然リ。學問ハ學問。行事ハ行事トシ。行事ハ利害ノミヲ省ミテ。義理ヲ外ニシ候。是古今ノ通弊ナリ。來春ハ遠遊ノ約モ無之候ヘハ。御閑暇ニ候ハ。二月中頃ニ御上京可被成。面談ニ諸事講究可致候。三月節供後ニ成候テハ。遠遊ハ不致トモ。近遊可致ト存候。

右 乙未十二月十日答教。前後數條略之。

梅雨未霽。時氣不揃ニ候處。貴家愈御清寧可被成御入奉欣喜候。兒島生上京之節。貴書被下。忝奉存候。下谷集三冊御示被下。致熟覽候。是迄佐善氏之事。未承及。始知其學術醇粹。其識卓越。不堪仰慕候。其疑宋儒。論藤樹學。疑孟子。論喪制セラレ候處。悉愚見ト合候。其答人ラレ候條々。誠ニ有用之實學ニテ。熊澤之集義外書之類ニ候。熊澤。藤樹之弟子故。猶王學之弊ヲ承候。此翁之說ハ。仁齋ト同ク候テ。孟子ノ說ヲ駁セルハ。仁齋ノ及ハサル所ニ候。拙子幼年手島翁ニ從ヒテ。石田氏ノ心學ヲナス。其說陸王ニ類ス。其徒會シテ議論切磋ス。無學ノ輩。心性ノ空論ナレハ。少長シテ厭心生シ候。世儒ニ從ヒテ書ヲ讀ミ。遂ニ古今諸儒之說ヲ歷覽シテ。古學ヲナス。然レモ手島氏ノ徒ハ。名利ヲ離ル、事ヲ主トシ。朋友互ニ身ノ誤ヲ正シ。患難相救フ。讀書ノ人ハ。名ヲ求メ。徒ニ記誦辭章ヲ事トシ。師友朋友ノ間モ。輔仁ノ益無シ。是一般ノ風儀ト成テ。儒者ハ只文藝ノミノ師ト成候。故ニ五年前大和ノ一藩士來テ余ニ問。養子タルヲ數年。養父老テ致仕セントス。養家多難ト雖モ。養父罪無シ。是ヲ棄テ歸ルハ。不義ナリト存候。實父ヘ斷候處。實父大ニ怒リ。父ノ慈ニ背ケハ。義絶スヘシト云。某ハ女子ノ嫁シテ夫ニ從ヒ父ニ從ハサルノ義ト存シ。實父ト義絶ストモ。養

豬飼敬所先生書柬集卷二

川村氏

梅雨未霽。時氣不揃ニ候處。貴家愈御清寧可被成御入奉欣喜候。兒島生上京之節。貴書被下。忝奉存候。下谷集三冊御示被下。致熟覽候。是迄佐善氏之事。未承及。始知其學術醇粹。其識卓越。不堪仰慕候。其疑宋儒。論藤樹學。疑孟子。論喪制セラレ候處。悉愚見ト合候。其答人ラレ候條々。誠ニ有用之實學ニテ。熊澤之集義外書之類ニ候。熊澤。藤樹之弟子故。猶王學之弊ヲ承候。此翁之說ハ。仁齋ト同ク候テ。孟子ノ說ヲ駁セルハ。仁齋ノ及ハサル所ニ候。拙子幼年手島翁ニ從ヒテ。石田氏ノ心學ヲナス。其說陸王ニ類ス。其徒會シテ議論切磋ス。無學ノ輩。心性ノ空論ナレハ。少長シテ厭心生シ候。世儒ニ從ヒテ書ヲ讀ミ。遂ニ古今諸儒之說ヲ歷覽シテ。古學ヲナス。然レモ手島氏ノ徒ハ。名利ヲ離ル、事ヲ主トシ。朋友互ニ身ノ誤ヲ正シ。患難相救フ。讀書ノ人ハ。名ヲ求メ。徒ニ記誦辭章ヲ事トシ。師友朋友ノ間モ。輔仁ノ益無シ。是一般ノ風儀ト成テ。儒者ハ只文藝ノミノ師ト成候。故ニ五年前大和ノ一藩士來テ余ニ問。養子タルヲ數年。養父老テ致仕セントス。養家多難ト雖モ。養父罪無シ。是ヲ棄テ歸ルハ。不義ナリト存候。實父ヘ斷候處。實父大ニ怒リ。父ノ慈ニ背ケハ。義絶スヘシト云。某ハ女子ノ嫁シテ夫ニ從ヒ父ニ從ハサルノ義ト存シ。實父ト義絶ストモ。養

父ヲ棄テジ。養家多難ニテ仕ヘ難クハ。養父母ヲ奉シテ致仕シ。如何様ニモシテ孝養セント。心ヲ決シ候ヘ共。異姓ノ養子タルコ。聖人ノ道ニ不叶ト聞及候故。實ニ聖人ノ道ニ合ハサル。異姓ノ養子ニ成テ。實父ト義絶スルコ。心濟不申候間。此一儀審ニ聞候而。決定致申度ト。拙子往年書候異姓主祭祀辨ヲ示シ候故。彼士即其志ニ從ヒ申候。實父ト義絶シ。養父致仕。家祿ヲ襲シ。其後妻ヲ娶リ。今春男子出生。養家ハ悅申サルレト。自分今ニ於テ實父ト隔絶。憂ニ不堪ト。當春申來リ候。此士ノ初來候時。一門生曰。身ノ進退ハ。人相ト窺者ニ問フヘキ也ト。拙子云。夫ハ利害ヲ問フナリ。此士養家ニ留リ居レハ苦シク。歸レハ安キハ。目前見エタリ。余ニ義ノ當否ヲ問フテ。利害ヲ顧ミサルナリト云候。方今ノ人。門生ノ意見ノ如ク。萬事利害ヲ主トシ候故。儒者ニ問候ヲハ。勝手惡クト思ヒ候テ。文字ノ外ニ尋不申候。又三年前。有人同僚ト不平ノ事アリ。極密ニ拙子ヘ來リ尋候。拙子愚見ヲ申遣セシニ。其答書ニ。四五年來。讀書ニ付テ質疑致候ヘトモ。身分之事御尋申候ヲ恥テ。遲緩致シ候。今般御教示ニテ。胸中豁然。早ク御尋不申ヲ悔ト申來リ候。其翌年役替。他人交代。其年内ニ。交代ノ人不平ニテ。相和セス。互ニ訴爭ニ及フ。因テ兩人是迄爭ハサルヲ他人稱シ候。此兩士ノ間ハ。誠ニ空谷ノ跫音ニ候。是全ク吾輩不徳ニテ。人ニ信セラレヌ故ニ候ヘ共。藤樹。熊澤及佐善氏ノ時代トハ。學フ人ノ志モ違ヒ候。今日詩集詩話等ヲ年々板行シテ。加様ノ實用有益ノ書ニハ。目モ下シ不申候。足下此書ヲ今儒ノ撰ニ異ニ候拙子ニ示シ玉フコ。足下ノ志。記誦詞章ニ止ラサルヲ見

ルニ足レリ。足下天性淳良篤實。加之以學。幸在教官。以佐善氏之志爲志。則上有補於國家。下不負於聖人。其鄙意ニ合ハサルモノ。來意ニ從。標書致シ。返璧イタシ候。是不黨同也。拙子モ一本ヲ寫シ置申度候ヘ。此節筆者無之。他日再借可致候。爲人後辨。淨寫ハ遠方ヘ借候故。草稿致呈上候。右申入度如此御座候。餘期後音候。不具頓首

五月二十九日

仁科白谷氣象之御評。實如此御座候。舊冬摩島云。白谷近來罵人。故ニ人或避之。余亦告戒セントス。先生戒之ト。老拙見白谷。述松南之言。且戒之。白谷微笑云。余亦常戒松南以氣節。彼ト我トヲ搗マセ候ハ。宜キ人二人出來候ト。京師ノ風流ニテハ。松南ヲ長者トスレト。余ハ深取白谷候。

二月十一日

五日之手札ニ。教諭所之事申入候。九日ニ北小路來リ。中元後二十三日ニ講釋始メ。毎月兩度。北小路俗人ヲ集メ。六論衍義ヲ講シ。其他十二日。諸司代儒者海野豫助。赤沼太郎。及ヒ牧善介。自分。四人講釋シ。老拙モ一席講釋ニ出候事頼マレ候。其後追々他人モ一席ツ、頼候積之由。先便申入

候通。白谷へ肯置候へハ。當月二十五日朝出席。白鹿洞學規一講ト答へ。然レハ其旨諸人へ沙汰可致ト申歸ラレ候。先達テ發起。社中ヨリ老拙門人へ向ケ頼候趣意ハ。北小路ニテハ手薄ク。松本愚山及老拙ヲ頼ミ。毎月六度モ出吳候様ト。是ハ北小路之志ニアラス。其趣向ハ止ミ。右之通ニ成候ト見エ候。世間ノ評判。銀主ハ追々斷候而。他ノ儒者モ皆不應様子ナリ。諸司代儒者ト善介ハ町奉行。學校ニテ北小路ノ助教ナリ。故ニ四人ニテ講釋セラル、ト見ヘ候。何レモ人望無之。毎月十二度之講釋施講ニテモ。始終聽衆恐クハ有間敷。扱々氣之毒成様子ニ存候。老拙モ見合居候ハ、出席モ不致候共宜候振合ニモ成可申候。折角先頃ヨリ頼マレ。因之響應ニモ成候事故。速ニ出席イタシ候。

七月十六日

當月初。頼山陽他へ贈ラレ候文二首。老拙へ相談被致。愚意少々削正致候處。甚氣ニ入。從被申。老拙筆削之筆稿ヲ并テ其人ニ被贈候。老拙筆削ヲ不隱。磊落之氣象。感入候。彼水亭ニテ共ニ一醉セント申請候故。八日ニ參リ。未刻過ヨリ二更迄。相對シ舉杯。和漢之史ヲ談シ候。經學者多ク不通人情。老拙事情ニ通スト。甚被賞候。外史并此節ノ著述ノ通議。一閱ヲ被請候。内人モ被出響應。大ニ親マレ候様子ニ御座候。老拙往年ヨリ彼人ヲ知己ト存居候處。果然リ。京師ニテハ可共語者此人ト存候。

當月十日頃。山陽吐血セラレ。自身ハ大ニ懼レ。期死居ラレ候へ共。旁觀ハ元氣モ不易。左ハ有間舗。皆々申サレ候。一日老拙訪候處。追々快方ト被申。元氣モ克談話被致候。此後保養被致。却テ保壽可被申ト存候。膳所ノ人齋藤出雲。近來山陽ト甚親敷。通議ヲ被贈。尙又外史モ可贈ト約被致候。先日齋藤方ニテ通議一覽致シ候。山陽ハ誠ニ東坡之流亞。當世之才子ト存候。彼人モ眼空一世。四月二十八日夕被招候テ。右齋藤同伴ニテ參リ。談話致候。其節老拙今時之儒者如何ト問候處。龜井元鳳ハ。西國之田舎漢。古賀侗菴ハ。江戸之田舎漢。皆天下之理勢ニ不通ト。愚意ニモ此論至當ト存候。一昨日モ暫時談話。留メラレ候ヘ。其夜ハ講釋有之候故。近日又緩々ト可參ト申歸リ候。來月月夜ニ又訪可申候。

六月二十二日

南遊之事。九月十七日。發足。南部ヨリ龍田法隆寺當麻歷遊。十九日。八木ニ至リ。四日逗留。谷新介ト晝夜筆話。彼藏書ニ富候上ニ。大坂書林ヨリ。金銀ヲ不厭。新渡之書籍借覽致候故。其博覽強記ハ。老拙ニ勝ルヲ數倍。所問之事。多クハ老拙ノ未讀書ナリ。彼云。一兩年前迄ハ。頗輕先生。近來稍々畏先生之心生。是僕學問之所進也ト。歸リ候日。向渡邊生_{彦繼云是相伴門生}。曰。先生天分勝人。僕雖讀書萬卷。不可及ト。彼二十四歲。未娶妻。家内乏人。因之老拙ヲ父兄之家ニ留ム。

新介生來之樂事ト悅候故。兩親及兄モ懇ニ接待シ。二十四日ニ彼家ヲ出。吉野へ遊。皆々惜別云。此地去京僅十九里。待再遊ト。若シ彼ノ見識未到候ハ、此遊老拙益爲彼所輕視。幸哉。兩聾彦繼云新介兩耳全聾。先考ハ一耳聾。故曰兩聾。筆話四日。一奇事ト云フヘシ。其間ニ齋藤彦繼云是亦相伴門生通稱筑前渡邊ハ三輪初瀬多武峰へ遣シ候。二十五日ハ吉野瀧廻リ。二十六日。五條へ出。森田文作懇ニ留メラレ。七日逗留。五條學校佐野周藏阿波人。貫名ト弱年同門。彦繼云。本注。方へモ被招。彼方ニモ一宿。小林道隆ト云醫師。是ハ江戸多紀氏ト親交。好博覽。當時谷新介ト親シク。清朝諸儒之文集。舶來不殘讀居候。森田方へ度々來リ。學話ス。其他ニハ可與語之人モ無之。吉野川ニ漁シ。金剛山ニ登リ。十月五日。紀州切畑林大藏方へ到リ。六日。七日。大雨ニテ。吉野川大水。無渡舟。四日逗留。十日ニ若山へ出。大藏叔父修道方ニ寓ス。修道ハ三十六年前。京師遊學。老拙方へモ入門。半年計リ講釋ニ出候。近年大藏出京ニ付。書通致シ。且其著述之醫書ヲ校訂ヲ託シ候故ニ。懇々接待ス。筑前十二日ヨリ在田出雲。筑前父之實家へ行。十四日ニ若山へ歸リ。是ヲ待合逗留スル内。少々風邪ニテ。出遊ニ不宜。大藏之師野呂九介。仁科カ親友ニテ。若山ヨリ六里。南湯淺ニ居ル。兼テ老拙來候ハ、面會ヲ期候故ニ。大藏早速知ラセ候。折惡敷病氣ニテ不來候。若山學校ハ當時寂寥。好學問家老下條伊豆守殿。近年隱居被仰付。此節山鳥石見守殿。山中筑後守殿。隱居被仰付候。是モ好學ノ人也。其外ニ要路ニ居候人々退役。藩中騷々敷事有之。夫故他處之者被招出會之事。藩中慎ミ居ラレ候。齋藤出雲。從兄高橋雄甫ト。修道方へ

一度來見。當時日勤無暇ト斷リ候。出雲若年ヨリ懇意ノ野間久左衛門。先年松坂奉行。當時ハ勘定奉行。此方へ筑前參候處。是モ御用ニテ勢州へ下リ候。仁井田茂一郎。先達テ督學ニ任ス。近年ハ侍講ニ轉ス。是老儒ニテ。出雲ト親シ。此人モ此節御用ニテ。熊野へ行。折惡敷藩中之人々ニ不得出會。十五日和歌浦へ遊候。誠ニ勝景。歸路ハ船ニテ觀月。同遊十人餘。紀三井寺ニテ住僧乞書。觀海ノ二字ヲ書ス。筑前及修道ノ季子。書畫ス。是日快晴ニテ。實ニ壯遊ニ候。十六日ニ岸恒三郎順藏ノ子ナリ來見。同伴ニテ山本源五一本太郎へ行。折節出懸居候ヘ。暫ク筆話ス。年齡少拙子二歳。老衰其於拙子。伊藤學ニテ。篤實ノ人ナリ。然レモ卓見ハ無之也。十七日夕。恒三郎方へ被招。學校掛之儒者。赤城惣太郎來會ス。是ハ壯年有志ノ人ト見ヘ。數條筆問ス。恒三郎ハ其父ト同ク。書畫風流ヲ翫ト見ヘ候。其他ニハ出會ノ人モ無之。安藤帶刀殿儒者某。兼テ有意於拙子。上京シテ面會セント言候。一昨年死去。存命ナラハ。必來見セン。甚殘念ト。大藏云候。是ハ豪氣有之。白谷モ親シキ様子也。十八日。岸和田へ出。三宅門人。及友人懇留。論語一貫。孟子浩然之氣。論性章。中庸費隱。大學格物。及書經天文等。朝夕講釋。皆大悅。二十五日。岸和田發足。諸人惜別。何方ニテモ老拙饜饒待再遊。八十ノ壽筵ニ必上京セント。若如人言。大幸ニ候。大坂へ出候テ。大鹽其外相識ノ方ヲ尋ント。兼テ存候ヘトモ。意外長旅ニ成。歸里ニ心急キ。其夜舟ニテ。二十七日之朝致歸宅ニ候。先日贈被下候唐壺ハ。林修道へ贈リ。何方ニテモ揮毫。三宅云。書ト酒ト上リ候。南遊之土産致進上度候

ヘトモ。吉野葛。蒲穂子等ニテ。可呈物無之候。若山城中大夫方之屋敷。甚立派。城下之町々。誠ニ南方之大都會ナリ。御城ノ堀。水鳥泛候テ見事。毎年此節。貴藩ニ出テ日々御學校ニ出候節。水鳥ヲ見候事。存出シ候。

不具頓首

霜月十八日

別啓。聿脩錄上梓既成候哉。先頃讀書之節。偶存出候。先候御序文。東陽代作。故專爲諸臣被述訓誡候ヘトモ。君侯之代言ナレハ。體上之休意。君侯深思。始祖之遺澤。戰兢保爵位之意ヲ述候餘意ヲ推シテ。諸臣ニ示シ給フ趣意ニアルヘキナリ。不然時ハ諸臣ノ心ヲ感スルヲ薄シ。東陽モ此心著サ、ルニハアラネト。下ヨリ如是イフ事憚カラレ候ト存候。然レ共此書ニ於テ第一義ナレハ。乍恐君意ヲ躰シ。如此可有義ト存候。最早刻本出來。御藩中へ頒賜被成候哉。猶未ニ候ハ。愚意之趣督學石川氏へ御申入被下度候。此事極密。市川へハ一切噂不致候。野拙局外ニ在テ申上候事。恐入候ヘ共。御草稿ヲ去年校候ヘハ。此節心附候事不申上候ハ。遺憾ニ候故。申合先日ヨリ可申入存候ヘトモ。足下御忌中故差扣居候。此節御忌モ明ケ候ト存候故申入候。

一齋愛日樓詩文集。昨年出候。定メテ御覽ト存候。當春一齋ヨリ日野公へ托シ。拙評ヲ乞候。先頃兩

三遍讀候處。此人識見有之ノミナラス。文章ニ用心力ト見エ。議論確實。文詞典雅。本邦近儒之文ニハ。希有ト存候。老拙元來詩文之才無之。不能贊一辭。然レ共。李泌論ニ忌顏真卿トイフハ。其非ト存候。其稱呼ノ未得宜ハ有之候ヘ共。當夏彼門人中村佐五右衛門。先年拙宅ニテ一面被成候人拙著逸史糾繆ヲ見セ候處。一齋云。敬所過七句。耳聾目暗。尙讀書不倦。甚可稱也。此著述大力小用。水府日本史。文詞拙。事實誤往々有之。宜論之以傳後世ト。一齋稱呼之不得宜候處。往々逸史ニ同シク候ヘ共。是ハ彼方へ申遣ニハ不及ト存候。賴山陽モ。逸史糾繆ヲ讀候テ。外史ニ如此評ヲ被乞候。近頃外史ヲ讀候處。其誤往々逸史ト同シク。是ハ諸儒ノ所不免ト存候。

此頃孟子御讀被成。仁齋仁義非性之說。御疑御尤ニ存候。宋儒以仁義爲性中之理。非孟子之旨。仁齋矯枉過直。懲噬廢食。仁義非性ト主張セラレ候事。又失孟子之旨。此義辨別明ナラサレハ。孟子宋儒仁齋三家ノ旨趣不同不分候。語孟字義仁條拙評。古學指要拙評ニ詳ニ辨シ置候。天民遺言モ可取事有之候ヘトモ。彼又仁齋ヲ難シ候趣意勝ニテ。仁齋之旨ヲ不察事モ有之ト覺居候。古今儒者各意見ヲ立候故。公平ノ說少ク候。老拙不才ナレト。此辯少ク。是日野公山陽ニ愛セラル、所。

五月二十五日

今般碑面之儀。御尋被下候。位牌ハ家内ニ奉シ候ヘハ。姓ハ不可書。墓碑ハ外ニ建候ヘハ。姓ヲ書

スヘシ。愚意ニハ。御藩中尊貴之方モ多ク有之候ヘハ。外ニ建候物ヲ君ト書候事。憚アルニ似タリ。
漢士ニテハ然ラストイヘ 歐陽公ハ。致仕後六一居士ト稱ス。川村閑齋居士墓ト被成候事。俗人ニ異ナラス。
凡他ノ例ニ異レル也 先人ノ御意ニモ叶ヒ可申ト存候。貴家ハ尊大夫ヨリ御起リ。尋常先祖ヨリ連綿ノ家トハ。親恩深ク。
御孝養。御書面之趣ニテハ。八句ニモ御及可被成ト。足下御篤實。一昨年御加増。首尾能御勤仕被
成。尊大人ニモ御満悦ト奉察候。尊大人御性質正直實義ヲ尙マレ。平生足下ヘモ御諭シ被成。今般
喪事モ。事死如事生。虚飾ヲ事トセス。喪與其易也寧戚ノ意ニテ。御執行可被成旨。誠ニ先人之
思召ニモ合可申ト奉存候。將又罔極之恩。風木之感。御心情奉察入候。此後モ尙奉先人之御誠。以
誠意奉職被成候事。終身之孝ト存候。先頃ヨリ地震ニ付。遠方ヨリ追々安否被尋候。足下ヨリ貴書
不來。足下御病後如何。尊大人御高年。御病氣ニモ有之哉ト御案シ申居候。市川氏ヘ尋候ヘトモ。是
モ様子不被存候。以書狀此方ヨリ御安否御尋可申哉ト存居候處。御凶問承リ。不堪傷心候。當年
ハ親戚舊知之死者甚多。昨夜モ密葬。衰老之野拙。尤傷心候。

八月十一日

御安靜。御中陰御勤被成候由。珍重奉存候。又々碑面之事御尋被下候。京師摺紳家ニテハ。本國朝
廷ノ禮式ニテ。

具官姓名墓ト書ス

三公ナレハ

右大臣菅原道真公墓

三位以上ナレハ

中納言在原行平卿墓

四位ナレハ

左近衛中將源義貞朝臣墓

五位以下ハ

檢非違使左衛門尉源義經墓

右之例故。堂上ニ仕フル人々ハ。有官モ無官モ。皆姓名ヲ書候。儒者醫者之類。漢士ノ制ニ倣ヒ。
名ヲ碑面ニ書セス。隨意ニ先生トモ君トモ書候ヘトモ。是ハ畢竟制外之事。武家ニテモ。御仕官ハ君
ノ字憚アルヘキカト存候テ。申入候處。果シテ議者有之候。往年一御醫。醫書ヲ著シ上木シ。皇朝
并ニ關東ヘモ献上ス。其子三人。序跋ヲ書テ稱美ヲ極ム。余竊ニ云。草莽ノ醫者ノスルコトハ。論ニハ
カ、ルマシ。如此ノ書ヲ献シ。若シ高貴ヨリ其子ニ。汝カ父ノ著述ハ如此ナリヤト御尋アラハ。子
タル者。如斯誇稱スヘケンヤ。此等俗情ヲ以テ察スヘキナリ。學者ノ所爲。往々俗情ニ違フコアリ。
失禮ナリ。碑面ノ一事ニ限ラス。諸事此意ヲ用フヘキ也。
當時仕ヘ候テ教授モセサル人ノ碑面ハ。漢士ニモ。無官ノ人ハ。姓ト字ト書クモ有之。世間通式ノ
如ク。

萱野三平墓トスヘシ

別號或ハ字アル人ハ。ソレヲ書シテ可也。老人ナラハ。別號ニ翁ノ字ヲ加テ可ナリ。子思ノ中庸ニ。祖父ヲ仲尼ト字ニテ呼ヘハ。字ヲ書ク。失敬ニハナラス。本朝ノ式ノ實名ヲ不諱トハ自ラ別ナリ。

愚意如斯ニ御座候。

八月二十四日夜

今般老拙東遊。折ヨク貴藩文教ヲ崇ル、時ニ逢ヒ。國學ニ於テ二典ヲ講シ。山田足代氏興學ノ志アルニ投シテ。宮崎御文庫ニテ。論語ヲ講スルコト。老後之大幸ハイフニモ及ハス。孟子ノ玉フ行或使之止或尼之ト。去冬足下示シ玉フ文稿ニ。觀漁ノ記アリ。拙家寄寓之書生。淡路林世寧。偶然是ヲ見テ。我郷海中ニアレト。海深クシテ。如此ノ漁ナシ。是誠ニ奇觀。羨ニ堪タリ。小子年近四十。未タ伊勢參宮セス。先生明春參宮セヨ。小子從遊スヘシト。痛ク慫慂ス。余モ七歲之時參宮シ。シカト宮居ヲ記セス。近年東遊ノ志アレハ。三四月ノ交ヲ期トシ。約ヲナス。林生臘月ノ半歸省シ。正月ノ末上京セントイヒシカ。故アリテ三月ノ初ニ至リテモ。尙來ラス。余四月ノ初ハ。先人ノ忌日アリ。且親類ニ少ノ事アリ。因テ四月十日過ヲ期トシ。其間ニ林生モ來ラント待シニ。林生三月半ニ至リテ。其妹ノ病ルヲ伴ヒ。是ヲ他家ニ寓シ。一醫ニ托シ。是ヲ看病スレハ。其約ヲ課ス能ハス。此

月十二日ニ。縁類ノ者。參宮ニ托シテ家ヲ出。竊ニ江戸ニ赴ク途中ヨリ。余ニ書ヲ贈リ。其實ヲ告テ。家事ヲ托ス。願望ノ事アリトイヘトモ。若年ノ舉動。何分無分別。速ニ歸ルヘシト。江戸ノ縁類ヘ申遣サント。一縁類ト相談スレハ。此節出遊モナラス。同伴ハ違ヒ。折ハアシク。足下ヘ待玉ハサル様申遣サント思ヒシニ。彼者途中ニテ心地アシク。石藥師ヨリ引返シ。十六日之夜歸リヌ。十八日ニ黒田生 五平治 來リテ。東遊如何ト問フ。余林生ノ約ニ違フヲイフ。黒田イフ。小子モ伊勢ニ未遊ハス。請從遊セント。即日黒田ヲ伴ヒ。膳所ニ赴ク。彼縁類余ヲ送りテ。白川橋ニ至リテ別レヌ。其夜黒田氏ニ宿ス。黒田生云。彼縁類之者。小子ニ托シテ。先生ニ請テ江戸縁類ヘ書ヲ遣シ。其所望ヲ賛成セヨト。其事黄白ニ渉ル。余膳所ヨリ京ヘ書ヲ遣シ。傳言ニテハ事分ラス。四月之初。歸京ノ上ニテ談セントイフテ。二十一日遂ニ膳所ヲ發足。心中思フ。此事丹波ヘ下リテ。縁類ニ談セサレハ。一存ニ行ヒ難シ。出京ノ前。是ヲ聞カハ。東遊ハヤムヘシ。既ニ出レハ。ヤムヘキニアラス。西歸ノ後。又日ヲ費スヘシト。片心ニ懸リヌ。既ニシテ山野ノ風景。心ヲ慰メ。是ヲ忘レヌ。黒田ハ幼ヨリ外ニ育テ。艱難ニ習フ。故ニ壯健ニシテ。ヨク余ヲ看護ス。林生ハ富豪ノ處士ニテ。學問ハ黒田ヨリ老タレト。余ヲ看護スル事。黒田ニ及フヘキニアラス。林生來ラサルニヨリテ。黒田ヲ伴フ事。意外ノ幸ナリ。二十三日ノ夜。足下足代ノコトヲ語り玉フヨリ。及時ニ逢ントオモフヨリ。足代ヲ訪ヒ。及時ハ折アシク臥病ニテ逢ハネト。足代及諸友ヲ得タリ。是モ意外ノ幸ナリ。貴藩ニテ思ヒヨラス多

ノ白金ヲ賜リ。京ニ歸リシニ。十日ニ彼縁類來ル。余其事ノ非ヲ正シ。且此節江戸大火。縁類モ類焼セリ。是ニ黃白ヲ乞フトモ。何ノ益アラン。其用フル所ヲ問ヘハ。去冬用不足。余及外人ニ借金アリ。江戸ニ乞ヒテ是ヲ還サント。余云。余カ借有所ハ。是ヲ責メス。其餘ハ余是ヲ助クヘシ。サキニ汝途中ヨリ歸ラス。江戸ニ至ラハ。災ニ逢テ難儀シ。余モ亦是カ爲ニ東遊ヲヤメ。出門ノ前ニ。余ニ委曲ヲ談ラハ。又東遊ノ興ヲ妨ケ。而シテ余汝ヲ助クルノカナシ。汝出門ノ後。是ヲ云フヲ以テ。余東遊シテ此賜ヲ得ル。コレ天ナリ。何ノ惜ムコトアラン。余カ幸ニテ。汝ノ幸ナリト。彼大ニ喜ヒ。余モ亦丹波ヘ行。江戸ヘ書通ニテ勞ナク。猶彼江戸ニ行クノ志ナキニアラネト。其一事スメハ。他事モ外ヨリ止ル者アリ。余亦是ヲ止ム。必止ムヘシ。春來駿府ニテ。活字板ヲ以テ西河折妄ヲ仕立ント謀ル。二十五日ニ書來リテ。百部ニテ代金十五兩。手附トシテ半金ヲ下スヘシトアリ。此書畢竟老拙之癖。他人ヲ累スヘカラス。歸後即日七金ヲ駿府ニ下シ。當年ハ別シテ大費アリテ。家計甚困。意外之恩賜。忽目前ヲ救フ。是モ又大幸ナリ。余カ東遊ハ。足下ノ叙事ノ妙動人ニ起リテ。林生去レト。黒田生來リ。足下ノ因ニテ足代ヲ訪ヒ。縁類ノ出言後レテ。東遊ヲ妨ケス。皆天ナリ。孟子ノ言。豈不信乎。昔人イフ。一飲一咏皆有命。余愚ニシテ。世事ニ拙シ。萬事天ニ附ス。此般不意ニ天助ヲ得ル。幸ナルカナ。余耳目疎ニシテ。家ニ在テモ。過半ハ事ヲ知ラス。況ヤ旅行ヲヤ。猶天幸多カルヘシ。御一笑。

拙子生來薄命。不如意者十八九。夫故常々不都合ニテ損失アル事ヲ。當リ前ト覺悟シテ暮シ來リ候。然ルニ今年貴國ヘ下リ。圖ラス貴藩及山田ニテ盛待ニ遇候事。生來ノ奇遇ニテ。且家ヲ出候都合。誠ニ天幸ト存候故。委細書認メ。御笑種ニ呈シ候處。老拙安命樂天。無名利之心ト。過當ノ御稱贊。致愧報候。因テ存出候前書尙未盡候。黒田兩三日前ニ上京不致候ヘハ。老拙東遊之志不決候。廿一日ニ江戸大火。膳所御屋鋪類焼。二十五日膳所ヘ飛脚來報有之候。老拙二十一日朝膳所發足致シ。兩三日遅ク候ヘハ。黒田他行ハ出來不申。同伴無之候間。東遊止メ申候。是モ誠ニ天幸ト存候。駿府活字板之事モ。舊臘彼地門人ヨリ。書狀ニテ申來候。書林之積リ書ヲ取落シ。一切様子分ラス。春來申遣候書林注文。直段書來テ。老拙所存申遣シ。其返事。老拙發足後ニ來リ候。是モ左様之間違ナク。發足以前ニ。直段相極メ。手附金ヲ渡スヘク候ヘト。老拙金子無之。門人エ談シ。借候テハ。遠方若違變アランカト。狐疑ヲ生シ申ヘキニ。不圖ノ賜ヲ受候故ニ。損失ノ顧慮ナク。歸後即日ニ金子下シ。此事成就。是モ又天幸ニ御座候。老拙平生何事モ天ニ任シ。燈油之類。此節下直。買置候ヘト進メ申人有之候ヘトモ。價ノ高下時ニ任テ。一切買置不致候。然ルニ當二月ニ米屋來リ。米價涌騰。段々米少ク。高價ヲ出シ候テモ。米ヲ得ル事ナラサル勢ニ見ヘ候。白米買置可申ト勸メ申候。天明年中大飢饉之事モオモヒ出シ。當時四五人寄宿モ有之候ヘハ。難儀ト存。白米貳石買置候處。五六日立ト。米價下リ。三月節後百五匁位之相場ニ成候。其後兩人歸省。又麥五斗買置候故ニ。拙家今ニ到リ。

百拾九匁ノ米ヲ食シ候。寄寓生申候ハ。米屋ノ心切ラシク來リ勸メシハ。價下リ申ヘキ勢故。己カ損ヲセサルヤウノ謀ナリ。先生是ニ誑サル、ハ不智ナリト。此事老拙平生ノ守リヲ易候故ニ。ケ様之愚ニ至候ト。拙妻ト相話シ。自笑致シ候。拙妻モ了簡ヨキ者ニテ。平生萬事怨悔ナシ。故ニ米屋ヲ咎メ候心ハ。聊モ無之。彼智ニテ我愚ナリト。一笑ニ附シ候。拙妻又申ハ。米屋ノイフ如ク。米價此上高直ニナラス。此方ニ損ニテ濟候事幸ナリ。悅フヘシト。生質ノ美。愚婦ナント。自然ト心術常ニ拙子ニマサリ候。拙子亡母墓表ノ文。四辻亞相ニ乞ヒ。往年建候。廻リ六間石垣致シ度存候。隣ニ儒者ノ墓比々有之。其通ニ致シ候ヘハ。五六金モ入候故。其支度出來兼候テ。年々延引致候。今般石工ニ積ラセ候處。直二百匁計ニテ受合候。今日中ニハ出來可致。スヘテ年來之志ヲ遂候。是モ貴藩之恩賜ト難有奉存候。先年信州高遠門人ヨリ。諸儒之畫像設候ニ付。拙子畫像下スヘクト。數年催促。因テ原在中小兒ノ時ヨリ相識候故ニ。拙像ヲ寫サセ候。在中頗相法ニ通シ候。拙子餓死ノ相アリ。其極貧困窮ニ至ラサルハ。心術ノ正シキニ依ルトイヘリ。拙子ハ其薄命ハ天分ナリ。極貧ニ至ラサルハ大幸ナリ。心術ノ正キハ。自信セサル也ト一笑シヌ。拙子不才且不甘因入之熱。然ルニ殘疾疲癯。不爲溝中瘠。眞ニ大幸也。十年前。入學ニ要ノ文ヲ綴リ。入門ノ人ニ與ヘント存立候。拙筆每度書候事ハ難ク。上梓シテ用ント存候ヘトモ。執筆ニ憚リ。年々徒然ニ過候。今般貴地ニテ妄リニ執筆。歸來是ニ癖付。先達テヨリ求ラレ候書。一時ニ認遣シ候。因テ入學ニ要モ淨書致シ。拙筆ニハ甚出來

ヨク候。上梓致候テ。拙キ筆遣ヒ隱シ候テハ。他人ノ代書ト見ヘ候ヘクト存シ。彫工ニ其拙キヲ失ハサル様ニ命シ候。近日出來。進呈可致候。是執筆ニ輕ク成候故。貴藩諸子之推愚ニヨルト忝奉存候。貴地發足。其夜水口藩中美濃部柳塘ト申醫家ニ宿シ候。其夜ノ事誠ニ可笑。黒田先日上京。拙荆及門生ト委細ニ話。皆々大笑致候。當時黒田ハ拙子挨拶齟齬ヲ立腹致候ヘ共。主人ハ拙子耳目衰ヘ候ヘトモ。心ハ不衰。ヨク質直不修邊幅。尙數年之壽ヲ保チ可申ト稱セラレ候。委細ハ貴面之節話說。可共ニ一笑候。先日發足之後。無用之閑談ヲ書示シ候事。悔心生シ候處。却而足下ニ棄テラレス。是亦幸ト存候故。又無用之閑談ヲ書認メ。御一笑ニ供シ候。

往年天明年中。大饑饉之年。京町奉行所ヨリ御救米所中へ被下候。其節ノ落首ニ。

公儀ヨリ鳩ノ食^クホト救米仰山サウニ年寄コヒ。當月十日。町奉行所ヨリ。極困窮之者吟味致シ可申出候。御救米可被下候ト。町中へ觸流シ有之候處。一町モ申出候處無之。四五日經テ。又心得違無之。相調可申出ト。御觸有之候ヘ共。尙町中可申出之沙汰無之候。是ハ申出候ヘハ。無相違哉之御吟味モ有之。救米出候時ハ。又町役之者。役所へ出。彼是ト隙入。費用モ懸リ。得不償失故ニ。町々往年之事ヲ言傳候故。町々各窮民ヲ救ヒ。官ヘハ不申出候也。四條戲場ハ無論。拙宅近邊町家ニモ芝居有之。富モ追々興行。是ニテハ困窮之様子ハ見ヘ不申候。貴國以西。五畿山陽山陰

四國。皆七八分之作。九州ハ豊作ニ候。東北一隅饑饉ニテ。大坂ヨリ江戸へ廻米。依之大坂之相場師。米價ヲ踊シ。播州ノ賊民。乘之爲盜。可惡之甚也。是ニ付テモ。京大坂之米市場ハ。停止シ度者也。此外ニモ三都ニハ。官許ヲ受テ民害ヲナス者多シ。竹山ノ草茅危言。履軒之文稿ニ論之。是皆世人所知ノ民賊也。然レ共此輩ハ。皆官吏之囊橐ナリ。吏ヲシテ皆々大鹽ノ如クナラハ。一朝ニシテ皆禁スヘシ。然レ共和漢古今ノ狀態皆如是。噫。

舊冬笑話ト申候。閏月二十五日ニ。白谷 仁科順藏 ト兒玉二郎同伴ニテ。寒氣見舞ニ來リ候。其頃ハ老拙ハ未病酒ヲ出シ候。乘醉白谷松南 摩嶋氏 方へ到候處。松南折節近邊ノ堤某方へ招レ行候。白谷跡ヲ追。其家ニ到ル。梅辻 春樵 在座。梅辻近來他家ニ到候テモ。手數珠念佛致シ候。白谷儒者之所行ニアラサルヲ規ス。梅辻云。儒小而佛大。故ニ然ソト答フ。白谷聲色厲ク。足下周孔ノ道ヲ學ヒ盡シ。而後儒小ト云テ可也。詩文ニ巧ナレ共。未學盡周孔之道シテ如是ハ不可ト。嚴敷論候故。梅辻閉口ス。松南挨拶シ。且白谷ニ道不同不相爲謀ノ義ヲ説ク。其座ハ夫ニテ退散ス。晦日老拙白谷へ行キシニ。白谷松南ニ與フル書ノ草稿ヲ示ス。其爭論如此。己レ述ラク梅辻モ儒者ナリ。故ニ我ニ是ヲ規ス。道同シカラサルニアラス。松南ハ梅辻ト莫逆ノ友ナリ。然ルニ一言コレヲ不規ハ何ソヤト。其書二千言ニモ及ヒ可申。儒佛ノ理ヲ論シ。議論甚大ナリ。老拙ニ一覽削正ヲ乞フ。老拙モ煩ク不能

贊ニ辭。且白谷ノ所論皆是ニシテ。松南ノ病ニ的中ス。直ニ與ヘヨト云。其書ヲ果而與ヘシヤ。松南如何答ヘシヤ。未知候。白谷梅辻ト爭論之事ハ。坐ニ有人候故。世間ニ沙汰致シ候。兒玉モ同道セシ也。其後兒玉ニ不對面候。兒玉モ當月十九日立ニテ。三備ノ方へ歷遊イタシ候。

正月二十三日

二十二史攻異。南北史迄讀申候。大史公書。元來不名史記。及天官書中。東宮南宮等官字ノ誤ト。壯年以來。野拙特見ト自負候處。錢大昕已有其說。其考索如合符節。讀書不廣候テハ。遼東之豕ヲ不免ト愧入候。錢大昕曆術ニ精ク候。此節寒甚。執筆サヘ困リ候。少シ暖ニ成候ハ。其說熟覽。珠盤ニテ當否考可申ト相樂居候。乍去獨智難周ト。拙者ノ漢初長曆律曆天官管見。宋書諸志考文等ニ考置候諸事。錢大昕見落シ候。往年宋志考文ヲ作り候節。帶屋源兵衛ニ。二十二史攻異。清儒ノ作有之ト聞ク。此等之事。其書ニ詳ナラン。無用ノ骨折セシト語リ候ニ。源兵衛。著書ハ各不同ノ者也。決シテ無用ニハ不成申候ト申候。果而然リ。眼氣益衰候ヘトモ。精神尙不甚衰。日知其所ニ不知ヲ樂申候。去冬東遊。御周旋ニテ。貴藩御藏本拜借。第一之大幸。不堪感謝ニ候。

正月十四日

今朝下谷集返璧可致ト。愚札認メ。緘封致候處。貴翰到來。御近作數編。旨正詞巧。致感誦候。然御示ノ儀故。聊加雌黃附愚見候。竹内團御聞及之通り。温厚ニテ有才。粹然タル人物ニ候處。殘念之至ニ候。其老父モ相續キ死去之由。宇都木ニ承リ候。足下御再遊之志御座候ヘトモ。尊大人御衰老侍養難欠之思召。御尤ニ奉存候。十四年前。愚母八十二テ死去。長壽ニテ久敷添居候ヘトモ。讀書ニ懸リ。侍養ハ妻ニ委シ。行届カサル事ノミニテ。于今後悔致候。愛日之誠。專一ニ奉存候。先便無用之雜談申入候處。平松氏ニモ御示シノ由。愧入候。將又司馬温公之語ヲ以テ。老拙ヲ賛セラレ候事。誠ニ以テ非ナル者ニ候。温公ハ幼ヨリ生質如美玉。其行純粹。故ニ無不可對人言者ニテ候。老拙ハ生質不美。頑劣不肖ニシテ。一事無可取者。蒲柳ノ弱質ナレ共。一點之豪氣有之。先師龍溪嘗云。好勝ト。是真ニ明鑒也。老拙討論古今。折中諸說。實出于此。非出于聖賢君子謀道之志也。其立身モ亦然。恥卑屈於人。故ニ惡衣惡食。足用保家。未嘗求助於人。但病身懶惰。不能謹細行。直情徑行。不好修邊幅。平日之言行。多不合禮義。然不好虛飾。故不掩之耳。可恥之多。與司馬公天地懸隔。老拙少年ヨリ負ケ惜ミヲセス。嘗テ云。余カ負ケ惜ミセサルハ。大ニ負ケ惜ミアル故ナリ。是實ニ小人ノ心腸。只徑々自好ノ陋態ヲ爲サル耳。擬人於其倫。足下勿誤稱。

五月二十九日

津阪氏祠堂制度祭禮儀節考御示被下候。貴藩大夫有志於禮。加様之儀ニ及候事。不堪感心候。老拙貧士祠堂ハ不思寄。セメテ世俗之佛間。茶人之圍ヒ程之事ヲ制候テ。二親ヲ祭申度存居候ヘトモ。御存之通り町借宅。左様ノ間ヲ立ツヘキ所ナク。少々之財モアラハ。地面モ求メ。家造モ可致ナレト。夫モ不及力。常ニ致慨歎候。拙子門人中モ。親没後。佛壇ヲ取置。儒禮ニテ祭ラント云。老拙云。足下ハ儒者ニアラス。祖考皆佛ヲ信シテ。佛事ニ安ンス。儒禮ニテ祭ル事。祖父ノ靈ノ安ンスル處ニアラス。祭祀ハ儒佛ニ拘ラス。誠敬ヲ主トス。小學問スルヨリ。物好ニ儒禮ニテ祭リ。誠敬ナキハ。不孝ナルヘシト。今世ノ學者。多ク是ニ類ス。津阪氏。唐流ノ物好浮薄ヲ誠ムル事。宜ナル哉。此考ニ制セラル、事。小藩ノ士大夫ハ辨スル事能ハス。大藩ニ仕ル人ニハ。大幸トイフヘシ。東陽翁篤學禮ヲ重セラル、事。可敬々々。老拙初學之時。東陽ハ先輩。非我倫。兩二度面會セシ迄ニテ不親。其後ハ互ニ學術之事モ不聞及。往年ヨリ書信ニテモ通シ候テ。互ニ相切磋モ可致ト。今更殘念ニ存候。御示ニ因テ聊附愚案致返上候。書損シ。補綴イタシ候。御用捨可被下候。美濃竹カ鼻孝子佐吉ノ事ヲ述ヘ。生時孝養ヲ懇ニ示サレ候。老拙今更悔之候。

六月二十七日

先達テ妄附愚見候下谷集。御朋友方御傳覽。御執政家モ御覽之由。愧入申候。御奉行勘解由君。右

御説ニ付。 莊子在宥ノ語ヲ書認候様御望之由。 承知仕候。 元來高槻ヨリ賤名御聞及之由。 是所謂枯木朽株有先容爲珍器ナリ。 且又老莊國字解之事。 御覽被成度由御申越被下候。 是ハ野拙壯年之時。 書林某毛利貞齋ノ莊子諺解之板致所持候處。 冗長ニテ。 卷數多ク。 當時一切不行候故。 簡明之國字解著シ吳候様。 野拙ヘ乞候。 依之外篇之始迄。 稿ヲ屬シ候。 然レ共野拙熟思候。 老莊議論過高。 往々誤人候ヘハ。 醇儒ノ非所可爲ト悔候テ。 半途ニ止メ。 高槻遊學之頃迄ハ。 尙草稿モ有之候。 其後遠國一書生首卷ヲ持去リ候。 餘リ反古ニイタシ。 只今ハ全無之候。 此段宜御斷可被下候。 野拙不排佛老。 間取其語候。 然レ共深入ハ不致候。 子夏所謂雖小道有可見者。 致遠恐泥之意ニ候。

臘月二十一日

論語古義之意ヲ主トシ。 朱注研究取捨。 古注併考ラレ候事。 簡要ト存候。 今時清儒之新説。 多疎漏タトヘ可取事有之モ。 瓊末之考證。 雖不知亦可ナリ。 朱竹垞曝書亭ノ集ニ。 唐虞ノ五刑ハ。 流也朴也鞭也贖也賊也ト云。 果シテ然ラハ。 流宥五刑。 如何可解。 爲君方喪三年ハ。 天子之喪四方來會ト云。 是不知古書稱君者爲諸侯。 可笑之甚也。 朱竹垞於清儒最稱博學。 其誤如此。 然ラハ清儒之説ヲ今人珍トスル事無用ナルヘシ。

市川野田氏ト折々御討論。 疑ヲ御蓄ヘ。 當秋面會之節。 御質シ可被成旨。 一般之義ニ存候。 當夏南

遊衆人ニ會シ候ヘ共。 皆詩人ニテ。 唯慕虛名相見ノミ。 須本附ノ足輕與井正助ト申人。 篤學之人ニテ。 數條疑問セラレ。 兩三度面語。 實ニ喜ヒ。 以後モ以書通可質問被申候。 稻田ノ儒者扱村瀧右衛門。 是モ數條疑問。 竹山逸史之事問候テ。 歸後逸史糾纏遣シ候。 是モ以後質疑可致ト。 南遊此兩人ヲ得候。 兎角蓄疑ニアラサレハ。 學問進ミ不申候。 近來余云。 中庸曰。 道問學。 孟子曰。 學問之道。 論孟之書。 多クハ弟子ノ問ニ對フ。 疑問ハ學ノ第一義ナリ。 疑問シテ切磋スルニアラサレハ。 要領ヲ得難シ。 秋來相切磋可致ト樂居リ候。

六月二十一日

大鹽平八郎貴家ニ兩日逗留。 如貴諭當時ノ豪傑。 學術陽明ニテ。 記誦詞章ノ徒ト大ニ懸隔。 有用ノ話可有之。 御感服之段察入候。 江戸ノ佐藤。 議論著實。 京師ノ村田庫山。 先日モ近著寫本。 醉鄉三種。 庫山日記ヲ示シ。 愚評ヲ乞候。 白沙陽明ヲ宗トスル故ニ。 愚見ト不合事不少候ヘ共。 要之心身ヲ治ル實學也。 老拙少年手島氏ノ心學ヲ學フ。 當時彼社中之高弟兩三人。 忘年ノ友タリ。 常ニ治心身ノ工夫ヲ論シ。 我身上ノ過ヲ無腹藏相正シ候。 其後儒學ヲナスニ。 一人モ如此ノ友無之候。 心學ハ不好候ヘ共。 於今老拙他ノ學者ト異リ候ハ。 少年心學ヲ爲スノ功ナリ。 虚心ニテ物我ノ隔無之。 他人ニ比スレハ。 名利之心モ少ク候。 讀書候テモ。 常ニ我心身ニ省之候。 今老拙ニ從フ門人伊藤齋藤

等。記誦詞章ヲナサル故。言語文字ノ外ニ。老拙ヲ信シ候。然レ共虛心ニ無之。手島門下ノ舊友ノ如ク。心ヲ洗被^{ホソ}爲候事ハ。出來不申候。然レ共只今手島門ノ師トナル人々ノ心術行事ヲ見候ニ。名ハ心學ニテ。實ハ口耳ノ學ニテ。是亦未弊也。前輩トハ大ニ劣リ候。以是觀之。古學モ。朱學モ。陽明モ。手島モ。一ニハ其人ノ賢不賢才不才ニテ。學術而已ニテモ無御座候。賢才之人ハ。何レノ學ニテモ。可取事多ク。賢才ニアラサレハ。何レノ學ニテモ可取事少シ。如貴論。學術ノ異同ヲ以テ。其人ヲ排スルハ。實ニ儒者根性ニ御座候。近世如來山人雖門下之士。不論學術之異同。唯以實用爲主。我輩ノ法トスヘキ所ナリ。

教諭所ニテ。老拙七日白鹿洞揭示ヲ講シ候テ。記誦詞章ノ爲ニアラサルヲ述候。然ルニ町觸ヲ見候ニ。北小路赤澤牧諸人。孝經孟子ニ添テ。古文眞寶蒙求左傳ヲ講シ候。是教諭ノ書ナランヤ。北小路老年ナレト。一向教諭之道ヲ知ラス。故ニ毎月二十一日二十二日二十三日ノ夜。手島靱負。薩埵與左衛門。鳩翁二人ヲ頼ミ。心學道話致シ候。是教諭ハ手島流ニ頼ミ候テ。加樣成講釋ヲ致候事。儒者ノ無用ナル事。彌明ニ見ヘ候。扱々困リ入候。發起人ノ中ニハ。老拙ヲ頼度思候人有之様子ナレト。北小路ノ意ハ。老拙モ牧善介モ同様之講釋ニオモヒ居候。夫故一度ニテ宜シト。又頼ミ不申候。

豬飼敬所先生書東集卷二

谷 氏

封國ノ事。左傳ニモ諸侯一同方百里ノ言有之候。是周初建國ノ制ニテ。後來小國ヲ并吞シテ然ルヤ。未可知也。サレト魯衛ナト。春秋ノ初ヨリ終迄。隣國ヲ并セテ又大ニナルコトヲ見ス。幽厲ノ時。俄ニ如此ニハ成申間敷也。故ニ孟子ノ地方百里・七十里・五十里ヲ田ノ數ト云フ說モアレト。左スレハ天子之地方千里ハ邦畿千里ニテ。田數ニアラサルコト分明ナレハ。上下乖戾シテ通セス。何レニ疑ナキコト能ハス。姑ラク百里ヲ周初建國ノ制トシ。春秋ノ時ノ大ナルハ。後來ノ并吞トスヘシ。余カ折妄ニ云。公侯百里。唯言周初建國之制。而未及論出賦之數云々。包咸何休。強以百里合千乘之數。可謂不解事矣。初ハ百里ニモセヨ。千乘百乘ヲ云フハ。春秋ノ時ノ事ナレハ。當時ノ實ニテ論スヘシ。左傳ニ云。成縣百乘。管子論國中去四境之數云。千乘ノ國。東西南北度。百五十餘里。コレ千乘百乘ノ地ノ實數ナリ。百里ヲ以テ千乘ヲ言フハ。元來愚蒙ノ說ナラスヤ。況ヤ西河ハ左傳中ニ於テ誤解スルヲヤ。余ハ建國ノ是非不論也。只千乘ノ制ヲ以テ。地ノ大小ヲ論スルノミ。孟子周人ナレト。井田ノ制ヲ論シテ。雨我公田ノ詩ヲ證トシテ。雖周亦助ト云。今清儒ノ考据ノ學ヨリ見レハ。覺束ナキコト也。四庫全書提要ニ。蘇轍孟子解ヲ評シテ云。以周官八議。駁竊負而逃。自有所見ト云。是愚

見ト合ス。蘇轍カ古史ニ。孟子ノ堯崩舜避堯之子ヲ。尙書ト合ハス。虛妄ト譏レルヲ。朱子曾孟辨ニ痛ク駁セラルレト。余ハ蘇子カ説ニ左祖ス。孟子ノ書中。堯舜湯武ヲ論セラル、フ。荀子ノ論ト五十歩百歩。皆平實ノ論ニアラス。余故ニ孟子ノ書ヲ悉ク信セサル也。足下封國ノ御疑モ理アリ。愚意如此。

二十二史劄記。往々誤字見エ候。卷十九 帝號標后諡ノ條。如唐高祖崩。合帝諡。曰太穆神皇后。此文不通。愚按。唐字下蓋脫高祖實后始諡穆皇后。太宗即位。更尊曰太穆皇后及二十一字一行。耘菘此説反誤。余有明辨。足下以爲如何。

簪曝雜記卷二。洪經略行狀ノ條。歸皇朝一年乃卒。上文ニ云。承疇崇禎十五年ニ降清。順治二年出經略江南。一年可疑。此本甌北全集ノ本歟。又ハ別本歟。若シ別本ナラハ。本集ノ本ニハ異文アラシ。御正シ可被下候。

昨年王阮亭ノ名ノ事。御尋被下候。此頃四庫全書提要ヲ讀候ニ。毎々王士禛居易錄ヲ引候。先年蔣良騏カ五朝實錄ヲ讀ム。聖祖諱。上字从一从玄。下字从火从華。世宗諱。上字 闕文 下字从示从貞ト。若然。禛字應諱避。今不然者。此寫本有誤。疑世宗諱。下字从示从眞。阮亭本名士禛。豈避世宗諱作禛耶。

八月廿七日

八月廿九日貴翰。昨夕到着。趙耘菘博通之人ニ候ヘトモ。劄記中。佛圖澄羅什等カ神異ヲ信シ。陔餘叢考ニ。神佛傳等ヲ信シ。老子出入於三教之間ト。是愚夫愚婦ノ見ニ似タリ。秦檜主和議ヲ是トシ。又韓岳ノ時。恢復ノ機會アリト云。相矛盾スト云フヘシ。諸葛孔明後出師表ニ云ヘル時勢ノ如クニテ。韓岳ノ輩。皆天下ノ士ナリ。江南ノ出ス所ニアラス。此機會ヲ失シテ。孝宗以後ハ名將無之。不能取勝。秦檜ノ罪何可未滅乎。十七史商榷。王叔文王泌鄭注李訓ヲ奇士ト稱スルカ如キ。識者ハ不與。

履軒。過秦論ノ仁義不施而攻守之勢異也。賈誼カ意ハ。以馬上取天下。不可以馬上治天下ノ意ニテ。取ト守ト勢異ト云フナラン。足下ノ意モ然ルヘシ。履軒ハ吹毛求疵。攻守ノ字ヲ執シテ。是ヲ駁ス。然レトモ元來攻守ノ二字。穩當ナラス。駁ヲ來スナリ。松崎ト太田ノ優劣。御尋候。松崎ハ雜博ニテ識見無キ人ト承候。太田ハ不行跡ニテ。自誇候故。人物惡敷。人惡ミ候ヘ共。學問見識ハ。松崎カ及フ所ニアラスト。愚意ニハ存候。

九月七日

尙々簪曝雜記 歸皇朝一年乃卒。貴家御藏本甌北全集ニハ。闕皇字。經略ヨリ朝廷ニ歸リ。後一年ト。御申越被下候。夫ニテ分明ニ御座候。皇字有之候而ハ。降參以來之様ニ聞ヘ。有誤脱ト

疑申候。

郝京山ノ易解。以乾爲太極。元亨利貞。朱子ノ說ニ從ハス。象傳ノ四德ヲ以テ解ス。其妄謬不可枚舉。然レトモ心ヲ究ムル故ニ。穿鑿ノ中ニ取ルヘキ說モ有之。互舛ハ余ハ不好候。九經談ノ評ニ於テ是ヲ說ク。況ヤ似互ヲヤ。京山ノ書解ハ。大抵舊說ヲ隱括シテ。甚簡略ニテ。間々其說ヲ附ス。得失アリト雖モ。易ノ如ク穿鑿妄謬ナシ。九經解大抵然リ。其舊說ヲ用フルモノヲ除キ。其發明ノ說ヲ抄寫スレハ。數冊ニテ足レリ。九經ヲ總解スルコト。大著述ニテ。舶來少キヲ以テ。今人珍書トシ。高價ヲ以テ爭購候ヘトモ。左程可賞ノ書ニモ無之候。然レモ簡明目錄ニ。歷代諸儒ノ詩文集ヲ多ク載候。老拙ハ元來詩文ヲ不好。李杜ノ集スラ未嘗讀候。其心ヨリ見レハ。多クハ閑文浪語ナリ。且毛奇齡カ諸著述ヲ載候ヘハ。郝氏ノ九經解モ載スヘキナリ。余謂簡明目錄ニ載ル書目。提要ニ比スレハ。大ニ少カルヘシ。然レトモ此多書ヲ紀昀不殘讀シニモアラシ。半ハ同僚ノ說ヲ聞テ書タルナラン。因テ其取捨モ品評モ。不當ノコト多カルヘシ。

老拙易ヲ不好。且先儒ノ易解。他經ヨリ甚多シ。コレ本文奇古ニシテ。色々ト說ヲ爲スヘキニヨレリ。因テ捕空繫風ノ論。其是非得失。不可究詰。畢竟無用ノ閑談也。老拙性質平直明快之說ヲ好ミ。迂怪隱僻ノ談ヲ厭フ。故ニ易ハ朱子本義ニ從ヒ。元亨利貞ハ占辭ニテ。義他卦ト同シ。象傳四德ヲ以テ說ク。詩ヲ說ク者ノ斷章取義ノ如シ。象及大象文言系辭。凡義理ヲ以テ說クモノ皆然リ。畢竟ハ郢書

燕說ナリ。十翼孔子ノ作ト傳ヘ來ル故ニ。人尊信スル也。歐陽公始テ系辭以下孔子ノ作ニ非ルヲ疑フ。本朝ノ伊藤父子。中井履軒。十翼ヲ併テ皆孔子ノ作ニアラスト疑フ。余之ニ從ヒ。斷然トシテ朱子卜筮之書トスルニ從フ。易ヲ以テ聖人ノ道ノ蘊奧トスル說ハ取ラサルナリ。然レトモ先天後天河圖洛書ノ圖ハ不取。清ノ聖祖ノ折中。東涯ノ通解。履軒ノ彫題。此三書ニテ本義ヲ補正シ。間々臆說ヲ附候。唯本經ノ文ヲ穩ニ解説スルノミ。卜筮ノ術ハ余不好レハ。其妙用ハ不知ナリ。愚意ニ。卜筮ハ決ニ嫌疑ニ猶豫ノ爲ニセルモノニテ。畢竟龜筮モ。擲錢投筊モ。其用ハ同シ。サレハ古易モ。梅花心易モ。我邦ノ弘法大師四目錄ノ占ナトノ類モ。決疑ノ用ハ一ナリ。古易トテ別ニ深奧ノ妙義ハアルヘカラス。或疑フ。唯決疑ノミナラス。古今達易ノ人。將來ヲ知ルコト神ノ如クナルハ何ソヤ。余云。是ハ其道ニ潛心ヨリ妙用ヲ生スルナリ。古聖建卜筮ノ本旨ニアラス。譬ヘハ黃帝ノ時。蒼頡作文字。コレ民用ヲ達スル爲ナリ。然ルヲ漢ヨリ以來。其巧拙ヲ論シ。鍾王等ノ書ヲ珍トシ。今ニテハ民用ヲ達スルノ實用ハ甚輕ク。無益ノ書ヲ高價ヲ出シテ玩具トナス。卜筮ニ妙ナルハ。書ヲ善クスルカ如シ。豈古聖人ノ本旨ナランヤ。是モ余カ書ヲ善クセサルヨリ出ルノ說ニテ。詩文ヲ好マサル故ニ。詩文ヲ閑言語トスルト同シカラシ。世ノ文才子卜筮者流ハ。喜ハサルヘケレト。豪傑ノ人ハ。必余カ說ヲ肯フヘシ。凡讀書ハ博覽ヲ尙フ。然レモ經學ハ先正シキ路徑ヲ會得シテ後。諸家ニ涉リ。其說ヲ取捨スヘシ。不然ハ多岐ノ惑アリ。反約ヲ得ス。

余二十三歳ノ時。在師家抱朴子ヲ首卷四五紙讀テ。甚退屈シ。コレ無用ノ書。急務ニアラス。他日間暇ニ讀ムヘシト指置。其後他書ニ此書ヲ引ルヲ見テ。毎ニ思フ。此書ヲ一覽スヘシト。未果。張思和ノ元眞子モ未讀。故ニ簡明目録ノ品評ノ當否ヲ知ラス。然レトモ貴意ノ如ク。此品評失スレハ。他亦此類多カルヘシ。コレ紀昀悉ク其書ヲ見テ評スルニアラシ。故ニ他人ノ誤説ヲ承ケタルモアラン。陸稼書ノ著述。三魚堂ノ集ヲ讀ミタルノミ。其人濂洛關閩ヲ專信ス。山崎闇齋ノ比也。讀朱隨筆。讀禮志疑。如貴説ナルヘシ。清朝醇儒ト稱シ。孔子ノ庶庭ニ配スル人ナレハ。其書必取ヘキコアラシ。余近來他人ヨリ禮家ト稱セラルレハ。讀禮志疑ハ一覽致度候。若御藏書ニテ候ハ。讀朱隨筆ト共ニ借覽致度候。

先日通鑑質疑中。唐太宗晉陽宮人ノ事。舊唐書ニ無之ト御聞及爲御知被下。忝奉存候。同綱目陳評有之候。次紙ニ宮人ノ事見エ候。其上ニ先是トアリ。當日質問之時。唐書裴寂傳ヲ見候。綱目ト同シク候。唐鑑ニ云。世民懼高祖不聽。與裴寂謀。寂因選晉陽宮人。私侍高祖トアリ。綱目ノ文ニテハ。先是ニ侍宮人ノ事アルヲ。此時言出シタリ。世民ニ賴レシ後ニ。故ト宮人ヲ待セシニアラサルカトモ見エ候。因テ陳評如此イヘルカト思ヒ候。故ニ新唐書ノ文ハ。綱目ト同シク。唐鑑ト異ナリ。陳カ舊史ト云フハ。舊唐書カト疑シナリ。舊唐書ハ實錄ニ本ツキタレハ。宮人ノ事ハ諱ムヘシ。新唐書ハ小説ヲ取ルトアレハ。舊唐書ニハナカルヘシ。今思フニ。唐鑑此事新唐書ニ依レハ。新唐書モ其

意ナルヘシ。陳評舊史ハ新唐書ニテ正其誤ト云フハ。綱目ノ意ニアラシ。

八月二十四日

尙々圖書編ノ三才圖會ニ勝ル。御同意ニ候。

啞囀爾其國ナケレハ。西域聞見錄ニイフコト虛妄也。是傳聞ノ誤ナルヲ。聞見錄ノ卷首地圖大ニ誤ル。余嘗テ是ヲ正ス。後大清會典ヲ見ルニ。其圖愚見ト合ス。蒲類海ヲ星宿海トシ。朔日見新月ノ類。虛妄ノ甚シキ。論スルニ足ラス。近頃佛國曆象編ニ。此書ヲ引テ其説ヲ證ス。余因テ此書ヲ讀ミ。其非ヲ論ス。詳余病間一適。

孫星衍問字堂集未讀候。尙書古今文注疏。此頃借覽致候。惠棟九經古義等ノ類ニテ。只古説ヲ集メ候。唐虞無肉刑ノ説。流宥五刑ニテ。其説已ニ不通候。象刑ノ者ヲ流サハ。宥ニハ非ス。曝書亭集ニ。堯典ノ五刑ハ。流也。鞭也。朴也。贖也。賊也ト云。コレモ流宥五刑ノ一句ニテ。其非顯然タリ。正ニ此説ト類ス。五歳三方ツ、巡狩スルカ如キ。一向事情ニ疎ナリ。考證ノ學。無發明於經義。無益於實學。恐此人ノ集。考證ノ外不足觀矣。孫星衍ノ説。往々有不如段玉裁者。

尙書撰異。全部恩借。千萬忝奉存候。久々他出。諸方ヨリ用事有之。書狀滯積。甚多務ニ候得共。大略一覽致候。古文今文ノ異ヲ辨シ。閔惠王鳳階ノ誤ヲ辨シ。誠ニ考證ノ密ナルヲ。感服致候。老拙固陋。往年尙書纂傳ヲ作り候。胡渭禹貢錐指ノ例ニ徵根氣不給。堯典臯陶謨ニ止ル。曰若稽古ヲ發端ノ辭

トシ。帝堯曰放勳五字一句。考證暗ニ段氏ト合ス。段氏ハ文字ノ異ヲ論スルカ主ニテ。經說ハ無之。老拙ハ頗管見アリ。商書以下ハ集說ニ述候。其間王鳴盛カ誤ヲ承テ。徵用三十ヲ鄭本二十ニ作ルトシ候類。往々有之。論衡及孟子趙注今本。二十ヲ三十ニ作リ候誤ハ。老拙モ正シ候。是モ段氏ト暗合致候。濯ヲ浴トスルハ。非ナルコトハ明白ナリ。彦繼按。孟子執熱ノ條ニ說。濯手以執熱物ノ說。履軒及足下ノ說。實ニ妙解ナリ。野拙貧家ニ生レナカラ。調食ヲ不好。故ニ庖厨ノ事。一切不解。貴說ニ因テ知ル。熱餅ヲ手ヲ濯テ執ルコト。歲杪ノ餅ツキニテ見及候。五井及愚說ハ迂也。二十年前。七經彫題讀候ヘトモ。愚說ヲ是トスル心有之故ニ歟。徒ニ見過。不覺候。生民ノ詩ノ御疑。御尤ニ候。愚意ニハ。我邦神代卷。及漢土諸史夷狄ノ初祖。皆神怪ノ事アリ。漢高隋唐宋明ノ祖モ亦然リ。王充及中井履軒ノ輩ハ。神怪ヲ信セス。虛妄ト云ヒ破レ共。必シモ不然。凡此類存而不論可ナリ。生民ノ詩。周人相傳ノ說ニテ作レハ。其意ニテ解シテ可ナリ。大戴禮。帝繫ニ從ヘハ。棄ハ元妃ノ適子。堯ヨリモ兄ニテ。天位ヲ嗣ヘキ也。然ルニ堯ヨリ少クシテ臣タレハ。其非知ルヘシ。克禪克祀。以弗無子ト云ヘハ。タトヒ高禩ノ祀ニアラストモ。神ヲ祀テ子ヲ禱ルコト必セリ。履帝武敏歆云云ハ。巨迹ヲ履テ妊ムヲ云コトナリ。是ニテ妊ハ人道ナキヲ云フナリ。是ヲ怪トシテ。子ヲ棄タルトセサレハ。棄ル謂レナシ。禱子ハ無夫ノ婦ニアラス。周人禱饗スレハ。饗ノ子孫ノ妃トスルコト。鄭說毛傳ニ優レリ。有夫テ妊ムヲ異トスルコト。先儒モ疑ヒアレハ。此詩ノ文面ヲ大略ニ解シテ。周人ノ說ニ從フテ可ナリ。人道感己ヲ

褻瀆トアレトモ。周人ノ所傳如此。漢高ノ母。夢與神交ノ類ナリ。此等畢竟祥瑞ヲ言フ耳。王鳳嗜漢高ハ龍ノ子ニテ大公ノ子ニアラスト云フハ。愚ノ甚キナリ。凡讀書。如此ノ所ヨリ。今日ノ理ニテ細論スルハ。返テ不通ノ論ナリ。故ニ愚ハ鄭孔ノ說ニテ大略ヲ解シテ。不深論ナリ。細論スレハ。彼通スレハ是塞ル也。時下漸催薄暑候。隨時御自愛可被成候。

四月二十二日

去秋借讀候。讀朱隨筆。讀朱子集候者ニハ益アリト存候。讀禮志疑モ。稼書道學先生ナレハ。禮ニ心ヲ盡セリ。學者モ益アリ。其誤ト存候處。聊標書致シ。今般返壁致候。此頃錢曉微ノ二十二史攷異ヲ讀候。宋ノ王旦。司馬光。文正ト諡ス。諡法ニ無正字。是文貞ナリ。諱ヲ避テ正トスト。諡法ノ文字。如此定リタレハ。諡爲至愚ト相如カ云ナリ。本ワケモナキコト也。余ハ此ニ倣ハジ。然レトモ他人ヲハ是ニテ攻ムヘカラス。

古人有ノ字ヲ單文ニ加候事。御示ノ孔疏ノ說ノ如シ。濟々有衆ノ類。國名ノミニアラス。然レトモ姓ノ上ニ加候事。古ニ例ナシ。御示ノ有嬴六朝ノ文。如貴意。不足据候。王者改姓易物ト云事。是真姒姓ニテ王タルカ。殷代テ子姓ニテ王タリ。王者ノ姓改易スルヲ云。王トナレハ舊姓ヲ改ムルニハアラス。潛邱カ說謬ナラン。足下舉湯武。潛邱カ漢高ヲ譏ルヲ駁ス。精密ト

云フヘシ。

陳祥道拜儀。余未是讀。周禮義疏。儀禮經傳通解等ニ。其說略見候テ。余モ取之。西河折妄ニ是ヲ載ス。病間一適御返シ。致落手候。此書一時ノ走筆。余カ略知曆學ヲ示スノミ。余昨年韓非ヲ増注セント思ヒ。徂徠ノ讀韓非子ヲ取捨シ。史記戰國策諸書ト對勘シ。韓子通一冊ヲ草ス。其後蒲坂氏ノ廣讀韓非子ヲ購求ス。大略愚考ト合ス。於ニ熟讀モセス打置候。近來津田ノ解詁ヲ一覽ス。蒲坂カ說ヲ皆收メ候。是ハ津田氏。蒲坂ヨリ廣讀韓非子ノ外ニ。蒲坂カセシ韓非ノ注ヲ借リテ此書ヲ著シ。其書ヲ全ク竊ムノ故。蒲坂大ニ怒リ。段々掛合有之。解詁板ヲ破却ニ及ヒ。此事金澤家中ニ委敷聞申候。津田學力乏ク。此書如貴意ニ御座候。荀子増注モ。無用ノ音注ヲ増候ト存候。新井ノ藩翰譜二三十年モ前ニ讀候テ。豊公ノ陰謀。一切覺ユ不申候。

乾隆御纂三經。簡明目錄ニ書ル如クナラハ。好書ト存候テ。八九年前一覽致候處。雨無正ヲ兩無正トスルノ類。一向不足取書ト存候。其年日野公關東御下向。御旅館ヘ錦城一齋同時ニ伺候ス。日野公三經之事御尋有シニ。錦城曰。關雎ハ鳥也ノ類。埒モナキ注ニ御座候ト。又一齋ハ名物訓詁ヲ略ス。眞ニ帝王ノ著述也ト申セシ由。御歸京ノ上御物語ヲ承リ候。錦城カ言。愚見ト合ス。一齋ハ陽明學ニテ。只心法ヲ論ス。其論毎々如此。厭フヘキナリ。

乾隆三經義疏。周禮ハ方望溪專ラ是ヲ主ル。故ニ其案皆方望溪カ集ノ注解ト合ス。近時清儒周禮ノ注

ヲ作り。是ヲ乾隆帝ノ說ト思ヒ。御案曰ト書ス。不堪一笑候。余周禮ノ諸注ヲ不讀候故。不敢評儀禮ハ敖氏ニ本ツキ。其解甚明白。三書中第一ト存候。禮記ハ疎漏有之候様ニ存候。大學中庸モ。他篇ノ如ク諸說ヲ載タキモノ也。朱子章句ヲ載テ一辭ヲ贊セサル。殘念也。余多年此二篇モ。正義存疑等ノ目ヲ立テ。諸說ヲ取捨セント存候得共。多病ニテ不果。今ハ老衰之上。四方ノ質問ニ應シ。甚多事無暇候。

去秋九月十六日發足。十九日津ニテ逗留。藩中諸儒ニ見ヘ談話ス。南疆釋史。潛邱劄記。惜抱軒集。皆學校ニ藏書有之。諸儒モ讀候旨承リ候。二十日山田ニ到リ。二十一日志州日和山。二十二日勢州朝熊山ニ登眺。天氣快晴。大樂志候。二十三日宮崎神庫ニテ冊府元龜ヲ閱ス。此書。歷代帝王ノ系統ヨリ。國制政制諸事。逐一題目ヲ立テ。歷史ノ文ヲ舉ス。誠ニ經世ノ考證ニ備フヘキ大好書也。其書ハ明ノ崇禎ノ末ノ刻本。文字端正悅目。憾ラクハ貧儒如此ノ書ヲ購スル。不能。其他ノ書籍一覽致候故。冊府元龜モ。目錄及一卷。僅ニ看過スルノミ。二十四日津ヘ歸リ。儒官川村貞藏氏ニ兩三日逗留シ。南疆釋史。惜抱軒集等涉獵セント乞候處。督學早速持來リ。彼學館ニテ論孟講釋頼入候。緩々逗留。書籍ハ不限之。可有借覽ト申サレ。幸ニ存候。半月餘リ論語ヲ講シ。其間。一貫。孟子浩然之氣。及論性諸章ヲ望マレ。町家ノ好學ノ人。學校ヘ出席セサル故。懇望ニテ。儒官ノ宅ニテ別ニ講釋ス。其他藩中ノ諸士。日夜來リ。質問及拙書ヲ乞レ候故。一向讀書之暇無之。僅ニ南疆釋史。潛

邱記ヲ略讀候ノミ。戴東原集。錢大昕集ヲ借携候而。十月二十二日歸京。外ニ校閱ヲ頼レ候諸書モ有之。久々他出故。歸後多用。略之。

姚鼐ノ經說。大義ニ於テ發明少ク。其說往々鑿ニ失ス。此人ノ學。程朱ヲ主トシテ。大見識無之。故ニ復簡齋書ニ。毛大可。李剛主。程綿莊。戴東原。與程朱爭名。爲天之所惡。身滅嗣絶ト云。是方望溪カ李剛主ニ答ル書ノ唾餘ナリ。筆記史部精確ニ存候。畢竟此人朱學ニテ。考据ヲ好メリ。不賢者識其小者ノ類ノミ。

潛邱劄記。初卷ハ抄書ナリ。正日知錄。釋地餘說ノ外ハ。文集ナリ。簡明目録ニ云。與日知錄並馳ト大ニ異ナリ。因テ四庫全書提要ヲ閱スルニ。未成ノ書ナレト。頗考證タルヲ以テ録スル由ヲ論セリ。紀昀ハ其書ヲ未讀。妄ニ如此ニ云フコナラン。段玉裁カ戴東原ノ年譜ニ。提要一首ヲ作ルコト云フヲ以テ推セハ。四庫全書提要ハ。其書ヲ校スル人。各提要ヲ作ル。是實驗ナリ。簡明目録ハ紀昀一人ノ作。本書ヲ悉ク讀マス。提要ニ依テ述ルモノ也。如此疎失多カルヘシ。

錢大昕潛研堂集ヲ讀ムニ。如御高教。教一本察。考据精密ノミ。大見識ハ見エ不申候。答問十五卷モ。十二史攷異ノ如ク。官制地理曆術ニ精ク。爾雅說文ニ最精シ。考据ノ學ハ第一等ト存候。コレ魯程門カ所以推之也。集中經籍纂詁序ニ云。詩烝民之篇曰。天生烝民云々。宣尼贊爲知道之言。而其詩述神山甫之德。本於古訓是式。古訓者詁訓也。詁訓之於人大矣哉。又小學攷序云。爾雅一篇始於周

公。故詩贊仲山甫之德。則曰詁訓是式。是直改古訓爲詁訓。又曰。張敞杜林以識字而爲漢名相。賈文元司馬溫公以辨音而爲宋良相ト。コレ詁訓ヲ以テ大事トス。其學術ノ卑陋知ルヘシ。余往年因讀史通。考得司馬遷書本名大史公。其稱史記者。魏晉以後之誤也。又著大史公律曆天官三書管窺云。中宮東宮南宮北宮西宮。宮字皆官字之誤。此二者ヲ獨得ト自負セリ。今般二十二史攷異ニ所云。此二者其考据。與鄙見如合符節。地理官制ノ考核。誠ニ超絶スレトモ。余年老方衰。其當否ヲ考フルコト能ハス。曆術ニ所云。余カ舊說ト小ク異ナリ。因テ今少シ暖氣ニ成候ハ。布算シテ是ヲ驗スヘキナリ。錢大昕カ根氣。中々老拙カ所及ニアラス。算術モ精鍊ナレハ。彼人ニ誤ハアルマシ。余カ疎失ヲ正スヘシト樂ミ居候。然レトモ獨智難周。往年余宋書諸志考文ヲ作リテ後。二十二史攷異ノ書アルヲ聞キ。余カ所作モ皆彼書ニ詳ナルヘシ。無益ノ骨折セシト嘆セシニ。堀江源兵衛カ云。人々ノ著述不必同。各有短長。必不爲無用ト。今是ヲ出シテ校ルニ。余カ考數十百條。皆無之。堀江氏ノ言。果シテ然リ。

戴東原集中ニ。孟子字義疏證ノ序アリ。答彭進士允初書。及年譜ヲ併考フルニ。此書。宋儒ノ理學老佛ニ出ルヲ辨セルモノトテ。其旨趣大抵伊藤仁齋ニ合スヘシ。余常書。明儒駁宋儒トイヘトモ。其說益虛高。要之不出於宋儒性理之範圍也。我邦仁齋獨見性理之非古學。可謂豪傑之士。不待文王者矣。今知戴氏有此見。彼士亦有人。憾不得孟子字義而考其說合否。然仁齋推自事理。東原

推自訓話。年譜丁酉正月。與玉裁書云。古今治亂之所在。訓誦下。東原ハ清儒中傑出ノ人ナレト。見識ハ恐クハ仁齋ノ下ニアリ。余往年仁齋ノ語孟字義ヲ評駁ス。淨書セシハ今他國へ借ス。初稿塗抹アレト。是ヲ書ニ附ス。是余カ見識ノ大概ヲ見ルヘシ。紕繆アラハ。亦御正シ可被下候。戴東原モ曆算ニ達ス。然レトモ周髀北極璇璣四遊解ハ甚謬ナリ。年譜云。丁酉定周髀算經。古本五圖爲舛僞者。一正之候。余壯年校正周髀。其圖四。皆舛誤。悉正之。與戴氏不合。憾未見其定本。水經注混入本文。余往年察之。卷首試正之。先年讀武英殿袖珍。始知清儒有此說。憾余已衰老。倦讀全書。但喜愚見之不妄耳。

左傳管窺。隱桓略卒業。莊公以下未脫稿。他日示之。

拙子履歷。師友淵源御尋被下候。余カ父ハ江州志賀郡坂本ノ産ニテ。本姓川喜多。四十三歳ノ二ツ子ニテ。同郡北船路村農民神職ヲ兼候猪飼氏ニ養子タリ。其後養家ニ男子出生。養家ハ義理ヲ立テ、其子ヲ他へ出シ。余カ父ニ家ヲ嗣カセントスレトモ。余カ父心ニ安ンセス。京へ出テ商人トナル。養家亦義ヲ立テ。實子ヲ他へ出シ。同宗ノ子ヲ養フテ嗣トス。余ハ一子ナレト。晩年ノ子ニテ。父老ヒテ家業繼難ク。姉ニ親族ヨリ婿養子ヲ取テ家相續ス。十八歳ノ時。父死ス。余性質病弱ニテ。商ヲ好マス。幼年手習ノ師ニ。四書小學ヲ素讀セシノミナレト。幼ヨリ繪草紙軍書等ヲ好ミ。少ク記性アリ。十三歳ノ頃ヨリ。手島先生ニ從ヒテ心學ヲナス。頗其徒ニ推サル。且母嚴ナル故ニ。行跡モ過失少ク。

老實ヲ以テ稱セラル。二十歳ノ頃ヨリ。讀書ニ志アレトモ。親類皆コレヲ不好候而。不能如意。二十二歳ノ暮。迎モ商事ハ拙ク。是ニテ身ヲ立ル事能ハス。讀書ハ所好ナレハ。生涯貧キヲ厭ハスト意ヲ決シ。母ニ請フ。母モ許サス。親族皆不得心ナレト。種々ニ乞候テ。遂ニ二十三歳ヨリ。岩垣龍溪先生へ一年半計リ寄寓ス。龍溪ハ古注ヲ講ス。サレトモ朱說モ撰取アリ。其後ハ他師モ無之。元來少ノ志有之。今人師友トスルニ足ラス。唯古人ヲ尙友スル意ニテ。龍溪先生方正ニテ。金言モ毎々聞フレハ。于今奉持スレトモ。學術ハ必シモ守ラス。龍溪先生二十五年前没セラル。其統ハ同門村上中所。岡田節叟繼承ス。其家ハ門人ノ中養子トナリ相續ス。今ノ大學音博士松苗コレ也。余モ始終師弟ノ禮ヲ失ハス。龍溪先生ヨリモ其作文著述ヲ示サレ。相談モ有之。身後上ニ云諸子ヲ世話セヨト遺話アリ。因之于今皆余ヲ親マレ候。拙子當年七十二。三十歳ノ頃ヨリ。未熟ナレト渡世ノ爲ニ開業致候。未嘗以詩文教人。只講明義理耳。世人ノ所不好故。門人モ少ク。同志ノ友モ無之候。近來虛名遠近ニ聞ユ。逐臭少シ有之候へ共。傳道ノ人ハ無之候。今時學者。余カ考勘ノ頗勤メタルハ。天文三禮等ノ世儒ノ不染指ヲ略解シ。且文理粗通スルヲ以テ。余ヲ推スト云ヘトモ。是余カ本意ニ非ス。他事ニ嗜好ナキ故ニ。是ヲ以テ樂トスルノミ。世ノ學者博涉ヲ好候ヘト。精究スル人ナシ。故ニ雖讀猶不讀。唯足下精讀強記。毎々正子紕繆。晩年得益友。憾目暗力衰。不能與共適道遠至。雖然尙勉強相長センヲ欲ス。去冬津藩ニテ講釋セシニ。藩士好武不好文ノ人。及執政諸有司。余カ説

文詞ニ泥マス。義理明白ニテ。今日ノ事務ニ益アリト感服セラレ候。是等不學ナレト。眞ニ余カ知己ナリ。是幼年心學ヲナシ。著眼言語文字ニ止ラス。世儒ト同シカラサル所也。今古學ヲ崇信シテ。心學ハ棄ルト雖モ。其先入スル所。主本不事末。其師恩亦忘ルヘカラス。少年ノ時ノ友モ亦然リ。其助ニテ放蕩ナラス。故ニ宗族郷黨ニ惡マレス。是以拙劣不才ナレト。世ニ輕ンセラレス。是皆師友ノ力ナリ。只學問ハ一得ノ愚アリト云。是余カ履歷。師友淵源ナリ。自誇ニ似タレト。敢テ實ヲ以テ答フ。京人ハ皆知ル所也。

去冬伊賀上野儒官服部右助。此人三禮ヲ研究ス。上京面會。孫星衍ノ尙書ノ解ノ事話セラレ候。當時ハ多用餘力ナシ。後來津藩ニテ借覽セント存候。津ノ督學。幼年ヨリ才子ノ譽アリ。彼藩ニ召出サレ。新參ニテ未四十。督學ニ任ス。大有志人ニテ。他人ノ才長ヲ舍テス。余カ愚得ヲ樂ミ聞カル。故ニ學校ノ藏書ヲ隨意ニ借サレ候。將又去秋彼藩ヨリ老拙ニ爲養老之資。出入扶持十人賜リ候得ハ。尙更書籍借覽致シ易ク。去秋ノ東遊。不圖此幸ヲ得候。

尙書撰異未熟讀。今暫ク御借可被下候。三月中旬。南遊可致候。其節ハ貴家ハ詩談ニ面會筆話可致候。此書モ返璧可致候。

去年御書中。歸有光ノ貞女論。愚意如何。御尋被下候。其論。余壯年ヨリ言論スル所ト合ス。錢大昕カ文集ニ。又不拘七去出妻ノ論アリ。今世俗ニ云。互ニ氣ノ不合ヲ強テ忍バズ。雙方ノ便宜ナリ。

此等拘ハル見ニテハ。非禮ニ似タレト。儀禮ニ出母アリ。豈皆犯七出乎。古今人情同シ。愚見ト亦合ス。

老衰記性薄ク。或記或忘。臨書存出候儘。跡ヤ先ト附書致候。雨中病眼ニテ書認メ。文詞不分明。宜敷御推覽可被下候。以上。

九日之貴書。十三日到着。以下畧之。本月二日。京師百五十六年之大地震。公家武家一同破損。甚シキハ家傾キ土藏倒レ。壓死往々有之。町家ハ空地無キ故。二三夜ハ大道ニ疊敷。夜ヲ明シ候。自後於今地震猶未止。兩三日ハ又度々大ユリ有之。其上家々土藏破壊。一同之事故。修理モ急ニハ出來不申。折惡敷度々出火有之。人心不安候。拙宅モ少シ損シ。土藏大破候。追々家破レ土藏傾倒モ有之故。他借及專用之書ヲ出シ。老拙耳目惡ク足蹇。諸人危ミ候ヘトモ。耳聾。震動ノ聲不聞。人ヨリハ畏心少ク候。膳所門人ヨリ迎來リ。暫ク彼地ニ下リ可申。親切ニ申來候ヘトモ。老拙統家事候ヘハ。此節他出ハ反テ不安心故。行不申候。先家内無事。日憑几案。不改其樂候。御省念可被下候。十七史商榷。遠方恩借。忝奉存候。以下畧ス。全部見畢候上。愚見モ有之候ハ。筆錄ニ可寄示候。古云。獨智難周ト。西莊ノ校正スル處。老拙是迄徒ニ看過シ。老拙カ漢初長曆。兩漢刊誤補遺正誤。宋書諸志ノ考文。大史公律歷天官三書管窺ニ校正セシトハ。西莊絶テ無說候。西莊モ西河ト同病ニテ。

動ハ他人ヲ不學無識俗儒ト罵リ候ヘトモ。晋書九。胡渭カ庾仲初名果之ト誤脱スルニ感慨シ。深悔ニ少年客氣多ト云フト。此書猶客氣多シ。大學云。無諸己而非諸人。妄ニ他人ヲ譏笑スヘカラス。余モ亦深自警云。

七月二十日

貴札辱拜見致候。去秋來書ニ。袁子才姚姬傳ノ文ヲ論セラル、事。愚意モ亦然リ。清儒以ニ方望溪文爲第一。錢曉徵其以詩文爲古人。然則望溪亦猶不得爲真古文邪トノ御尋有之候。余無文才。且不好詩文。和歌之類一切不好故ナリ。所謂古文ノ真假ヲ辨セス。古今ノ文集ヲ讀候モ。唯其議論經史ニ關スルモノ心ニ留リ。文ノ巧拙等ニハ心付不申候。然レモ愚意ニハ。辭ハ達スルノミ。何ソ時文ヲ賤ミ。古文ヲ貴ンヤ。文人ノ所謂古人ハ。唐宋八大家ヲ宗トス。唐宋八大家ノ文ニ。抑揚頓挫ノ曲折アリ。是ヲ法トスルモ。八股ノ文ト何ソ異ナラン。自然ノ文ニアラス。西漢以上ノ文ニハ。如此ノ法式ナシ。六朝ノ偶儷。明人ノ八股ナトニ拘縛セラレヌ。達意ヲ主トシ。巧拙ハ其人ノ才ニアリ。何ソ此ニ用心ヲアラント。清朝諸才子。誰不言其所爲真古文也。而互相譏。往年津藩齋藤拙堂嘗笑錢曉徵文不_レ得體ト。然レトモ是ハ各其所好ヲ實トスルノミ。然レトモ余平生我カ拙キ所ノ事ヲ妄論セス。其道ニ達スル人ニ讓ル。閻潜邱ト同志コレ唯足下ト云フノミ。敢テ他人ニ語ラス。

漿ヲ造ルノ法。余生質愚鈍。貧家ニ生ルト雖モ。飲食製造調味之事。一切不知候。幼ヨリ心學ヲナシ。性命道德義理ヲ究ムルヲ好ム。制度文物等ノ一ハ。實ニ土直トス。深衣凶服等ノ考ハ。解經ニ係ル故ニ此ニ及フノミ。世ニ好古ノ癖アル者ト大ニ異也。此類ノ事。一切考無之候。左傳二首六身下一如身。江永ノ說ハ如此讀候。何故ニ上ノ一ヲ下スヤ。愚按下位二箇トスルニ如カサルニ似タリ。賢考如何。彦續云。二首六身。先考別有說。

老拙治詩大旨。古人說詩皆斷章取義。固無定說。今爲經書。先解文義。徵諸經文。小序毛鄭不可盡從。朱子所說。近古人以詩喻人之旨。故宗朱傳。壯年讀納蘭成德經解。頗采諸家說。書朱傳欄外。范如義之說。亦有所取。余不好性理之說。不好清儒之漢學。唯義理平易正大之從耳。大鹽洗心洞劄記ハ文字顛倒モアリ。文意不通ノ處モ有之候。コトニ謬妄有之候ヘトモ。彼人ハ佐藤一齋朝川善菴等之如ク。余ニ正ヲ不_レ乞。故ニ一字モ削正ハ不_レ致候。舊冬空虛聚語ノ校讎ノ記ヲ見ル。此書ヲ余ニ贈リ。其學ニ誘入ントス。余カ我習アリテ從ハサルヤウニ譏リシ意アリ。余已ニ七十餘。彼カ聚ル空虛ノ說。幼年熟知スル所ニシテ。厭フテ棄ル者ナリ。自大ナリトシ。人ヲ小トス。可笑ノ甚ナリ。且七月余ニ一書ヲ寄ス。其意大ニ笑フヘシ。是ニハ曲折多シ。面會ノ時筆話スヘシ。彦續云。谷新介兩耳全聾。故ニ毎ニ筆話ノ語アリ

去冬津藩學校ニテ。藏書目錄ヲ乞。致一覽候處。和漢古今之書籍悉ク備レリ。數部新渡ノ書ヲ借覽

ス。然レトモ朝餽後學校へ出。五ツ半ヨリ四ツ半迄講釋。九ツ半ヨリ八ツ半迄又講釋。其中間一時計。隨意ニ讀書。短日故。歸寓居ハ日暮。夜旅宿ニ來リ講釋ヲ乞者アリ。他家へ招キ乞講アリ。應接不暇。人尙稱老健。右之様子ニテ。讀書モ出來不申。歸京之節。萬曆野獲編ヲ借リ歸リ。致一覽候。是ハ明史ニ見エ候事ノ委曲有之。當時之事實。風俗士風等明白。病中平臥。心ヲ慰メ候。蕭曇經史管窺。頗有發明。

晋書羊祜傳。慨然有并吞之志。コレハ羊祜國家ノ爲ニ。并吳一統セントスル。己カ貪欲ニアラス。故ニ慨然ト云フナリ。凡慨然トアル文。己カ貪欲ノ事ニ不應候。若アラハ其人ノ下字不當ナリ。

二月二日

竹書記年ノ事。眞偽相半ト存候。唯可信ト存候處ヲ取候。文武年壽ノ事。吳英カ説ノ如ク致シ。十年縮候テモ。文王五十而生武王也。從文王世子。則武王八十而生成王也。俗ニ云。アチヲフメハ。コチヲカアガルニテ。實ニ胸中ニハ不能無疑。古ノ事多ク此類ナリ。至此博覽モ考證モ歸於存疑。故ニ斷於理而不斷於證ト云フ者アルモ。宜ナル哉。尙後便愚意可申入候。

周易卦變ノ義ハ。老拙伊藤東涯ノ周易通解ニ。來知德カ卦綜ト稱シテ。剛來ノ來ハ。上卦ヨリ下卦ニ來リ。往ハ下卦ヨリ上卦ニ往ク。六十四卦。乾坤坎離中孚大過小過頤ノ八卦ノ外。五十六卦ハ屯蒙需

訟以下皆反對ニテ。泰ヲ倒スレハ否トナリ。否ヲ倒スレハ泰トナルカ如ク。是ハ六十四卦ヲ序次スル時ノ次第ニテ。往來ヲ云フ也。此卦ハ彼卦ヨリ變スルノ義ニアラスト。此説ヲ至當ト存候。足下素ヨリ此説アルヲ知ルヘシ。高意ハ如何。江慎修群經補義ノ説コレニ勝ラハ。後便ニ御示シ可被下候。山陽九月二十三日死去。老拙九月十日ヨリ勢州ニ下リ。送別絶句二首有リ。有獨有精神長不死。時於書卷暫相觀句。彼以余爲知己。其意可傷惜也。外史ハ十年前ヨリ余カ一閱ヲ乞フ。一昨年豊臣氏記迄讀候。通議兩三年前著ス。是モ一閱ヲ乞候。去夏四月膳所ニ遊シニ。余門人齋藤出雲。山陽ト親ク。山陽カ通議ヲ贈リシヲ彼方ニテ一覽ス。余云。山陽カ眼空古今。此議非拘儒所及。然レトモ其説モ亦有知一不知二者。如人君身執政權。不任宰相。守成之君。皆如創業之主。聰明達事乎。今如京師富民三井大丸者。尙且不能。况天子諸侯乎。其他議論亦有此類ト。山陽ハ才子故。學問ハ甚疎。二十二史ヲ二十二代之史ト云フカ如キモノ多カルヘシ。通議及外史中ノ牴牾踈謬ヲ盡ク筆記シ。御示可被下候御所存之處。持主ヨリ急ニ取還シ。不及其儀候由。山陽在世ニ候ハ、示候ハ、大悅可致也。扱々残念ニ存候。老拙ニ求此候ヘトモ。老拙事多事ニテ。未熟讀。將又一兩年已前著述ニヤ。本朝政記ト云書ヲ著シ。コレハ政在王朝間ノ政事ヲ記シ。論八十首有之候由。去秋發病後。門人ニ淨書サセ候。一昨日彼門人兒玉二郎ヨリ。山陽書後三卷題跋二卷ヲ示シ。疎漏ヲ校訂センコトヲ乞フ。書經書後諸文ヲ見ルニ。學問ハ疎ナレモ。大ニ有識。往々愚見ト合ス。宜ナル哉

平生余ヲ通識ト稱スルヲ。他ノ浮華文人ノ及所ニアラス。山陽少年無行ニテ。父ノ家ヲ繼クテ不能。コレヲ以テ世ノ正人ニ擯棄セラレ。惜カテ。近年志向正路。有孝於其母。先日モ齋藤出雲曰。山陽今四五年モ在世。先生ニ親交セハ。君子風ノ人トナルヘキニ。惜哉ト。余モ亦思ヘリ。彼聰明可共談正大之道者ト。二十年餘同ク京師ニ住シ。不相交。昨年四月以來親シクナレハ。病起リ。病中三四度訪シニ。尙與余論經史。舊臘余カ臥病ト聞テ。山陽カ寡婦ヨリ。十二歳ノ孤兒ヲシテ見舞ニ來リ。親シク病狀ヲ見來レト命ス。其親切ナルヲ。山陽ノ余ヲ信スル誠心。身後ニミユ。余於人有二悔。壯年不知履軒之學識。故不從之學。老年不知山陽之奇才。故不與之友。如此二子。豈易得乎。

舊冬津藩ニテ阮元研經室集ヲ借覽致候。此書足下御讀可被成候。論語一貫論仁等ノ事。長々ト論シ候ヘ共。宋儒ノ精微ヲ厭ヒ。膚淺ノ說ヲ爲ス。不足論候。禹貢三江辨モ從ヒ難シ。乾隆嘉慶二朝ニ大ニ用ヒラレ候人ナレト。識見淺陋ナルヲ。當時彼士ノ學者ノ風想フヘシ。經籍纂詁。十三經校勘記ナト。阮元カ本色ナルヘシ。外ニハ珍書モ無之。此節曝書亭集ヲ借り。病中細字ニテ難讀。未閱一紙候。

江戸水口ノ邸ニ住スル。宮田五溪ノ折妄弄丸。并拙著弄丸質疑。今般下シ候。五溪拙子ヨリ二三歳モ長ス。高年精方可畏。博覽ナレト。事情ニ不通ナル人ト存候。サレト江戸ヨリ來リ候儒生。皆不知

有ニ五溪候。然レトモ當時折妄ヲ讀ミ。如此ニ論スル人モ無之候。此是非足下ヨリ外ニ質スヘキ人モ無之候。無腹歲彼此之是非。御辨シ可被下候。

方望溪ハ禮記史記荀子儀禮。其他ノ書ヲ動輒劉歆カ竄入ト云フ。大ナル偏見也。儀禮禮記史記等當時ノ學者。傳授スル者多シ。劉歆盡ク是ヲ竄入センヤ。且漢ノ學者傳授ヲ重ンス。擅ニ如此スルヲ得ンヤ。方望溪カ專ニ任セシハ周官義疏ナリ。故ニ周官義疏ハ大略方望溪カ著書ト合ス。儀禮ト禮記ハ。他人總裁ト見エ候。義疏ト望溪カ儀禮ノ折疑ト不合候。

魏ノ文侯師子夏。魯穆公師子思。吳起師曾子。六國年表ニテ見レハ。年歷不合。老拙モ久ク疑居候。是モ孟子ニ齊伐燕ヲ宣王ノ時ノ事トスルヲ。史記ト年歷不合。司馬公通鑑。呂東萊ノ大事記ニ。色々ト齊王ノ在位ヲ増損スルノ類ニテ。史記ノ年歷。元來多ク誤リアルモ知ルヘカラス。凡此類存疑可也。妄ニ無證據ニ改ムヘカラス。

佐藤一齋大學一家私言。未見候。先年一齋ノ論語欄外書ノ評ヲ乞フ人アリ。拙評ヲ加ヘ還之候。其說ハ不全記候ヘトモ。不通ノ說多ク有之候。昨年一齋ノ愛日樓ノ集ヲ。日野公ニ托シテ評ヲ乞候故。十ニ九ケ條申遣候處。心服之旨ニテ。拜昌言ノ意ニテ。雁皮紙五帖。公ニ托シ贈リ候。詩文ハ精鍊ト見エ候ヘトモ。陽明ノ心學ヲ宗トシ。經義ニハ不竭心ト存候。一齋之文評ハ差置。彼ノ學術經解ノ偏失ヲ言遣セト。勸候人モ有之候ヘトモ。老年乏精力。無暇於此。且開爭端候ト存。是ハ不致候。拙

子門人東行。見一齋候へハ。逸史糾繆ヲ以テ。拙子ノ精密ヲ毎々稱シ候テ。松崎慊堂モ西河折妄ヲ奇トスル由。承及候へハ。一齋モ西河折妄ハ見申ヘクト察シ候。然レトモ陽明ノ學術ナレハ。瑣屑ノ論辨ハ決シテ不好ト存候。

祖冲之綴術入秀歐羅巴ノ説ハ。恐クハ確證アルマシ。是ハ梅文鼎カ曆算全書ニ。周髀ノ説入西洋。西洋ノ曆術ハ周髀ニ本クト云フノ類ニテ。漢土ノ人ノ癖ニテ。他國ノ美ヲ稱セス。皆我邦ヨリ出ル様ニ言ヒ候。戴東原韻鏡ノ三十六字母ヲ。儒ニ出テ佛ニ不出ト辨シ候ヲ。錢大昕カ誰人カ忘レ候。堯齋ナラシ。是ヲ不公ト論セラレ候カ。至極公ナル論ニ御坐候。此意病間一適ニ。拙子云候様ニ覺居候。先儒佛氏竊莊列ノ説モ亦然。夷狄禽獸ト外國ヲ蔑スルノ見ヨリ出ルナラン。

去年四月。山陽ニ會セシニ。十七史商榷。范曄ノ事。篤論ナルニ似タリト云。余宋ノ文帝。孔熙先ヲ親ク詰問シテ。其才ヲ惜マレタルヲ述テ。范曄カ子公主ニ尙セリ。豈他人ノ讒ヲ信シテ冤殺センヤト云。山陽首肯ス。因テ足下ノ韓愈カ傳ヲ歐公ノ改竄ト云フヲ駁スルヲ語ル。又足下ノ巖垣ノ國史略ヲ蕪雜ト評セシヲ語リシニ。山陽足下ヲ有識ト稱シ候。右貴答旁如此候。

正月二十一日

古文轉注考御上シ被下。熟覽致候處。愚考全不出其範圍。且徐鉉以前皆然。唯漢初雖五經無注。况

周代乎。以轉注之注爲注釋。余斷然非之者。愚之創論耳。而曹氏解注字爲流注。余則爲注著。其義小異。余未知孰是。敢請足下之判斷。余讀書不博。若非讀此書。漫夸管見。而不知前人已有其說。爲識者笑。多謝々々。彥繼云。轉注之說。先考別有考。

汪堯峯文集。說禮多與愚見合候。其不合者。亦可備一說。但論春秋葬我小君成風云。表姜母總麻之服ト。是非ナルニ似タリ。大夫以上無總服。雖士爲交後者。爲姜母無服。又書顧命。康王之誥二篇ヲ僞書ト云フ。武斷ニ過候ト存候。摩嶋松南ノ事御尋。依舊文雅風流ノミ。彼屬余二十餘年。未嘗質問經史一事。讀書泛然。唯資詩文耳。今時之學者皆如是。可嘆之甚。

先達ヲ惠半農禮說之事。御尋有之候。愚見ニハ其說迂濶多クト存候。惠氏一家之學。無識見。瑣々タル文義ヲ論シ候。

四月二十四日

七月十三日之貴翰廿二日着。來書曰。宋末博覽。王深寧爲最。而見識超邁。則黃東發無若焉ト。是天下ノ公論也。老拙廿五六歲ノ時。黃氏日抄ヲ一覽ス。論語一貫。四子言志ノ章ヲ說。及禮記ノ說數條。本書ノ上ニ標記致置候。子華子ノ如キハ。老拙壯年讀シ。黃帝登天ノ事ヲ論スルニテ。是漢後

ノ人ノ作ナルヲ。黃氏ノ此書ヲ子書ノ翹楚トスルハ何也。所謂智者千慮ノ一失ナリ。宋史ニ史彌遠ヲ姦臣傳ニ不載。加様之類。作史者之意ニテ。的當ナラサルナリ。晋書ノ如ク。類ヲ以テ集メテ。名目ヲ題セサルヲ可ナリト云説。近頃見及候。錢大昕カ趙翼カ。二人ノ著述ノ内ト覺候。

四月朔日

五月七日貴書。廿六日着。笠翁之事。如來論老拙モ存候。往年心疾ヲ患ヒ。數年廢學。其節傳奇小説等ヲ讀。消日月候。笠翁傳奇數種讀候。我邦ノ其碩。自笑。京傳。馬琴之類ニテ。大慰病情候。其人輕薄可_レ知ナリ。

水滸傳。神行大保カ甲馬ノ事。貴論ノ如クナルヘク候。老拙モ壯年小説ヲ好ンテ讀候。シカシ寓目ノミニテ。心ハ留メ不_レ申候。後世彼國ノ風俗人情ハ。是ニテ通シ候。水滸傳作者。地理ニ疎ナルコト甚シク。イカニ虛妄ノ話ナレハトテ。大名府ヨリ東京汴梁へ來ル生辰綱カ。梁山泊へ迂途シテ通スルヤ。九紋龍史進カ落艸スル桃花山ハ陝西ニテ。古ノ秦ノ地ナリ。後ニ魯智深史進カ桃花山ヨリ出テ來ルハ。梁山泊ニ近キ山東ノ桃花山ナリ。是古ノ齊ノ地ナリ。兩地相去ルコト數千里。名同シケレト。是ヲ混スルハイカナル事ゾ。其他モ此類多シ。此書彼土モ流行シ。人々是ヲ知ルニ。此書ヲ作ル程ノ者カ如此ノ誤アルハ。大ニ怪ムヘシ。足下定メテ是ヲ知ルヘシ。

西河折妄ノ價銀。致落手候。折妄ハ十年前高遠ノ中村カ乞ニテ著シ候。先日賴山陽經問ノ餘卷モ辨セヨト勸メラレ候。老拙日暮途遠。最早此類ニ費日候心ハ無之候。西河合集往年涉獵致候。其失多ク忘レ候。強辨奪理ハ其本色。老拙ノ此作。餘リ西河カ先儒ヲ輕蔑スルヲ嫉ミ。先儒ニ代テ。彼カ詞ヲ以テ彼ヲ罵ル。俗ニ所謂持タ棒ニテ叩クナリ。老拙好ミテ人ノ書ヲ辨駁ス。當世ノ劉知幾ト嘲ラレ候故。門人中ノ(松南)温厚ノ人ハ。毎々はヲ諫メ候。然レトモ老拙不才且善病。家貧ニシテ糊口ノ術無之。吾耕ニ費日。學業ニ専力スルコトヲ不得。唯此批評ニテ虛名ヲ得タリ。實ニ可愧ノ甚ナリ。此邦坊刻經問九卷。此中ニモ可取モノアリ。唯其妄ナルコトヲ辨折スルノミ。紀昀カ簡明目録ニハ。西河カ諸書ヲ載セ。頗ル左袒ノ意アリ。古文宛詞ナトハ。取ルニ足ラサル強説ナリ。簡明目録。此前數行ヲ虛ニス。余疑フ此前ニ本ト閣若璩カ古文疏證未見レトモ。王鳴盛カ尙書後辨ニ畧引之。閣是ニシテ毛非。黑白ノ如ク分明ナリ。然ルニ取捨如此。是ニテミレハ。簡明目録モ取捨公ナラス。古人ノ書取ルヘキモノ載セサルモ多シ。

京師諸儒御尋被_レ下候。此間ニハ毎々困入候。不知トイハ、詐ナリ。實ヲ云ヘハ長者ノ言ニアラス。京師ノ儒者。名譽聞候人ハ。皆文人才子。錦城カ所謂空詩浮文ニテ。經學ナトハ共ニ語ルヘキ者一人モ無之候。凡三都ノ儒者。世說蒙求唐詩選ノ類ヲ講シ。浮誇ノ詩文ヲ作り。口ヲ糊シ候者ノミ。二十年前。松本愚山衆中ニテ云。京師ノ儒者。余ヲ始メ皆虛名。唯豬飼一人實學ナリト。太田錦城モ云。

京儒唯豬飼一人。餘ハ小兒ナリト。老拙コレヲ語ルハ。自負ニ似タレト。實ニ然リ。愚山山陽ナト。平日門人經義ヲ問ヘハ。我ハ詩文ノミ。此類ノ六ヶ敷事ハ。敬所ニ問ヘト云候由。松南白谷等モ唯老拙ヲ推崇スルノミ。未嘗問ニ經義候。余ヲ以テ見レハ。山陽モ弱年ノ間ハ讀書ヲ勸メ候ヘトモ。弱冠後詩文相應ニ出來シ。後ハ諸國ヲ遊歴シ。几案ニ憑リ書ヲ讀候事ハ無之ト存候。白谷諸人モ亦然リ。才子ハ皆不勤學候。老拙カ門ニ入候人ハ。大率詩文ノ才拙ク。經義ニ志候。其間ニハ兼テ詩文ノ才アル人モ有之候。實學ニ志候人。多クハ學才無之。學才アル人篤實ナラス。夫故ニ傳道ノ弟子無之。是余カ憂ナリ。水野壹岐守殿家士。中村佐五右衛門。先年丹波ノ別邑ニ宰タリ。今ハ江戸ヘ歸ル。此人今四十計ナリ。少年ヨリ佐藤一齋ニ學フ十四五年。王陽明ヲ崇信ス。七八年前。余カ九經談ノ評ニ。陽明ヲ譏ルヲ憤リ。余ニ書ヲ致シテ是ヲ辨ス。余陳建カ學菴通辨ヲ示セシニ。翻然トシテ王學ノ非ヲ悟リ。夫ヨリ余ヲ信シ。經史諸書ノ疑ヒヲ。書ヲ以テ質シ。國字漢字往復。數冊トナル。此人實學ニ志候人ニテ。其所問皆學者ニ益アリ。此人實ニ余ヲ信シ候。其序ニ云。受一齋先生之教十五年。今雖不忍背之。道者公共之物。不得不然ト。一齋嚴正ノ人ニテ。實地ニ力ヲ用ヒ。俗儒ニ勝ルコト萬々。然レトモ王陽明ヲ信スルハ。實ニ聖學ノ眞面目ヲ知ラサルナリ。言志錄ノ題號當ラス。言志ハ其願フ所ノ志ヲ云フナリ。論語ニテ知ルヘシ。彼書ハ割記ナリ。言志ニアラス。日野公江戸ニテ毎々一齋ヲ召サレ。談話有之候。其所說皆陸王ノ說。余ハ一笑ニ附シ候。一齋數々余ヲ稱シ候由承

リ候ヘ共。余是カ爲不得諱候。一齋トハ未通ニ一書候。一齋著述ヲ余ニ質ストハ。跡方モナキ虛說ニ候。公寬云。此書ノ後。一齋日野公ニ托シテ。愛日樓文ノ正ヲ乞。又小學欄外書ヲ寄ス。ミナ書問アリ。前ト後トニ舉ク。當時江戸ニテハ。佐藤一齋松崎退藏兩人ヲ大家トス。松崎林家ノ學頭ナレト。性理ノ說ヲ不喜。故ニ一昨年。余カ往年著セシ理學類編ノ評ヲ見テ。大半其所見ト合ストテ。甚悦ハレ。主人大坂ニ在レハ。近年ノ中ニハ上京シ。敬所ニ見ント被申候由。膳所ノ藩士ヨリ聞候。此人ノ見。一齋ニ優ルト存候。京師ニ村田庫山。壯年ナレト。實學ニ志候。惜哉。此人陳白沙ヲ信シ。是ヲ祖述ス。是亦王陽明ノ類ナリ。余カ學術氷炭ナレハ。余ニ從ヒテ學ハス。然レトモ余ヲ信シ。其著述ヲ示シ。余カ意ニ合ハサル處ヲ駁セヨト云。余モ其實意ヲ知ル故ニ。忌憚ナク評駁ス。彼モ所見アル者故。余カ說ニ動かカス。然レトモ少モ是ヲ怒忌ム意ナク。又時々其著述ヲ示シ。以余之老。敬之如師。其志在學聖人。其門人モ信從多ク候。今時ニ稀ナル人物ニ候。余モ甚愛此人候。此人後來白沙ノ非ヲ知り。正學ニ歸セハ。大幸ト存候。前書ニ申入候通。余得足下ニ幸甚々々。起予ノ益所望ニ候。余已ニ老年ニ候ヘハ。緊要ノ大義ヲ御尋可被下候。細義末節ハ。讀書御勤ニ候ヘハ。自ラ明ニ候。

京師堂上菅家清家ハ。余ニ御學無之。夫故御學業之様子不存候。日野公才德學識兼備候テ。毎月詩會アリ。都下ノ文士參リ候。隔年江戸ヘ御下向。逗留僅ニ八日ナルニ。公事ノ暇。林祭酒・一齋・錦城・五山・天民ノ徒マテ召サレ候。當時公武御貴人中。第一ノ賢者ト世ニ稱シ候。而シテ文雅風流ニ止

ラス。讀書ヲ勤メ。經學ニ御志篤ク候。惜哉近來御多務ニテ。余一昨年ノ夏ヨリ不得拜謁。今春二月江戸御下向前。鳥渡拜謁致シ候。御道中赤坂驛ヨリ。老拙七十ノ壽詩ヲ給ハリ候。其末句ニ。七旬勤學益精微トナサレ候。是ハ去冬吳英ノ經句說ヲ御示シ。老拙其誤百餘條ヲ一冊ニ録シ。是ヲ附シ返上ス。此事ヲ指玉フ。是迄御著述毎ニ御示シ。博通精識ナリ。京師諸儒ノ及フ處ニアラス。竹屋前右兵衛佐殿。弱年ヨリ鶴膝風ニテ。御歩行ナサレス。御引籠リ。讀書ヲ樂ミニ被成候。老拙四十一歳ノ頃ヨリ招カレ。四五年前迄。毎月六度會讀ニ參リ候。四書五經大全。三禮義疏。通鑑綱目。十七史。其他諸書ニ御渡リ候。然レトモ此公ハ所謂典故家ニテ。朝廷ノ典禮ヲ專ラ學ハレ候。漢學ハ其考證ノ資ニテ。深究ハ不被成候。當時モ朝參ハ無之候ヘ共。朝廷ノ大禮。皆此公ニ命セラレ。古例御考被成候。堂上ハ不及申。地下官人諸大夫等。皆此公ノ門下ト成リ。律令格式國史考證ヲ學ヒ候。折々ハ以御使漢土ノ禮御尋有之候。此二公。朝紳中ノ選ニテ。老拙ノ知己ナリ。余モ壯年四書五經ヲ研究シ。正當ノ解ヲ著サント志セシニ。多病ニ累セラレ。徒ニ老不遂志。今春壽筵之節。彦繼云。七十壽筵也。賦詩諸人ヘ謝シ候。是實意ナリ。當時世ニ篤學ノ人乏ク。老拙ノ如キ虛名ヲ得ルハ。所謂事半古而功必倍ノ時ナリ。足下壯年。家富身閑。好學強識。真可羨也。願通聖賢之旨。明事理。達人情。而不止博通多識ナリ。

六月二日

子源ノ文章。簡潔ハ本色ナリ。彦繼云。古學辨疑ノ事ヲ答。老拙刪正ニアラス。所引ノ書暗記ノ誤ハ。往々有之。是ハ原書ニテ正シ候。冢田大峰ナトトハ文章大ニ勝レリ。龍艸廬六十歳ノ翁ニテ。壯年ノ人ノ作ヲ竊ミ。世ニ誇リ候事。己カ文章議論ニ大ニ勝レハナリ。荀子曰。竊貨不レ如竊名。艸廬真ニ惡ムヘシ。乍去艸廬カ竊刻ナクハ。子源没後七十年。子孫モ無之候而。此舉ニ及フマシ。老拙加州ノ從子ヘ此間書狀遣シ。今子源ノ名世ニ顯ル、ハ。草廬カ力ナリ。惡ムヘカラスト申遣シ候。野子賤モ徠門ニテハ頗名譽アリ。子源ト議論不合ト雖モ。其才ヲ稱ス。子源ノ一知己ナリ。此人ナクハ。子源ノ冤白スヘカラス。

三月八日

桃白鹿ハ雲州松江ノ儒臣。拙子ヨリ長スルヲ四十歳。三十五年前。八十ニテ没ス。名ハ源藏。世上ニ刻本行ハル、モノ。世說考。荀子遺乘。楊子法言補注。說苑考アリ。其他著述モ有之ト聞ヘ候ヘトモ。無板行候。往年書林ニ聞候ヘハ。元來林家ノ門人ニテ。雲州ヘ聘セラレ。學庸ノ注說アリテ。板行セントス。其嗣子義三郎。朱子ノ說ニ乖ク故。林家ヘ憚リテ是ヲ止ムト。此翁余カ管子補正ヲ讀テ。書林ヘ來ル書中ニ。此人年未四十。行爲天下大儒。如余所著諸書。應爲此人笑具ト。他ノ著述見タクト。書林ヘ申來ル。故ニ荀子考ノ草稿ヲ書林ヨリ示ス。寫畢テ。余ヘ書ヲ通セント云ヒシニ。